1

0052588000

0052588-000

295－82

盲学校物語

野地繁・著

交蘭社

昭和１６

AHO

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

76

田邊尚雄序
野地繁著

盲學校物語

交蘭社發行

帝國圖書館藏

295
82

序

嘗て私は雜誌『三曲』誌上に連載されたる野地繁君の「盲學校物語」を讀んで實に言ひ知れぬ興味を覺えた許りでなく、之に對して多大の尊敬を拂つて居る。それは第一に、彼の觀察と判斷とは實に正確である。此の點に於て彼は立派な科學者だと言へる。殊に町田前校長の性格に對する彼の觀察の正確なることは誠に頭の下がるものがある。第二に、彼は他人を見るに常に其の美點を發見し、決して他の缺點を求めて喜ぶの風がなく、溫情に滿ちて居る。此の點に於て彼は立派な道德者だと言へる。由來盲人には屢々偏見を有する者が多く、猜疑心に富む者が多いが、彼の如く心の清澄なるものは貴重なる存在といふべきである。第三に、彼の文章は正格で流麗である。此の點に於て彼は立

派な文章家だと言へる。盲人の文章は多くは隨話を筆記せしめたものであるから、一個の文章として見れば可なり變格のものが多い。然るに彼の文は實に精練されてゐて、水の流るゝが如き感がある。之れ亦實に讃嘆すべきことである。然しながら斯の如き條々を列擧すれば、或は未讀者は然らば彼の文は儒學者の文のように無味乾燥であらうと推測するかも知れぬ。然るに一度び之を讀むに至つて興味津々として盡きる所を知らず、思はず卷を蔽ふて大息するに至る。誠に彼は不思議なる存在であると感嘆すると共に、私が尊敬を禁じ能はざるものあるも理無きではない。今彼は其の「盲學校物語」を上梓し、廣く之を江湖に問ふ所あらんとするといふ事を聞き、私と同じ喜びを以て之を迎へる人が一人でも多からん事を希ひ、茲に一文を草して彼に贈る。

皇紀二千六百一年十月　　天山　田邊尚雄識

目次

入學……三
校長先生……七
盲人畫家……一三
奇遇……二〇
勸達ひ……二七
入舍當時……三四
下僕……四一
色盲と夜盲……四八
點字……五三

親切……五八
金の杖……六四
運動會……六九
狂言……七三
月夜の校庭……八二
淺蜊……八九
鴨川の水……九六
講習會……一〇〇
衣ずれの音……一〇八
一本氣……一一四
三感覺……一二〇
修學旅行……一二五

ザボンの砂糖漬……一三二
賄賂……一四〇
夢……一四四
電燈問題……一四九
カルメ燒……一五四
無鐵砲……一六一
輕はずみ(一)(二)……一六六
お呪禁……一六九
母の慈悲……一七六
天佑……一八〇
お吸ひ物……一八五
尺八會……一八七

笛の音……一九九
天眞爛漫……二〇八
見學……二一七
盲兒の感情……二二六
日本盲生徒の三特技……二三三
盲人雜感……二三九
一、河童　二、盲人の足
三、盲人の眼鏡　四、悟り
盲學校と社會……二四八

盲學校物語

入學

盲學校に入るのは嬉しいことか、悲しいことか――それは生れつきの盲目であるか、中途失明であるか、乃至はそれまでの環境がどうであつたか、といふことによつて考へが違ふやうである。生れつきの盲人は、不自由に馴れてゐるので、家庭さへ溫かければ幸福であり、從つて盲學校に入ることも、それほど悲しいとは思つてゐないやうだ。そこへゆくと、中途失明者の悲しみは深刻である。盲學校に入るのも、どうにもならないといふ諦めからくるのだ。

更生といふ氣持は、境遇に徹底しないことには、なり切れるものではない。中途失明は二十歳前後の青年期に最も多いといふことをきいてゐる。物事に感じ易いこの年頃に失明したら、どんな氣持になるか。悲しみの度は年齢によつて違ふ。自殺が青年期に多いのはこゝだ。

現在眼が見えて盲學校に入るのは、行末失明の恐れがあるからである。盲目と晴眼の間にある半盲の惱みもまた深刻である。それは視力があるだけに現實に對する執着が強く、中々諦め切れないからだ。私はその仲間の一人である。殊に私は盲學校に入るときは、それほど眼が悪くなかつた。

眼科醫である伯父は、暗室で私の眼の底を診て、「盲學校に入るのは惜しいなあ」といつた。父にしてもその通りである。

父も眼科醫である。眼科醫の息子が盲學校に入るといふのも運命の皮肉である。父も伯父も、たゞ私の將來を案じて盲學校入りを勸めたのである。

私は決心して上京した。今から二十年前のことである。私は伯父の病院に元書生をしてゐた加藤といふ當時東京の藥學校に入つてゐた男に連れられて上京した。四月の半ばで雨降りの日であつた。私は汽車の窓から、離れてゆく故郷の山や川を眺めた。雨に煙つた城山は繪のやうであつた。私の氣持はだん〳〵沈んで行つた。途中、或る驛に停車した時、私は水蒸氣でぼんやり曇つてゐる窓硝子を紙で拭つて外を眺めた。と、直ぐ眼の前に櫻の花が美しく咲いてゐるのが見えた。黑ずんだ小さな停車場の建物よりも傍らにパッと明るく咲いてゐる櫻の方が大きく見えた。雨の中に咲いてゐる櫻はまた格別の風情である。今でも上京當時のことを思ひ出すと、名も知らぬ小さな驛に限りなく美しく咲いてゐたあの櫻が鮮やかな腦裏に浮んで來て、懷しいやうな、寂しいやうな氣持になるのである。

上京した翌日、私は加藤さんに連れられて東京盲學校へ行つた、昨日の雨はからりと霽れて、暖かなよい日であつた。校門を入ると、前が運動場で左側には綺麗な砂利が敷いてある。

私は玄關で小使さんに來意を告げると、玄關脇の應接間に通された。私は、先生が來られるまでぼんやり正面の廣い廊下を眺めてゐた。校舍の屋根に鳩が巣を作つてゐるらしい。ぽう〳〵と長閑な鳴き聲がきこえる。少し經つと鐘が鳴つた。天井が高いのでよく反響する。授業が終つたらしい。すると急にあたりが騷々しくなつて、右の梯子段から左の梯子段から、また左右の廊下から、ぞろ〳〵盲生徒がやつて來た。廊下をいやにバタ〳〵音を立てゝ歩く者もある。兩手でパチ〳〵拍手をして歩く者もある。これは後で分つたが、衝突除けの危險信號である。壁を片手で擦すりながら歩いてゐる者もある。髭を生やした先生らしい盲人が兩手を前に出してのそ〳〵歩いて來た。私は背廣の服を着た盲人を初めて見た。先生は生徒より歩き方がおそい。顎を突き出して歩く者、頭を下げて歩く者——私は今まで一度も盲學校を參觀したことがなかつたので多勢の盲人を見て實に驚ろいた。

しばらく待つてゐると先生が應接間に入つて來られた。體格のいゝ晴眼者である。私に色々質問された上、簡單な學科試驗を課せられた。そして直ぐ入學を許可された。「まだ田舍から出て來た

ばかりで質朴だから、すれつからしにならないやうに氣を付けてやつて下さい」と先生は加藤さんに話された。おだやかな先生だと思つた。後で私は此の先生が教頭の岸高丈夫先生であることを知つた。

それから私は他の先生に案内されて一年生を受持の先生の所へ行つた。恰度按摩の實習中で、先生は赤い毛布の上に座つて、生徒に肩を揉ませてをられた。大勢の生徒は疊の上に座つてお互ひに揉み合つてゐた。赤毛布を敷いてゐるのは先生だけである。先生は盲人であるが髭を蓄へてをられるせいか、どこか先生らしいところがあると思つた。私は學校の中を一巡りして校門を出た。そして保證人の成田さんの家に行つた。成田さんは同郷の先輩で父の友人である。大藏省に勤めてをられた。成田さんの家は代々二本松藩の上席家老で三千石を賜つてゐた。賴山陽の日本外史には成田さんの御先祖のことが書いてある。當の成田さんは非常に情深い人であつた。

私は、その日の夕方、加藤さんに連れられて淺草へ行つた。人混みにまじつて仲見世を見、觀音様にお詣りをして附近の蕎麥屋へ上がつた。あたりは暗くなつて、電燈が煌々と輝やいてゐた。ネオンサインが赤く青く明滅してゐた。東京の夜は美しく明るいなぁと思つた。

私は賑やかな人通りをぼんやり眺めてゐたが、ふと、今朝見て來た盲學校のことを思ひ出した。あの騷々しい廊下の光景、赤い毛布の上に座つてをられる盲目の先生——私は急に地の底に沈んで行くやうな氣がした。成田さんが後で私に向つて仰言つた。「大學で眼を診て貰つて、大丈夫だといはれたら盲學校を廢めろ。何とも氣の毒でならぬ」だが、本郷の大學病院で石原博士に診察して貰つた結果は、やはり父や伯父の診斷と同じであつた。「盲學校に入つてゐた方がいい」と。私の運命は決まつた。

校長先生

私が東京盲學校に入學した當時の校長は、町田則文先生であつた。先生は、明治四十三年に創立された東京盲學校の初代校長として、就任せられたのである。それ以前にはお茶の水高等師範の教授をしてをられた。

私が鍼按科の四年生の時、先生に引率されて鎌倉に遠足をしたことがある。早朝、目白驛に集合して、そこから出發した。その日は朝から空模様が悪く、出かける間際にはポツリ〳〵雨が降つて

來て、向ふに着いた時には本降りになつてゐた。生徒は各自に雨具を持つてゐたが、眼の見える生徒は盲人の生徒の手を曳いて二人が一組になつて歩かなければならないので、銘々が傘をさすと、傘と傘とが打つつかつて工合が悪い。それで一本の傘に二人が入つて歩くと、お互ひに體の片側が傘の外に出るので濡れてしまふ。然し、こうして歩くより他に仕方がないので相合傘で行くが、遠足の時には辨當や菓子、果物などを携帶してゐるので中々氣骨の折れるものである。校長先生も私達と同様に、片手に傘をさし、片手に盲生徒の手を曳いて先頭に立つて行かれた。

賴朝の墓の所へ來た時、先生は生徒に御說明になり、墓をさぐらせて下さつた。何十人といふ盲生徒に一々手を取つて墓をおさぐらせになるのだから、先生の御召物はびつしより雨に濡れてしまつた。當時、先生は古稀に近いお年であらせられた。古色蒼然たる賴朝の墓を、老い給ふた校長先生が、勿體なくも雨に打たれながら、盲人におさすらせになつてゐる御姿を私は今も尙忘れることが出來ない。

雨で辷る坂道を下る時には、「皆さん、危ないから氣をつけなさい」と仰せられて、御自身は、先頭に立つて歩まれながら、始終後ろを振返られて、轉ぶ生徒はないかと、お氣遣ひになつてをられた。そして、休憩所に入つた時、先生は店の女中さんに向つて、「生徒に熱いお茶を上げて下さい。」と仰せられた。歸る時にも先生は秋雨そぼ降る中を盲生徒の手を曳いて行かれた。

或る年、私達生徒は先生に引率されて德川侯爵の南葵文庫を參觀したことがあつた。晝飯の時である。先生は私達より少し離れた所で、德川家の方と御一緒に食事を召されてゐたが、先生の御辨當は私達生徒の物と同じであつた。寄宿舍の賄が作つてくれた海苔卷壽司である。壽司といふと體裁がいゝが、干瓢の代りに、鰹節の粉を醬油に浸して、それを飯の眞ん中に入れた丈で、壽司を手に持つて食べやうとすると鰹節の粉がぼろ〳〵こぼれるといふ代物である。尤も、その頃の寄宿舍の食費は、一ケ月九圓五十錢で一日三食で僅か三十三錢なのだから上等な物が出來る筈がない。私は、先生が德川家の方の前で、その粗末な鰹節の壽司を平氣で召し上がつて居られる御樣子を眺めて目頭が熱くなつた。

「町田則文先生傳」を讀んで見ると、先生の御人格を偲ぶ數々の挿話がある。曾つて、先生が盲生徒を引率されて上野公園へ行かれた時、西鄕さんの銅像の前で、上野公園の歷史について生徒に御講演遊ばされたさうである。何しろ人出の多い場所のことゝて、見物人が忽ち黑山のやうに集つて來て、先生と生徒の周りをぐるりと取り圍んでしまつたさうだ。然し、先生は一向平氣で生徒に諄

々として說き聞かせられてゐたといふことである。今こゝで西郷さんの銅像で思ひ出したが、先生と西郷南洲とは、どこか風格に似通つた所があるやうに思はれるのである。左に阿部次郎先生の隨筆「西郷隆盛の話」の一節を拔萃して見よう。

『――薩軍が出征の勢揃ひをやつたのは琵琶湖畔である。(中略)西郷參謀が兵を閲するために馬に乘つて全軍の前に進み出て來た。ところが其處に一人の女が驅けて來て、西郷さんに取縋つて、泣きついて、どうしても離れやうとしなかつた。見ればそれは京都で彼の馴染んだ仲居のお辰である。彼女は、「西郷はん、行かずとおくれやす、行かずとおくれやす」と云つて、なだめてもすかしてもきかないのである。西郷さんはみんなの前で恥かしがる樣子もなく、眞面目にしんみりと、「おたつ泣くな、おたつ泣くな」と云つて自分も涙聲になつて彼女をなだめた。これを見ても全軍は一人も笑ふものがなかつた。却つてみんながしいんとしてしまつた。(以下略)』

全軍の將兵の前で女に泣きつかれても體面にかゝはるとか、恥かしいとか、そんなことを少しも考へないばかりか自分も涙聲になつてやさしく女を慰さめたといふ西郷隆盛の純情、不幸な盲人のためには黑山のやうな人集りも眼中になく、諄々と歷史を說き進められた町田校長の邊幅を飾らぬ態度、それも西郷さんの銅像の前であるとはまことに好一對の挿話ではないか。

先生は篤學者であらせられた。語學、殊に獨逸語は、時の文部大臣も感嘆したほど御堪能だつたので、彼の地の盲人敎育學や盲人心理學其他盲敎育に關する文獻を多數飜譯して、我國盲敎育界のために貢獻あらせられた。先生の御趣味は音樂で、自ら音樂科生のために音樂の講義を遊ばされた。女子高等師範の敎授時代には名だたるアルトの歌手だつたさうである。

私は在校中一度先生からお叱りを受けたことがある。或る日、晝食後、妻楊枝をくはへながら寄宿舍から學校に通ずる廊下を歩いてゐると向ふから先生がお見えになつた。先生は私に向つて「楊枝をくはへながら歩いてはいけません」と注意された。私はハッと恐縮して其場を立ち去つたが、つく〴〵自分のだらしなさが恥かしくなつて、それ以來、先生の御訓戒に背かないやうにして居る。

私は卒業の年の夏休みを沼津の海岸で暮したが、その時私の下宿してゐた宿屋の主人といふのが、偶然にも先生とは舊知の間柄であることが分り尠らず驚ろいた。宿の主人は、これも何かの御緣だといつて、私が泊つてゐることを先生にお知らせした。すると先生から早速主人に御返事があつた。主人はニコ〳〵して半ば得意氣に私に先生からいたゞいた御手紙を見せてくれた。文面には

私の學校の生徒が滯在してゐるさうで、何かと世話になつてゐることゝ思ふが、どうか此の上とも面倒を見てやつてくれ、賴む。といふやうな意味のことが書いてあつた。先生は謹嚴な半面に、こうした溢れるやうな溫情を持つてをられたのである。

先生は、私が卒業した翌年に御逝去遊ばされた。享年七十四歳であらせられた。

先生の御葬儀の日に先生の親しい御友人であつた國文學の大家吉田彌平先生が述べられた弔辭の中に、先生の御性格を偲ぶ左の如き一節がある。

「――君ハ時ノ流ヲ追フ人デハアリマセン中流ノ砥柱タル人デアリマス君ハ技巧ノ人デハアリマセン一直線ノ人デアリマス公正度ニ過グルホド公正無私ナ人デアリマス文字通リ淸廉潔白ナ人デアリマス恪勤勉强知識慾ニ燃エサカツテ書物ヲ貪リ讀ム人デアリマス君ノ遺サレタ稿本ハ積ンデ山ノ如クナツテヲリマス(中略)――君ヲ見レバ古武士ノ風格ヲ偲ビマス嗚呼斯ノ人一タビ去ツテ復斯ノ人ナシ哀シイカナ。(後略)」

盲人畫家

私が盲學校に入學する時、伯父(眼科醫)は私に向つて、「東京盲學校に鳴原といふ人が入つてゐる筈だから、向ふに行つて分らないことがあつたら鳴原さんに訊くがよい。鳴原さんは中途で盲目になつた氣の毒な人だから、よく面倒を見てやれよ」と言はれた。それで私は上京して初めて盲學校に行つた時、先生に案内されて鳴原さんのゐる教室を訪ねたら、恰度按摩の時間で、鳴原さんは多勢の生徒に混つて、覺束ない手つきで肩を揉む稽古をしてゐる所だつた。私が「鳴原さんですか」と聲をかけたら鳴原さんは、「はあ」と一寸驚ろいたやうな顏をして聲のする方に面を向けた。

急に失明すると外界の刺戟がすべて突然に起つたやうに感ずるらしく、名前を呼ばれたゞけでもびつくりするらしい。鳴原さんは「どなたですか」と沈んだ調子でたづねた。顏色は白いといふよりも幾分蒼味がかつてゐた。眼は失明したといつても、眼球に異狀がないので、一寸見ると晴眼者と少しも變りがない。澄んだ瞳は寧ろ普通の人より美しい位だ。袷の着物にセルの袴を穿いてゐた。背丈は五尺をやつと出た位の小柄な體格であるが、別に痩せてもをらずどこか落付いた感じの

する人であつた。私が自分も盲學校に入るやうになつたことゝ、伯父から傳言のあつたことを簡單に話したら、鳴原さんは蒼白な頰をさつと紅潮させて「ああ、あなたが此の學校へ……」と周圍のことも忘れて叫んだ。授業が終つた時、鳴原さんは、私を寄宿舍の自分の室に案内して、れた。

失明してからまだ半年位しか經たないので、學校から寄宿に通ずる廊下を歩くのも覺束なく、片手で廊下の壁をさすりながら、柱の數を一本二本と算へてゐた。室に入ると鳴原さんは「學校に入つたら先づ點字を覺えなければなりません。私も漸く書くことを覺えましたが、まださすつては充分に讀めません」と云つた。指の先で點字の本を擦すつて讀める樣になるのには、相當の日數を要するさうである。鳴原さんは私に點字でイロハの文字をボツリ〳〵紙に穴を開けて書いてくれた。「この點字盤は一番字が大きいのです。馴れたらもつと目の細かい點字盤を買ふ積りです」といつて、點字盤に種類のあることを敎えてくれた。イロハの文字を全部書き終ると、その紙を點字盤から外づして私に下さつた。「俄かめくらなものですから、机もこうして物が落ちないやうに注文してこしらへました」といつて、鳴原さんは手掌で机の上を撫でまはした。机の周圍には一寸位の高さの緣がついてゐた。點字を書く鉛筆は點筆又は鐵筆といつて、芯が細い鐵の棒で出來てゐるのであるが、その點筆に紐をつけてその先を點字盤の定規に結び付けてあつた。かうして置けば、點筆が轉がつても大丈夫だからである。

鳴原さんは自分が太陽の光線も電氣の光りも分らない盲目となりながら、私のことを「お氣の毒ですなあ」としきりに云つてゐた。私は上京する時寄宿舍に入る積りでゐたのであるが、滿員だつたので本鄕曙町の保證人の家に厄介になつて、そこから每日通學してゐた。そして學校の授業が終ると鳴原さんの室へ遊びに行つて時を過ごした。或日鳴原さんは寄宿舍に入つてからまだ一度も外出したことがないから、一度外に連れて行つてくれないかといつた。私は喜んで鳴原さんの手を曳いて外に出た。鳴原さんは久しぶりに外に出て氣持が晴れ〳〵したといつた。

盲人だからどこに居ても同じやうに思ふかも知れないがさうではない。こうしておもてを歩いて電車や自動車や人の通る音をきいてゐると氣持が生き〳〵するといつた。そしてこの邊に煙草を賣つてゐる家はないか、ときいた。寄宿に入る前までは煙草を吸つてゐたのであるが、寄宿舍では喫煙を禁じられてゐるので吸ふ譯にゆかず、實に辛いといつた。私は赤い看板に白く「たばこ」と書いてある店を見付けて朝日を一函買つて上げた。私がマツチをすつて煙草に火を點けてあげたら、鳴原さんはぐつとうまさうに吸つて頰をふくらませながら、紫の煙を柔らかに口から吐いた。「久

しぶりで吸ふ煙草の味は何ともいへませんなあ、頭がからりとしました」といつて滿足さうな顏をしてゐた。煙草を吸ひ終つたあとで鴫原さんは腰を蹋めて吸殼をそつと足許のところに持つて行つた。そして下駄の齒の下にその吸殼を置いて用心深さうに、踏みつけて火を消した。初めの中は喫煙の際、私が一々マツチに火を點けてやつたがその中に鴫原さんは卷煙草を口に咬へ、マツチを煙草の先にくつつけて、マツチを摩つた瞬間に煙草を吸つて火を點けることを覺えた。マツチと煙草を密着させて摩るので鴫原さんの人指し指と親指の爪は煙りに燒けて褐色になつてゐた。

鴫原さんの前身は日本畫家である。號を雪華といつてゐた。私の町から二里ほど離れた本宮といふ町に住んでゐた。畫名が追々世間に知れて來て、愈々これからといふ時になつて急に失明したのであつた。日本畫壇の巨匠荻生天泉氏とは親戚であるといつてゐた。鴫原さんが失明した時、荻生氏は「あゝ惜しいことをした」といつて嘆息されたさうである。

鴫原さんは小學校の先生もしたことがあるさうである。そのためか盲學校に入つてからも何か會があつて壇上に立つて話す時には實に落付いたもので、聽く者に自然と尊敬の念を起させたものである。失明したのは二十四歳の時で盲學校に入つたのはその翌年の春である。

鴫原さんに失明當時の話をきくとこうである。鴫原さんは美人畫を好んで畫いたさうで、眼は普通の人よりも見える位だつたさうだ。或る夜、奈良朝だつたか平安朝だつたか、時代は忘れたが昔の美人の畫を描いてゐると、下書きの髪の毛がはつきり見えないのに氣が付いた、美人畫の毛髪は一本々々細い筆で描くのださうであるが、いくら凝視(みつめ)ても細い毛髪の線がよく見えないので、變だなあと思つて翌日、近所の眼科醫に診て貰つたら網膜炎だといはれたさうである。鴫原さんは尙、念のため私の伯父の病院に來て診察して貰つたら、伯父はこれは視神經萎縮である、と診斷を下し早晩失明するであらうといつたさうである。これは鴫原さんが畫家であり、又鴫原さんの親類に當る人と伯父とは懇意な間柄だつたので、率直に話したのださうである。そして將來の方針を早く決めた方がいゝと伯父に云はれたので、鴫原さんは非常に前途を悲觀したさうだが、これ以上眼を惡くしたくないと思つて、毎日伯父の病院へ汽車で通つた。然し視力は次第に減退して來たさうだ。そして或る日病院に通ふ途中、誤つて川の中に落ちたさうである。あゝ自分の眼もこんなに惡くなつたのか、と鴫原さんは濡れた着物を絞りながら泣いたさうである。鴫原さんは、猶一縷の望みを抱いて仙臺の大學病院に行つて診て貰つたが、其處でも、やはり晩かれ早かれ失明の運命にあると宣告されたさうである。

その仙臺に行く車中のことであるが、鳴原さんを乘せた汽車がある一寒村の驛に停車した時、一人の百姓らしい人が乘車して、鳴原さんの前の席に腰かけたさうだ、そしてその男は窓を開けて驛まで送つてくれた子供に向ひ、「なあ、おめえ、歸る時踏切に氣を付けろよ、分つたか」と朴訥な調子で注意してゐるのを傍らで聽いて、鳴原さんはハラ〳〵と涙を流したさうである。あゝ親は有がたいものだ、と鳴原さんは美しい親子の情に泣くと同時に、俺が失明したら、親はどんなに嘆くであらうと、親心を思つて又泣いたさうである。

急に失明した鳴原さんは決心して盲學校に入つたが、初めて先生の肩につかまつて按摩を敎へられた時には、思はず泣けてしまつたさうである。畫家として彩管を揮つてゐた身が闇黑の世界へ——この境遇の激變が鳴原さんの心を搔き亂したのであつた。

盲學校に入つてからも繪のことは片時も忘れられないと見えて、上野に帝展や院展が開かれると、私に繪葉書を買ひたいから外に連れて行つてくれと云つた。鳴原さんは繪葉書屋の前に立つて、畫家の名と畫題をきいて、それも買はうこれも買はうといつて繪葉書を澤山買ひ集め、上機嫌で寄宿に歸るのであつた。そして繪の模樣をきいて、この人は、こういふ繪を畫くのが得意だとか、誰の門下だとか、何度入選したとか、いつて私に說明してくれた。鳴原さんは繪の話となると顏が活き活きと輝やいてゐた。又繪の雜誌を買つて私に讀んでくれと云つたこともあつた。

或る日、私は鳴原さんの手を曳いて學校からほど遠からぬ江戸川公園へ散步に行つた。細長い公園の中を步きながら鳴原さんは樂しさうに繪の話をしてゐた。すると向ふから大學生が三四人連れでやつて來た。そして鳴原さんの傍らをすれちがふ時に、鳴原さんが繪の話をしてゐるのをチラと耳に挾んだらしい。「おい、めくらが繪の話をしてゐるぜ」と冷笑的に言ひ放つて通り過ぎた。鳴原さんの顏色はさつと變つた。急に默つてしまつた。——暫らく經つてから溫厚な鳴原さんは靜かに言つた。「なるほどめくらが繪の話をすると變にきこえるでせうなあ」それから後は道を步いても決して繪の話をしなくなつた。

鳴原さんは學校を卒業した年に病氣で亡くなられた。享年二十九歲であつた。

本宮の町はづれ、阿武隈川の近くに鳴原さんの墓がある。靜かな墓地だ。夏になると時鳥が鳴く。私を墓に案內してくれた鳴原さんの妹さんは「やさしい兄でした」と云つてゐた。

私はお茶は好きであるが、さうかといつて自分でお茶を立てゝまで飲みたいとは思はない。盲學校の寄宿舍に居た時も茶道具を持つてゐなかつた。私が學校を卒業する年に私達が組織した尺八曉思會の演奏會を開いたことがある。其時、贊助出演される方々のために控え室に、茶菓を用意して置こうと思つて、會の主だつた人達と相談した上、菓子は洋菓子、お茶は極上といふことに一決して、何でも非常に高價なお茶を買つて來て、それを大きな土瓶だか藥罐に入れてお茶を立てたら、學校の先生から、こんな上等なお茶は急須に入れて飲むものだといつて笑はれたことがある。これを見てもお茶の良否も値段も知らなかつたことが分るのである。

尙、その時の笑ひ話であるが、ケーキも江戸川の大きな菓子屋に注文して取り寄せた。菓子屋が演奏會の前日にケーキを大きな函に入れて寄宿舍に屆けてくれた時、鼻のいゝ盲生徒たちは、「うまさうな匂ひだなあ、涎が出るぜ」といつて食ひたがつたものだ。「おい、食つちやいけないよ、あした出すんだから。なあに、演奏する人達は、みんな上品な人ばかりだから手をつけやしないよ。會が濟んだら君たちに分けてやるから待つてなよ」といつて戒嚴令を布いておいた。

さて會が終つてから控え室に行つてみると、ケーキが一つも殘つてゐない。綺麗にみんな喰べられてしまつた。生徒たちはアテが外づれて「意地の汚ない奴ばかりだなあ」といつてケナしてゐた。どつちが意地が汚ないか分りやしない。

私が吉田晴風先生の所へ稽古に通つてゐた時、必らずお茶を出されたものである。弟子にお茶を出されるのは尺八の先生ばかりらしい。これは咽喉が渴くからだらうか。とにかく稽古が濟んでから喉をうるほすお茶の味は又格別である。家にゐる時にはガブリと一口に飲んでしまふお茶も先生の前ではさうはゆかない、少しづつ飲む。お代りが出來ないと思ふと餘計おいしいやうな氣がする。お茶のうまさは、尺八の稽古で初めて分つたといつていい。

私が寄宿に居た時分に、多胡といふ生徒が居た。多胡さんは殆んど盲人といつていゝ位視力が減退してゐた。讀書は勿論點字に賴つてゐた。非常に人なつこい人で、殊に上級生に對しては謙讓であつた。

多胡さんは色素性網膜炎のために、中學を中途で退學して盲學校に入つたのださうである。多胡

さんの兄さんも鄉里の岡山の六高を卒業して失明されたといふことをきいてゐる。多胡さんの趣味は數學で、毎朝起きてから少しでも數學をやらないと飯がまづいと云つてゐた。難かしい代數や幾何の問題を頭の中で考へてゐる時には、身體の不自由なことも、何もかも一切忘れてしまふと云つてゐた。一寸會つた感じは、寄宿に居てもドテラなど着込んであぐらを掻いてゐるので、ズボラに見えるが、中々思慮の深い人であつた。

冬の或る日、多胡さんは私の室へ遊びに來た。しばらく火鉢を圍んで話をしてゐたが、その中、多胡さんは私に向ひ「お茶は好きですか」ときいた。私が好きだと答へたら「ぢや、お茶を持つて來ませう」といつて自分の室に歸りお茶の道具を持つて來た。私は殺風景な寄宿舍に茶道具を一揃へ持つてゐる多胡さんが、何だかとても風流な人のやうに思はれた。

「お茶は好きですか」と今度は私がきいたら「大好きです」といつた。多胡さんは火鉢の上にかけてゐる藥罐を取つて急須の中に湯を注いだ。そして急須に蓋をして茶碗にお茶を入れた。茶碗に八分目位入ると急須の首を上に擧げて注ぐのを止め、お盆の上に置いた。

「さあお上りなさい」と私にも勸めて多胡さんはおいしさうにお茶を飲んだ。私は多胡さんのお茶を立てる手つきを見て感心した。

多胡さんは盲人も同樣である。それなのに煮えくり返つてゐる藥罐の湯を急須に入れる時にも、急須から茶碗にお茶を移す時にも、手さぐりもせず上手に注いでこぼしたりしない。

「よくこぼさないで注げますなあ」と私が言つたら、「馴れゝば見えなくても出來ます」といつて笑つてゐた。

私は多胡さんが寄宿舍に入舍した當時のことを今でも覺えてゐる。寄宿舍では、年中行事の一つとして四月には新入舍生の歡迎會を開くことになつてゐる。その席上で新入生の自己紹介がある。これは盲人にとつてはまことに樂しいものである。

「いゝ聲だなあ」といふ者もあれば、「田舍まる出しだ」などといふ者もある。

「私は富田孫十郎と申します」と太い聲で自己紹介をすると、昔のやうな名前だといつて「孫十郎殿」と芝居のこわ色を使つて彌次る。

女生徒が透き通るやうな細い聲で挨拶をすると「ホーホケキヨ」と口笛を吹く者もある。順番が多胡さんの所に廻つて來た時、多胡さんはあのどら聲を張り上げて、いきなり、

「僕は岡山產のタコです」と早口に言つたものだ。ワツと場内に歡聲が起つた。多胡を魚の章魚と間違へたらしい、

多胡さんは同級生同志と話をする時には「なんぢや」「さうなんぢやよ」などと面白い言葉を使つてゐた。

よほど前の話だが友人の中山さんが私に多胡さんのことをしきりに褒めてゐた。何でも中山さんの奥さんが痺疽でひどく苦しんでをられるところへ、ひよつこり多胡さんが遊びに來たのださうである。多胡さんは奥さんのことを奥さんと呼ばず、常におばさん〳〵といつてゐたさうだ。奥さんが指を患つて苦しんでゐる様子を見て、多胡さんは氣の毒に思ひ、お子さんのお襁褓を、奥さんが止めるのもきかず洗濯して上げたさうである。折角遊びに來て、寒中臺所でお襁褓を洗濯するなど、學生の身としては中々出來ないことである、といつて中山さんは感心してゐた。

多胡さんは中等部を卒業すると、師範部に入らないで、小石川の柳町か八千代町だか忘れたが、その邊で按摩、マツサージを開業してゐる人の家に同居して働らいてゐた。

或る日、多胡さんから私の勸めてゐる病院へ電話がかゝつて來た。私に會ひたいといふのである。私は下宿の方に來るやうに云つた。多胡さんは喜んで私の下宿へ訪ねて來た。眼は全く駄目になつたらしく、此の間電車道を横切らうとした時、電車に刎ねられて怪我をしたといつてゐた。

「忙がしいですか」ときいたら「はあ」と答へた。私は此の機會にと思つて多胡さんに師範部に入ることをしきりに勸めた。今の中に資格を取つておいた方がいゝ、開業もいゝが、全く眼が見えなかつたら盲學校の先生の方が、氣分の上から云つてもいゝと思ふ、と多胡さんには分りきつたことかも知れないが、何だか不憫でならないので、これが老婆心といふのであらう、餘計なことまで喋つた。多胡さんは「はあ、はあ」といつてきいてゐた。恰度この時、私は多胡さんから次のやうな話をきいた。

多胡さんは或る日、某カフエーに呼ばれて店の女將に按摩をしたさうである。店の奥の方から酒に醉つた陽氣な聲がしきりにきこえたさうである。何でも大勢で騒いでゐるらしい。賑やかだなあ、と多胡さんは思ひながら店の帳場で女將の肩をせつせと揉んでゐたさうな。暫らくすると奥の方で今までドンチヤン騒ぎをしてゐた大勢の客が、宴が終つたと見えて、ぞろ〳〵と出て來たさうだ。そして帳場の前を通り過ぎやうとした時、客の一人が突然、

「やあ多胡君ぢやないか」と聲をかけたさうだ。多胡さんは思ひがけなく自分の名を呼ばれてハツと驚ろいて、肩を揉む手を休めて客の方に顔を向けたが、突差に自分を呼んだのは誰であるか思ひ出せなかつたさうだ。

大勢の客は多胡君といふ聲をきいて一時に多胡さんの方に視線を向けたらしく、「やあ多胡だ、多胡君だ」といつて皆が寄つて來たさうだ。

多胡さんは大勢の客に名を呼ばれて、初めて客といふのが自分と中學の同級生であることに氣が付いたさうだ。多胡さんも思はぬ所で大勢の同級生に會つて大へん懐しく思つたさうだ。同級生たちは今は、いづれも大學、專門學校に在學中で、今日は在京の中學同窓生たちが集つて、此處で同級會を開いたのださうである。

「多胡君、氣の毒だなあ」と一人が云ふと、「ちつとも見えないのか」と他の一人がきいたさうだ。

「あゝ見えないよ」と返事をした多胡さんも、自分の境遇と同級生たちの身の上を較べて一寸淋しい氣持がしたさうだ。

「氣の毒だなあ」

「俺たちが見えないかなあ」

「君は秀才だつた、數學は天才だつた」

と、今まで騒いでゐた學生達も、多胡さんが人通りの多い店の前で、女將の肩を揉んでゐるのを見てほろりとしたらしく、めい〳〵で慰め合つたさうである。

勘違ひ

私たちのクラスに菊池さんといふ生徒が居た。もと商船學校に入つてゐたさうで體格のがつちりした人であつた。身長は五尺六寸位、體重は二十貫はあつたらう、中途失明者で西郷さんのやうな顔をしてゐた。或る日、寄宿舍の賄に出入りしてゐる商人でも乘つて來たのであらう、玄關に一臺の自轉車が置いてあつた。盲生徒たちは自轉車のハンドルに觸つて見たり、ベルを鳴らしたりしていぢくりまわしてゐた。恰度菊池さんも其處に居たので皆と一緒に自轉車を弄んでゐたが、「どれ俺が一つ乘つて見よう」といつて、自轉車を運動場に引つ張り出してひよいと乘つかつた。

「おおツ、こりや乘れるぞ」と菊池さんは自分でも驚ろいたやうに叫んで運動場を乘り廻した。失明前には、始終自轉車に乘つてゐたさうである。なるほど、姿勢といひハンドルの操縱といひ確かなもので晴眼者と少しも變りがない。私達が感心して見てゐると、どうしたことか突然菊池さんは自轉車から落つこちた。

「どうしたんだ」ときいたら、「初めの中は何とも思はなかつたが、その中に何か目の前に障害物

でもありやしないかと思つた瞬間、急に山だか崖のやうなものが眼に浮んで來て、手も足も一時に縮まつてしまひ、思はず落つこちてしまつたんだ」といつてゐた。いつもの豪膽な菊池さんには似合はぬことである。中途失明者が勘が悪いといふのは、訓練不足にも依るであらうが、この危ない、といふ恐怖の感に襲はれるために、餘計動作が鈍いのではなからうか。疑心暗鬼を生ずといふが、危ない、と思つた瞬間に菊池さんは錯覺を起したのである。

或る日、私は菊池さんと二人で、元寄宿舍の舍監をしてをられた石川重幸先生の御宅をお訪ねしたことがある。石川先生は、まだ東京盲啞學校といつて、盲と聾啞が分離しない時代からの古い先生で、私が寄宿舍に入舍した時には既に七十歳に近い御老體であらせられた。痩軀長身、美しい白髯がふさ〳〵と胸のあたりまで垂れてゐた。非常に嚴格な先生で、秋霜烈日といふ感があつた。舍監として御在職あらせらるゝこと十數年、私が入舍してから四年程經つて御勇退なされ、鬼子母神の近くに御住居を新築されて悠々自適の生活を送られてゐたのである。菊池さんと私は恰度先生が舍監を辭められて半年位經つてからお伺ひしたのである。先生御夫妻は非常に御喜びになられ種々御馳走して下さつた。

先生は御退職になつて、まだいくらも經たないのに急にお年を召されたやうに思はれた。今迄は多勢の生徒と一緒にお暮しになつてをられたので、御氣持も自然若々しくあらせられたのであらう。舍監の御部屋は、音樂生の室から近いので、毎日琴、三絃の音のきこえない日は無かつた。それも一人や二人が稽古をするならともかく、寄宿に居る音樂生がみんなで練習するので、何もかもごつちやになつて、騷々しいといふより他に形容の言葉もない有樣であつた。訪問客が先生に向つて、

「八釜しくありませんか」とおたづねすると、先生はさういはれて、ああ琴の稽古をしてゐるな、とわれに返つてお氣づきになられるのださうである。これは水車小屋の番人が、水車が廻つてゐる間は何とも思つてゐないが、水車が止まると晝寢をしてゐてもハツと眼が覺めるといふのと同じことで、先生は長年、耳のそばで多勢の琴、三絃の稽古をきいてをられるので、慢性になつて騷々しいのが騷々しくなくなり、騷音の中に閑寂な氣分を味はられてゐたのである。先生が寄宿舍を去られ、八釜しい琴、三絃の音がきかれなくなつたのは、水車の番人が水車が止まつた時、或る物淋しさを感じるのと同じやうに、一抹の寂寞と悲哀を感ぜられたことゝ思ふ。餘生を送るには閑靜な場所がよいかも知れないが、それもその人のこれまでの環境によつて、一概にさうとばかりはいへな

い。先生には森閑とした御住居は却つて御身體に障るのではないかとさへ思はれた。

先生は私たちに學校の樣子や寄宿舍の模樣など種々お訊ねになられ、如何にもお懷しさうに拜せられた。恰度暑い日中だつたので、奥樣はお盆に滴たるやうな西瓜を澤山載せて持つて來られた。先生は私達に喰べるやうに仰言つた。私は菊池さんに西瓜を取つて上げた。奥樣は流石に長年盲人に接してをられるだけにこういふことには實に行き屆いたもので、西瓜の種子を取つた上、皮まで剝いて下さつたのである。ところが菊池さんは西瓜の底の方を三日月形に殘して、お盆の上に置いた。他の西瓜もやはり底の方を殘した。いくつか食つた菊池さんの西瓜はみんな底の方だけ殘してあつた。先生の御宅を辭して、二人で雜司ヶ谷の墓地を歩きながら、久しぶりでお目にかゝつた先生の印象を話し合つてゐたが、ふと私は西瓜のことを思ひ出して、

「どうして西瓜を少しづゝ殘したんだ。奥樣が折角種子を取り、皮まで剝いて下すつたのに」といつたら、菊池さんはびつくりして、

「へえ、さうか、皮を剝いてあつたのか。道理で底の方が柔らかいと思つたが、みんな食つてしまつては、菊池の奴は西瓜の皮まで食ふつて、あとで先生に笑はれては俺の體面にかゝはると思つて殘して置いたんだ。それならさうと言つてくれりやみんな食つてしまつたのに、俺あ恥を掻いたぜ」

といつて、弱つたやうな顏をしてゐた。

或る年、試驗が近づいて來たので、菊池さんは柄にもなく放課後も教室に殘つて一人で勉强してゐたさうだ。すると其處へドアをがらりと開けて誰か入つて來たさうな。はてな、と氣を配つてゐると、

「やあ菊池さん御勉强ですか」

と聲をかけられたさうだ。恰度、小使さんが各教室の窓を閉めたりカーテンを引いたり戸締りをしに廻つて來る時刻だつたので、菊池さんはてつきり小使さんだと思つて、

「おお、來たか。どうだ、旨い話があるか」

ときいたさうな。

「はあ」と相手が一寸驚ろいたやうな樣子をして返事をすると、菊池さんは、「旨い話があつたら聞かせろよ、なあ、おい」と重ねてぞんざいな口調で言つたさうな。

「御熱心に御勉强ですなあ」といふ相手の聲をよく聽いてゐると、小使と思つたのは豈圖らんや密本先生だつたので、菊池さんもこれはしまつたと心中で思つたが、言葉の行きがかりで今更あゝ先

生でしたか、といふのも癪だと思つて、
「うーん、俺あ勉強しとるんぢや」
と、どこまでも押しの一手で突つぱねたさうな。密本先生も大變な奴だと思はれたに違ひない。

今一つ。

寄宿舍には小使室の隣りに湯呑み場がある。疊敷にしたなら恰度八疊敷位の廣さで、コンクリートの床に圍爐裡が仕切つてあつて、その上に釜がかけてある。釜には生徒が何時でも飲めるやうに湯を沸かしてある。冬はこの圍爐裡が溫かいので、寄宿生はそのまわりに蜜柑の空箱など持つて來て腰掛け、點字書をさすつて勉强してゐる。點字をさする指が冷たいと感覺が鈍くなるので斯ういふ場所は勉强には打つて附けである。

或る日菊池さんはクラスの連中と此處に陣取つて試驗勉强をしてゐたさうだ。すると其處へ障子を靜かに開けて女の人が這入つて來たさうな。そして、
「濟みませんけれど火種を少しいたゞきます」と斷はつて圍爐裡から火種を取つて十能に移したさうな。その聲が音樂科の西村さんにそつくりなので菊池さんは西村さんだと思つて、

「おい、火種だと、何にするんだ」
ときいたさうだ。
「あのう、一寸……」
「なんだと、こいつ、炬燵でも作つて晝寢をするんだらう」
「いゝえ、さうぢやありません」
「さうだよ、こいつは、うまいことをしやがつてるよ」
女の人はさはらぬ神に祟りなし、とこそ〳〵湯呑場を出て行つた。菊池さんがその跫音をぢつと聞いてゐると、舍監室の前でぴたりと停つてすうつと障子を開けて入つたので、さては今のは舍監の奥樣だつたか、と仰天したさうな。前々から舍監の奥樣と西村さんとは聲が似てゐるといふことは聞いてゐたが、こうも似てゐるとは思はなかつた、とんだ失禮なことをしたわい、と菊池さんは恐縮したさうな。野人菊池さんは今地方の盲學校の先生をしてゐる。

入舍當時

千人に一人といふ盲人の仲間入りをして、盲學校に入學してから半年程經つて、私は舍監から寄宿舍に缺員が出來たから、希望だつたら入つてもいゝといはれたので、早速入舍することにした。それまで私は本鄉の保證人の家に厄介になつて通學してゐたのである。

私の入つた室は休養室といつて、本來は寄宿生に病人が出來た場合に、此處に收容することになつてゐるのであるが、寄宿を希望する者が多いので、休養室も開放して生徒を收容することになつたのである。唯だ、休養室には寄宿の圖書が保管してあり、又同窓會の荷物が押入れに藏つてあるので、さういつた都合上、寄宿生は五名に限られてゐた。他の室には一室に八名居た。

私が入舍したころ、寄宿舍には休養室を除いて室が一號室から九號室まであつた。その中の三分の二は男子の室で、三分の一が女子の室であつた。私が入舍して四年程經つてから三室が增築された。三室共男子の室である。

生徒は眼が不自由であるし、遠隔の地方から來てゐる者が多いので、寄宿を希望する者が多かつ

た。學校と寄宿とは廊下傳ひになつてゐるので、通學に便利であつた。その頃寄宿舍の廊下には階段が無かつた。正面の入口から玄關に上がる所も、一段と低い食堂や便所に通ずる所も、廊下がこり臺のやうになだらかに傾斜してゐるので、足を踏み外づす心配も無ければ、警戒する必要もなかつた。小便所は壺でなく廣い溝になつてゐるので、的の外ずれる心配がない。それに小便溜りに落ちないやうに、前に恰度腹の高さのあたりに、横に丸い棒が渡してあるので、小便をしてゐる時後ろから盲生徒が來て、前に人が居るのに氣付かず敷石に上がられても、小便溜りに突き落される心配がない。「おい」「やあ居たのか」といふ風に笑つて濟ませるのも、前につつかへ棒がしてあるからだ。

當時、寄宿料は食費が一日三十三錢で月に九圓九十錢、その他に舍費が一圓五十錢だつた。舍費は電燈代、冬の木炭代、その他寄宿の維持費に充てがはれてゐた。男子と女子の室は長い廊下で隔てられ、その間に舍監の室があつて互ひに出入することも禁じられてゐた。

女子の室は南にあるので南舍といひ、男子の室は二棟になつてゐて北舍、中舍と呼んでゐた。一室の廣さは十六疊敷で、左右に押入が二段になつて四つ宛あつた。室長や古參の寄宿生は上段の押

入を使用し、下段の押入れは新入舍生に充てがはれた。廊下に面する戸は障子になつてゐた。盲生徒の中には勘の惡い人が居て、廊下を歩くのに片手で障子をさすりながら通る者がある。どうかして指で障子に穴を開けて行く者もある。するとその後へ又勘の惡い盲人が障子をさすりながらやつて來て、穴の開いた障子に又指を突つ込んで、更に大きな穴を開けてゆく。どの室にも穴の開いてゐない障子は無いといつてもいゝ位だつた。私の居た休養室は、寄宿から學校に通ずる廊下のとつつきにあつたので、寄宿の中でも一番通行の頻繁な所であつた。それで、いくら障子を貼りかへても直ぐ穴を開けられてしまつた。勘のいゝ盲生徒は室の中に居て、廊下を通る盲生徒を障子のさすり工合で、誰であるかを感知して「やあ××さん、もう學校に行くのか、まあ這入れよ」などと聲をかける者もあつた。

一室には一人か二人半盲生が居た。一人でも半盲生が居ると、盲人には何かにつけて便利であつた。私は何分入學してから日も淺く下級生だつたので、寄宿舍の中でも私の名を知つてゐる者は、少數の同級生のほかに幾人も居なかつた。野地といふ名は珍らしい上に、きゝにくいので一ぺんでは通じない。「はあ、何ですつて」と反問される。殊に電話となるとこゝとだ。これについて面白い話がある。

寄宿舍に電話が架設されてからのことだが、或る日、第一高等學校に在學してゐた弟が私の所に電話をかけたさうだ。弟は田舍から出て來たばかりなので、寄宿舍の電話番號が牛込六二三二番といふのを、寄宿が小石川區雜司ヶ谷にあるので、うつかりして小石川の六二三二番とかけたさうだ。すると、若々しい女の聲がして「アアモシ〳〵どなたさまですか」ときいたさうな。

「あのう盲學校ですか」

「エエ、もう學校ですかつて？」

「野地さんは居りませんか？」

「エエ、おぢいさん？　一體あなたは何番へおかけになつたのですか」

「小石川の六二三二番です」

「ぢややつぱり家だわ。ではおぢいさんを呼んで來ますから一寸お待ち下さい」

といつて女の聲が引込んだ。弟もこいつは變てこだぞと氣が付いたので、そのおぢいさんとやらが出て來ない中にガチャンと電話を切つてしまつたさうな。

私が入舍したら、近頃洗濯屋が休養室に何時迄も遊んでゐるなあ、ゆうべは點檢の時間になつて

もまだ歸らなかつた、いや、風呂にも一緒に入つてゐたぜ、などといふ噂があちらこちらに起つた。これはあとで分つたが、私の聲と寄宿に出入りしてゐる洗濯屋の小僧さんの聲とがそつくりなのださうだ。私が休養室で話をしてゐると、廊下で「洗濯屋さん」と呼んだりする。室の者が「洗濯屋は居ないよ」といふと「へーえ」と腑に落ちないやうな返事をして歸つてゆく。あとできいた話だが、中にはよごれた猿股まで私の室に持つて來た者もあつたさうな。障子には穴が澤山開いてゐるのだが、盲人は聲で判斷するので、私はしばらく洗濯屋と間違へられてゐた。

私の室に後藤さんといふ私より二級上の盲生徒が居た。後藤さんの國は北海道の帶廣（當時音別といつてゐた）である。その頃向ふには燒芋がなかつたさうで、こちらに來て初めて燒芋を食つた時そのうまいのに舌鼓を打つたさうな。そしてこんなにうまい芋はよつぽど高いだらうと思つて燒芋屋に行つて「燒芋を一圓下さい」といつて、風呂敷を出したさうだ。燒芋屋が燒芋を一圓風呂敷に包んで後藤さんに渡した時、後藤さんは手に持つて見てあんまり澤山來たので驚ろいたさうである。後藤さんはバイオリンが好きで寒中でも朝早くから火の氣のない學校の教室に行つて練習をしてゐた。個人教授の所へ習ひに行つたこともあつた。文藝物も好きで「椿姫」など私が讀んで上げ

たことを覺えてゐる。

或る日、後藤さんは私にブラッシュを貸してくれといつた。私は早速貸してやつた。少し經つて私が便所に行こうとして廊下を通つたら、後藤さんが日當りのいゝ庭先で靴を磨いてゐた。何氣なしに見ると私がさつき貸してやつたブラッシュで磨いてゐるので私は驚ろいた。「おいおい、後藤さん、とんでもないことをするなよ、そのブラッシュは洋服のだぜ」といつたら「へーえ」と後藤さんもびつくりしたやうな顏をして靴を磨く手を休めた。「道理で毛が柔かいと思つたよ」私は諦らめて「君に上げるよ」といつた。

或る晩、私が風呂から上がつて着物を着ようとしたら着物が見當らない。脫衣室の着物の置き場は、錢湯のやうに幾度にも仕切られた棚になつてゐるのである。盲生徒は着物を脫いで棚に入れる時、上から何段目とか、左から何番目といふ風に算へて入れるのである。私はいくら着物を搜しても見付からないので思はず「着物が無くなつたあ」と叫んだ。すると隅の方で「はーてな」と後藤さんの聲がした。振り返つて見ると、無い筈だ、後藤さんが私の着物を着てゐるのである。

「おい、冗談ぢやないぜ、そいつは俺の着物だぜ」と云つたら、

「道理で變だと思つた。これは袂だらう。俺のは筒つぽなんだ」と、笑つてゐた。

それにしても呆れたことには、後藤さんは私の着物ばかりか、シャツも着、猿股まで穿いてゐるのである。「おい、早く脱げ」と云つたら「まあさう怒るなよ」といつて後藤さんは悠々と着物を脱ぎ、シャツを脱ぎ、最後に猿股を脱いで「ほらやるぜ」といつて私に渡した。

この間、同級のHが私の家に訪ねて來た時、後藤さんがついこの間、用事があつて北海道から一人で上京したといふことをきいた。それが又振つてゐる。後藤さんは出立前に上野着の時間を豫めHに知らせて、迎へに出てくれといつて寄越したさうだ。それでHは奥さんと一緒に上野驛に迎へに出たが、汽車が着いても後藤さんの姿がホームに見えないといふ。尤もHは盲人だから奥さんに捜して貰つたのであるが、奥さんは一面識もないので、雜沓に紛れて見落したのであらう。二人で後藤さんの身を氣遣ひながら歸つて來ると、後藤さんがちやんと家の前に立つてゐたので、Hは思はずアツと聲を上げたさうだ。よくまあ一度も來たことのない所へ一人で來られたものだと感心したさうだ。それにしても驚ろいたことには、後藤さんは帶廣から上野までの乘車券を驛夫に渡さないで上野驛を出て來たことである。Hも奥さんも汽車の切符を手に受取つて「一體どこから出て來たんだい」ときいたら、「どこだか知らない」と平氣でゐたさうな。學校に居た時から豪膽な彼にして有り得る話である。

下僕

ウエルズの「盲人國」の中に、半盲は盲人仲間の王樣だなどと書いてあるが、盲學校の寄宿舍では、その人の心がけにもよるであらうが、半盲は盲人の下僕（しもべ）であるとも云ひ得る。

盲生徒が國の親許に出す手紙は大抵半盲生に書いて貰ふのである。半盲生の中にも字を書くことの出來ない者もあれば新聞や雜誌など讀めない者もある。それで讀み書きが出來ると非常に重寶がられる。手紙を書いてやつた上に盲人は外出が不自由なのでポストに入れて來てやる。寄宿の中にも手紙を入れる函があつて、その中に手紙を入れて置くと、時間を決めて小使さんが、それを纏めて外のポストに出してくれることになつてゐるのであるが、私が寄宿に居た頃の小使さんは、年を老つて少し呆けてゐた上にアルコール中毒なので、大事な手紙は寄宿の函に任せて置けなかつたのである。

私は寄宿舍に入つて初めて代筆といふものを經驗した。最初は失敗した。といふのはハガキを書

く時、盲生徒が口述するのをその儘書いてゐる中に餘白が無くなつてしまつたのである。盲生徒はお關ひなしに喋言りつゞける。「もう書く所が無いよ」といつたら、「そいつあ困つたなあ。まだ半端なんだ」といつて殘念さうな顏をしてゐた。私はこれに懲りてその次からはハガキに半分程書くと「あと半分しか書く所がないよ」と豫告することにした。親許へ學費を請求する時には拜むやうにして代筆を賴まれた。手紙を書き終へてから一通り讀んできかせて、封筒に入れ、切手を貼つて渡すと、盲生徒は大事さうに封筒を撫でまわして「これで助かつた」といつて喜こんでゐた。自分の室の者ばかりでなく他室の者からもよく代筆を賴まれた。親許から爲替が屆くと禮狀を書いてやつた上に爲替を郵便局まで持つて行つて金を受取つて來てやる。困ることには通常爲替だと指定郵便局まで取りに行かなければならない。學校が小石川にあるので、小石川局を指定して送金する親がよくある。斯ういふ場合には、雜司ヶ谷の寄宿舍から、わざ〳〵電車で傳通院の小石川局まで出掛けなければならない。私は何度小石川局まで足を運んだか知れない。郵便局は受付時間が決つてゐるので放課後では間に合はなくて授業を休んで行つたこともある。

學校が休みになると、寄宿生は銘々歸省する。冬休みは三週間位なので、北海道や九州のやうな

遠くから來てゐる者は寄宿舍に殘つてゐるが、暑中休暇には殆んど全部歸鄉する。親兄弟が迎へに來ることもあるが、一人で歸る者もある。殊に遠方から來てゐる者は大概獨りで歸るやうだ。さういふ場合には、半盲生は盲生徒の手を曳いて驛まで送つて行くのである。東京驛から歸る者もあれば上野驛から歸る者もある。歸る時間もまち〳〵で、上野驛を夜の十一時過ぎの汽車で歸る者もある。盲生徒を汽車に乘せる時も、鄉里の驛で下車するホームの側の坐席を搜してやる。又出來るだけ便所に近い席を選ぶ。上野から寄宿舍まで可なり遠い。盲生徒を送つて歸る時、途中乘換へ場所で辛うじて終電車に乘ることが出來てホツとしたこともあつた。又、夏休みが終つて上京する時、盲生徒から賴まれて途中で下車してを連れて歸つたこともある。中途失明者は先天性の盲人より用心深くて、驛で乘り合せやうといつても、停車時間が短いし、雜沓してゐて若し會へないといけないから一旦下車して、一汽車おくれて行こうなどといふ者もあつて、私はその言に從ひ、下車して大きな荷物を提げながら、盲生徒の家まで迎へに行つたこともあつた。又、私よりおくれて上京する盲生徒を驛に出迎へたことも度々ある。さういふ場合にはこちらが見付けて聲をかけるまでは決して席を立つてはいけないと注意して置いた。上野驛着の場合には、田端か赤羽まで迎へに出て、汽車の中で搜すことにしてゐた。盲生徒が杖に凭りかゝつて默念としてゐる姿を見付けて聲をかけ

ると、盲生徒は地獄で佛に會つたやうに急に活氣づき、何ともいへぬ嬉しさうな表情をして、幾度も禮を繰り返すのであつた。

天氣のよい日曜日には、盲生徒の手を曳いてよく散歩に出かけた。近い所では江戸川公園や鬼子母神、少し離れた所では目白の哲學堂あたりである。その頃、目白驛か、哲學堂の方に向つて少し行くと廣々とした畠つゞきで大根や蕪などが澤山植ゑてあつた。私が寄宿舍に居た頃、一番歩いたと思つたのは寄宿から高輪の泉岳寺まで盲生徒の手を曳いて行つたことである。歸る時にも神保町まで歩いて來たが、何せ盲生徒を二人も連れて歩いたので草臥れてしまひ、とう〳〵そこから市電に乘つて歸つて來た。泉岳寺へは二回歩いて行つたことがある。途中、寄り道をして愛宕山の高い石段を昇つたこともあつた。その愛宕下に勝壽司といふお美味い壽司屋があつた。私達はその店に這入つて舌鼓を打つたものだ。其の他、泉岳寺程遠くはないが、上野までは度々歩いて行つたことがある。盲生徒の手を曳いてのことであるから足はなか〳〵達者であつた。

放課後はよく盲生徒を床屋に連れて行つた。私の今勤めてゐる病院では一週間に何回と日を決めて、床屋さんが出入りをして入院患者の頭を刈つてゐるが、盲學校の寄宿舍にも月に二回位は床屋

さんが出入りしてもいゝのぢやないかと思ふ。平素あまり外出しない盲人は顏の血色がよくないので頭髮がぼう〳〵伸びるとまるで病人のやうである。私達がよく行つた床屋は、女子大學の裏通りにある店で、そこの主人は私が盲生徒を二三人一度に連れて行くので特別に勉強してくれた。半盲生は盲生徒の王樣どころではない。

寄宿に伊東さんといふ盲生徒が居た、中々愉快な人であつた。伊東さんは私に柔道を習ひたいから道場へ連れて行つてくれないかと言つた。よし來た、と私は伊東さんの手を曳いて柔道の道場を捜して歩いた。私は父の話を思ひ出した。父は學生の頃、講道館で柔道を稽古したさうだが、その頃、廣瀨中佐も熱心に稽古してゐたさうである。そして大勢に混つて一人の盲人もゐたさうだ。寢業が中々强くて一度捉まつたら百年目決して離さないのださうだ。伊東さんは、その盲人の二代目かな、と微笑ましく思つた。私は先づ鬼子母神に行く途中の或るお寺に柔道三段の先生が居るといふことをきいて、伊東さんを連れて行つたが、盲人は駄目だといつて斷られた。それから老松町の大道社の道場へ連れて行つたが、そこでも斷られた。そこで今度は牛込矢來下の羽衣館の前の通りを入つて少し行つた所に柔道の道場のあるのを見付けて、賴んで見たが矢張り斷られてしまつた。

伊東さんも三度たづねて三度とも斷られたので、「あゝ盲と生れるものではない」とひどく悲觀した。私は氣の毒になつて方々搜し廻つた揚句、早稻田の車庫に近い電車通りに柔道道場の看板が揭げてあるのを見付けて賴んで見たら、入門を許してくれたので伊東さんは大喜び、それから每晩柔道衣を肩に擔ぎ、杖をつきながら胸突き坂といつてとても急な坂道を降りて、柔道の道場に通つたものだ。初めの二三日は道に馴れないので私が道場へ連れて行つてやつた。稽古が終つたあとで、「どうだつた」ときいたら「いや何ともいへぬいゝ氣持だ」といつてゐた。その中に伊東さんに思はぬ强敵が現はれた。といふのは柔道の道場內ではなく、道場に通ふ途中或るお邸の前を通ると大きな犬が猛烈に伊東さんに吠えつくのださうだ。夜目にも白い柔道衣を擔いで、太い杖で大地を叩きはがら歩く伊東さんの勇姿、それに伊東さんは片方の白眼が少し飛び出してゐるので、犬の方でもこいつただ者ではないと睨んだらしい。唸り聲を立てゝ伊東さんに肉迫して來るさうだ。伊東さんは杖を振り廻して惡戰苦鬪、若し食ひ付いたら柔道の手で首を絞めてやらうと身構へてゐたさうだが、犬も伊東さんが無暗に杖を振りまはすので中々食ひつけない。「どうもあの犬は癪だよ」と伊東さんはしきりに口惜しがつてゐた。伊東さんについてまだ面白い話がある。

穢ない話だが伊東さんは便所で書き古した點字紙を使ふのださうな。點字紙は圖畫用紙のやうに厚い紙質で出來てゐるのである。その紙に點字を書くと紙面が凸凹してざら〳〵になる。蚊に食はれて痒い時に、紙ヤスリのやうなこの點字紙で皮膚をこするといゝ氣持である。伊東さんはその堅い紙で便所の用を辨ずるのだから凄い。「尻が痛くないか」ときいたら「なんでもない」といつてゐた。或る日、伊東さんは國許から拾圓の爲替を送つて來たので郵便局でお金に取換へ、拾圓札を懷ろに捩ぢこんで歸つて來た。たま〳〵便意を催ほしたので便所に入り、うつかりして懷ろから拾圓札を出して用を辨じ、そいつを雪隱の中に棄てゝしまつたさうな。室に歸つてから、ハツと氣が付き「こりや大變なことをしたわい」と後悔臍を嚙んださうな。

また或る雨の降つた日に、寄宿舍の風呂場の附近から蛇が出たことがある。「蛇だ〳〵」と誰かが騷ぎ立てたら伊東さんは「どこだ〳〵」といつて地面を手搜りして蛇をつかまへた。蛇は二尺位の奴であるが伊東さんは平氣で自分の首に卷きつけたりしてゐた。盲生徒の一人が傍らできいてゐて「なるほど盲蛇(めくら)に怖ぢずとはよく言つたもんだなあ」といつて感心してゐた。まるで嘘のやうな本當の話である。

色盲と夜盲

石川先生が舍監を辭められた時、寄宿舍では先生の送別會を開いた。當時私は委員の一人に擧げられた。記念品として何を差し上げたらよからうかと種々相談した上、柱時計といふことに決まつた。私は盲人の委員の手を曳いて天賞堂へ買ひに行つた。これは眼の見える者ばかりで決めて、あとで苦情が出るといけないと思つたからである。店の者との交渉を盲生徒は傍で聞いてゐる。値段はこれ〳〵といふことも耳に入れて置く。受取證は點字ではないから盲生徒には分らないが、現場で確かと聞いてゐるのだから間違ひはない。

「この時計はどうだらう」と盲生徒にきくと、それを手でさぐつて、「うん、いゝ格好だ。だがゼンマイを一つかけて見てくれ」といふ。ゼンマイをかけてカツチン〳〵セコンドの刻む音をきいて「いゝ音だなあ、これなら大丈夫だ」と言つて納得した。私は時計の側面に「送別記念　寄宿生一同」と金文字で書いて貰ふことにしてその日はそれで歸舍した。

數日經つて、店から時計が屆けられた時、先生に贈呈する前に一應寄宿生に見せておく必要があ

ると思つたので、應接室へ時計を見に來てくれと觸れ廻つた。寄宿生がぞろ〳〵やつて來て、時計の頭や顏や胸のあたりを撫でて「立派だなあ」といつて褒めてくれた。セコンドの音をきいて「落ちついた音だなあ」とこれまた皆の氣に入られた。時計は送別會の席上で先生に贈呈することにした。

さて、愈々送別會の當日となつた。會場は寄宿の食堂である。食堂の廣さははつきり覺えてゐないが、三間に十間、或ひは四間に十一間位あつたかと思ふ。設備を萬端整へてこれから寄宿生一同を集め、舍監の御臨場を請ふて開會しやうといふ間際になつて私は慌てて他の委員に呼びかけた。

「おい。皆を呼ぶのは一寸待つてくれ」

「どうしたんだ」

「どうしたもないよ、大變なことをしたなあ」

他の委員は何が何だか合點がゆかないといつた顏付きをしてゐた。私の他に眼の見える委員が一人居た。私は彼に向つて、

「君はどうしてこの幕を張つたんだ」

ときいた。

「どうして？」といつて彼は會場の周圍に張つてある幕を見廻した。私は彼が全色盲であることに氣が付いた。

「冗談ぢやないぜ、この幕は葬式の時に使ふ黑と白の幕だぜ」

「アッ、さうか、僕は紅白の幕だと思つた」

「先生の送別會に葬式の幕を張つちや縁起が悪いなあ」

と盲人の委員も言つた。それから大急ぎでこの幕を取り外づして紅白の幕に張り替へた。危ない所だつた。私は色盲についてよくは知らないが、色盲には一部性色盲と全色盲とあるさうだ。一部色盲とは赤や綠が分らないのださうで、全色盲は、すべてが黑と白の二色にしか見えないのださうだ。丁度活動寫眞を觀てゐるやうなものだ。此の全色盲は減多に無いさうである。學校では三大節の祝日に紅白の餅を生徒に呉れるが、全色盲には黑と白の餅に見える譯だ。

色盲も不自由だが夜盲となるとこれまた厄介だ。私も夜はよく見えない。石川先生の送別會の時も、煌々たる電燈を灯もして初めて幕の色に氣が付いたのである。その時、私も色盲の委員に負けないヘマをやつた。舍監に記念品を贈呈する時、色盲の委員が先生の前に進み出て目錄を差し上げることになり、私が寄宿生に挨拶の號令をかけることになつてゐた。委員席は會場の隅に設けられてある。私は其處に立つて、色盲の委員が目錄を持つて行く時、大聲で「起立ッ」と號令をかけた。全寄宿生は一齊に席を立つた。そこまではよかつたが、未だ舍監に目錄を贈呈しないで舍監から數間も離れた手前を歩いてゐる時に、夜盲で近眼の私は、もう目錄を渡してゐる頃だらうと思つて、「禮ッ」と號令をかけたものだから、色盲の委員は大いに泡を食つて駈け足で舍監の所に行き、目錄を差し上げてこそ〳〵委員席に歸つて來た。

「君の號令が早かつたので俺あ面食つたよ。寄宿生は皆お辭儀をしてゐるだらう。俺も早くお辭儀をしなくちやいけないと思つて駈け足で行つて來たよ」

と言つて苦笑してゐた。色盲と夜盲の委員、い〳〵組合せだ。

夜盲で思ひ出したが、寄宿舍に平井さんといふ生徒が居た。平井さんはひどい夜盲だつた。それでゐて晝は別に不自由をしない。或る年、冬休みが終つたので、平井さんは鄉里の大阪から歸京の途に就かれた。途中、或る驛で下車し、其處に居る盲生徒を迎へに行つた。途中で下車して盲生徒を寄宿に連れて歸るといふことは中々出來ないことである。盲生徒の兩親も平井さんの親切に感じて種

々歡待してくれたさうだ。平井さんは晝はよく見えるので盲生徒の兩親も我が子と比べて「ほんとにお仕合せですねえ」といつて羨やんださうだ。平井さんは陽氣な人だから例の調子で關西辯をふりまはして家人を煙に卷いてしまつたらしい。聲は金切り聲だ。その中に日脚の短かい冬のことゝてそろ〳〵あたりが薄暗くなつて來たさうだ。夜は平井さんの苦手だ。平井さんは一晩泊ることになつた。電氣の點く頃ほひ、平井さんは座を立つた。(便所にでも行こうとしたのであらう)座敷を横切らうとした時、其處に炬燵があるのに氣が付かず、平井さんはひよいと片足を炬燵の上にかけたさうだ。ハツと思つた時、はづみを食つて又片方の足を炬燵に乘つけてしまつたさうだ。恰度體操の先生が高い臺の上に上がつて「氣を付けい」をやつてゐるやうに。盲生徒の家人は平井さんが夜盲だといふことを知らないので、炬燵の上に仁王立ちになつてゐる平井さんを見て何をしてゐるんだらうとびつくりしたらしい。「恥を搔きやしたよ」と平井さんは頭を搔いて私に語られた。

それから「お二階へ」といはれた時、又失敗したさうだ。平井さんは「はいはい」と愛想よく座を立つたが、どこに梯子段があるのかさつぱり分らない。「どうぞ」といふ聲で、たぶんこの邊だらうと思つて、梯子段を昇る格好よろしく片足を擧げて勢ひよく下ろした瞬間に、どすーんと襖の唐紙を蹴飛ばしてしまつたさうだ。

「いやもう恥のうは塗りでがすよ」と平井さんは頸を縮めて私に語られた。

點字

私は盲學校に入つて初めて點字の本を見た。盲生徒の机の上に菊判位の大きな本が本立に並べてある。本の厚さは二寸位の堂々たるもの、黑の表裝で背に金文字で「人體解剖學」とか「近世病理學總論」などと書いてあつた。大したもんだと思つて取り上げて見た時、あんまり目方が輕いので驚ろいた。本を開けて見たら蠶の卵のやうなぶつ〳〵が紙一面に散らばつてゐたので又驚ろいた。これが點字の本なのだ。

盲人はよく寫本をする。これは點字の原本が一冊しか無い時に、書き寫すのである。この場合大低左の手で點字をさすつて讀むが、これは左の手で讀むと同時に右の手で筆寫するからである。盲生徒でも初等部から入學した者は、先生が右の手でも左の手でも自由に讀めるやうに訓練するから、左右の指を並べて讀むので非常に讀み方が速い。ところが中途失明者の多くは、左の手、而も人指し指だけで讀むので、讀み方が遲い上に、いくつ點があるか、どそ〳〵横にさすつて見たり、

上下にさすつて見たりするので點字が壓されて磨滅しやすい。

試驗の時には全部點字で答案を書かなければならないので、眼の見える生徒も必らず點字を覺えなければならぬ。點字は紙の裏から書いて表に點を突き出すのである。だから字を書く時には逆に書くのである。印形を彫る要領と覺えてをれば間違ひがない。こういふと點字は何だか馬鹿に難かしいやうに思はれるが、頭のよい人だつたら一時間位でイロハ文字を全部覺えられる。

點字は點字盤で書くので字に上手下手が無い。先生が書いても初等部の生徒が書いても同じである。恰度、眼開きのタイプライターのやうなものだ。

點字の本といへば大概學校の教科書か參考書位のもので、娯樂とか趣味とかいつたやうな本は數が少ないやうだ。これには譯がある。

點字を印刷するには種板となる亞鉛板が要る。亞鉛板を二枚重ねて機械で點字を書く。若し字を書き間違へた場合には、一々金鎚で叩いて潰す。これは中々手間のかゝるものである。下手をすると潰さなくもいゝ點まで潰してしまふ。

印刷をする時には此の二枚の亞鉛板の中に點字用紙を挾んで、これをローラで壓搾するのである。こういふ譯で一枚の紙を印刷するのに亞鉛板が二枚必要なのである。だから幾百頁といふ本を作る

となるとその本の紙數の倍の亞鉛板が必要なのである。亞鉛板の費用のことを考へたら、さう無暗に本も作れないといふ譯だ。

東京盲學校の圖書館に點字の里見八犬傳がある。冊數は忘れたが何十冊といふ尨大なものだ。點字は假名文字で字が大きい上に、行と行との間が大分離れてゐるので、眼開きの讀む本を點字に直すと可なり嵩ばる。田邊尚雄先生の「科學上より觀たる音樂の原理」を私は在學中點字に譯したが、これは七冊になつた。點字に飜譯することを點譯といふ。私は師範部一年生の時、夏休みをこの點譯で暮したことがある。點字盤には字の大きさによつて種類があるが、普通は一行に三十七文字書けるのが廣く用ゐられてゐる。一字を一桝といつて、われ〳〵は三十七桝の點字盤と言つてゐる。此の點字盤で早い人は一時間に三枚位書ける。尤も中には五、六枚書ける人もあるが六枚といふのはチト無理だ。三枚位がいゝ所だらう。私なぞは一時間に二枚だ。あまり急いで書くと孔も碌々開けないで書いてしまふ。これでは何にもならない。私は夏休み二ケ月間にうんと頑張つて九百八十枚書いた。一日平均十六枚、時間にすると毎日八時間書いた譯だ。お蔭でその夏は溫泉にも行かれなかつた。點譯した本は田邊先生の音樂概論(點字で三冊)淺尾芳之助氏の箏唄講話(二冊)太田黑元

雄氏の洋樂夜話（二冊）それから英語の辭引一冊などである。英語の辭引の他は全部學校の圖書館に寄附した。田邊先生の御本は此の他に「現代人の生活と音樂」（點字で二冊）を譯した。この本と「音樂の原理」は盲生徒に進呈した。「音樂の原理」を點譯するのに一年以上かゝつた。又先生の「日本音樂の研究」も書いたが點譯中途で學校を卒業してしまつたのでそれきりになつてゐる。

友人の鴫原（シギハラ）さんの事に就ては「盲人畫家」の所で述べて置いたが、鴫原さんは實によく寫本したものだ。學校に入つた當初一年位は點字も充分に讀めなかつたので寫本もしなかつたが、二年生あたりから寄宿の圖書にある種本を克明に寫本し出した。俄か盲の遲筆なので、恐らく一時間に二枚とは書けなかつたらう。鴫原さんは朝は早くから、放課後は夜寢るまで否、睡眠時間を割いてまで寫本に專念した。長時間端坐して書いてゐるので、便所に行こうとして立ち上がる時には、ふらふらとよろめくことがあつた。日曜や祭日などは、寫本に明け寫本に暮れた。私は菊池寛氏の「恩讐の彼方に」を讀んだことがあるが、鴫原さんの寫本は恰度それを髣髴させるものがある。前者は不義、殺人の懺悔の生活であるが、鴫原さんのは華やかであつた畫家の生活を忘れ盲目の悲哀から遁れやうとするひたむきな精進である。卒業までの三年間に百卷以上は寫本したらう。一口に百卷といつてもその努力は並大低のものではない。鴫原さんが卒業後半年と經たない中に亡くなられたのも、恐らく寫本による過勞が大なる原因をなしてゐると思ふのである。尤も鴫原さんは失明されてから人生の希望を失つてをられたので早世されたのも或ひは本望だつたかも知れない。鴫原さんの遺された尨大な寫本は、鄕里の福島盲學校に寄贈すると鴫原さんのお父さんが語られてゐたから、鴫原さんも大きな功德を世に殘された譯だ。何にしても悲しい思ひ出である。

つい此の間、私が勤め先の病院で働らいてゐると、看護婦さんが一通の點字の手紙を持つて來てくれた。差出人は渡邊成次とある。はて聞いたことのない名だが、と不審に思つて、仕事が終つてから開封して見たら、渡邊といふのは私と同じ鄕里の人で、幼少の頃から眼が惡く、私の父と伯父に七年間厄介になつてゐたといふのである。そして失明を免がれて自分の身のまわりのことは何でも出來るやうになつて、今は築地の盲學校に入つてゐるといふ。年は二十歲とある。點字で手紙を書いて寄こす位だから、普通の讀み書きは出來ないのであらう。その續きを讀んでゐる中に、實は此の間、或る眼科醫の家に行つた時、先生（私の父）と大先生（父の兄、共に眼科醫）がお亡くなりになつたといふことをきいて非常に驚ろき歎き悲しみました。お盆には先生のお墓參りに國に歸りま

すからお寺を敎へて下さいと書いてあつた。私はこれを讀んで、點字の中から滾々と溫かな泉が湧いてくるやうな氣がして思はず手紙を兩手で推し戴いた。

親切

一

人から受けた親切は一時忘れることがあつても、折に觸れて必らず甦つて來るものである。盲學校に入るやうになつてから、成る程、渡る世間に鬼はないと思ふやうな親切をしみ〴〵味つたことがある。震災の直後であつた。或る日、私は二人の盲生徒の手を曳いて日本橋の三越に行つたことがある。私たちは食堂に入つた。當時震災のごた〳〵で整理が充分ついてゐなかつたと見えて、食堂は一階の入口から少し奥まつた所にあつた。私は盲生徒に椅子を勸めて、テーブルの上に置いてある獻立表を手に取つて見た。二人の盲人にそれを讀んで聞かせたら、あれが喰ひたい、これが飲みたいなどと云つた。私は給仕さんを呼ばふと思つてあたりを見廻した。が手不足なのか中々係の給仕さんが來ない。私は少しじれつたくなつた。すると私と同じテーブルを圍んでゐた向ひ側の紳士——その人は小さなお子さんを二人連れてゐた——が、さつきから私たちの樣子をそれとなしに見てゐたが、つと席を立つて私に向つて言はれた。

「食券を買つて來て上げませうか。此處へは食堂の入口で食券を買つてから入るのです。何を召し上がりますか」

私は心の中でその親切を感謝しながら、盲生徒たちが喰べたいといふ品を話したら快く買ひに行かれやうとした。

「あゝ、お金を差し上げます」

と私がいふと、

「さうですか」

といつてお金を受取られた。私が默つてゐたら紳士は立て替へて食券を買つて來られたのであらう。二人のお子さんは大人しくお父さんの歸つて來るのを待つてゐた。口髭を生やした一見重厚な感じのする體格の立派な紳士であつた。

二

英國のコンノート殿下が御來朝あらせられた當時ではないかと記憶する。或は英國皇帝が皇太子

であらせられた時、御來朝遊ばされた當時だつたかも知れない。その邊のことははつきり覺えてゐないが、兎に角英國の皇族の御來朝であつたことだけは確かだ。當時、日比谷の音樂堂で日英海軍々樂隊の交驩大演奏會があつた。それを、盲生徒の一人が是非聽きたいから連れて行つてくれと云つた。私は喜こんで連れて行つた。

會場の入口に來た時大勢の聽衆が何か整理の警官と押問答をしてゐるやうに見受けられた。群集の一人が言つた。

「ぢや切符を賣つてくれ」

入口に立つてゐる警官は手を振つて群集を制し、

「駄目々々。入場券の無い者は入れることは出來ん、それに滿員だ」

といつて頑として聽き入れやうとしない。私ははつと思つた。私も盲生徒も入場券を持つてゐないのだ。たゞ新聞の廣告を見て直ぐやつて來たのだから。私は盲生徒に言つた。

「入場券が無いと入れないんだよ。仕方がない、歸らう」

「でも折角來たんだから、何とかならないかなあ」

と盲生徒は殘念さうな顏をして言つた。私は諦らめて歩き澁る盲生徒を促がし、入口の前を通つて歸らうとした。その時、さつき怒鳴つた警官が、ふと私たちに眼を留めたらしい。

「君たちは聽きに來たのかね」

「はい、さうなのですが入場券を持つて來なかつたから入れないんです」

と云ふと、警官は胸のポケットから入場券を二枚出して私に呉れた。

「これは僕が貰つたんだ。吾々は家族のため二枚づゝ貰つたんだがこいつを君に上げやう。さあ入りなさい」

といつて警官は盲生徒の手を取つて中に入れてくれた。何だかお閻魔様から入場券を貰つたやうな氣がした。

三

震災の時私は鄕里に居た。夏休暇は九月十日迄であるが震災のため一ケ月延期された。それで私が上京したのは秋も半ばの十月であつた。私は田端驛で汽車を降りて、其處から省線で目白に行つた。その頃バスが無かつたので私は人力車で寄宿舍に歸らうとした。ところが震災のためか一臺の俥も無かつた。日ははやとつぷり暮れてあたりは眞つ暗だつた。前夜來可なり雨が降つたらしく道は汁粉をぶち撒いたやうな泥道であつた。私は夜はよく見えないので、どうして歸つたらよいもの

かと途方に暮れた。

私は暫らく躊躇してゐたが思ひ切つて歩き出した。自動車が疾走して來るたびに泥水を叩きつけるやうにひつかけられた。新らしい下駄は水溜りに入つて鼻緒までびつしより濡れてしまつた。今朝家を出る時母は御赤飯をこしらへて祝つてくれた。汽車の中でお上がりと云つて菓子まで包んでくれた。弟妹たちは玄關で聲を揃へて「いつてらつしやい」と云つた。私は一寸先も見えない闇の道を歩きながら郷里のことを思ひ出して淋しい氣持ちになつた。

その時、後ろの方から馬車がやつて來た。私は馬車を先にやり過ごさうと思つて道の端に立つて馬車の過ぎ行くのを待つてゐた。馬車は幾臺も續いた。十臺位は通つたらう。私は最後の馬車のあとについて歩いた。この馬車について歩けば大丈夫だらうと思つて、私は車に手をかけて歩いた。馬は水溜りであらうが、泥道であらうがおかまひなしに進んでゆくので、そのあとについて行く私は着物の裾も袴も泥だらけにしてしまつた。然し私は車から離れまいと大股でついて歩いた。すると不意に馬車が停まつた。その拍子に私は身體を車に打つつけた。

「おい」と馬方が提灯を提げながら私の所へやつて來た。そして、

「あんたは眼が悪いのかね」

ときいた。

「はあ、晝はさうでもないのですが夜は見えないのです」

といふと

「どうも變だと思つた。ぢや私と一緒に歩こう」

と云つて、馬方は片手で手綱と提灯を持ち、片手で私の手を握つて歩き出した。

「どこへ行くのかね」

と馬方は私に向つてきいた。私は雜司ヶ谷の盲學校の寄宿舍に行くのだと答へた。

「ああ、あんたは盲啞學校の生徒さんか」

と馬方は如何にも氣の毒だといつた調子で言つた。私は夏の休暇が終つたので今朝田舍から出て來たのだと話したら、馬方は、

「お國はどこかね」ときいた。

「福島縣です」

「えッ、福島、私も福島縣人ですよ」

と馬方は驚ろいたやうに叫んだ。そして、

「福島のどこですか」
ときいた。
「二本松です」
と答へると、
「二本松なら私もよく知つてゐます。さうか二本松か、……あんた、もう心配しなさんな。あんたの行く處まで私が送つてつて上げますから」
と馬方は親切に言つてくれた。私は心の中で合掌した。
私は奇特な馬方に送られて無事に寄宿舍に歸ることが出來た。別れる時、私は財布から一圓札を一枚出してお禮に上げやうとしたが、義俠な馬方はどうしても受取らないで歸つて行つた。

金の杖

寄宿舍の私の室に服部さんといふ盲生徒が居た。當時、普通科(今の初等部)の生徒だつた。お父さんはお醫者さんださうで、どこか良家の坊ちやんらしい感じがした。身體が人一倍小さいのが眼につく。その頃、十二、三歳だつたと思ふが、どう見ても普通の子供の八、九歳といふところで、或ひはもつと丈が低かつたかも知れない。或る日服部さんが一人で外出した時、道の眞ん中に馬が居たのに氣が付かず、馬の腹の下を杖ついて通り抜けたさうである。それを傍で見てゐた人からきいたのであらう。
「どうも驚ろきましたよ、私が馬の腹の下を潜るなんて、聞いてひやりとしました」
と、こちらで言ひたいことを自分で言つて笑つてゐた。恐らく馬の腹の下を杖ついて通つた盲人は、世界廣しといへども服部さんのほかはあるまい。洒落をいふやうだが服部さんの名前は通(トオル)といふのだ。
「よく蹴られなかつたなぁ」
と私が感心して言つたら、
「僕も不思議に思つてをります」
と云つてゐた。その位、當時服部さんは身體が小さかつたのである。ところが此の間同窓會の名簿を見たら、服部さんが會の役員になつてゐる。へーえ、あの服部さんが——
と今昔の感に堪えなかつた。

或る日、私の室に面會人が來た。そして窓の方を見てアハハハと笑つた。何だらうと思つて見ると、盲生徒が洗濯したのであらう、猿股が干してあつた。それが又振つてゐる。杖の兩端に紐をつけて窓の下にぶら下げ、そいつに猿股が掛けてあるのだ。盲生徒だけに杖を色々な方面に利用することを知つてゐる。

西洋の習慣では、杖はついて歩くものでなく、持つて歩くものださうだ。してみると、杖は紳士の裝身具である。

私の考へでは、眼明きや盲人が杖を使用する分には差支へないが、私などのやうな中途半端な眼を持つてゐる者は、杖を使ふにもよつぽど氣を付けなければならないと思ふ。何故といふに、杖を持つとこれで大丈夫だといふ安心が出て、足許に油斷が出來るからだ。私は一度、上野驛のプラットホームを杖をついて歩いたら、柱にいやといふほどおでこを打つ衝けてひどい目に遭つたことがある。眼鏡を壞さなかつたのが不幸中の幸ひだつた。眼なら眼、杖なら杖と、一方に注意力を集中しなければ駄目だ。二兎を追ふ者は一兎も得ずとはこゝだ。私は晝は杖無しの方が歩き易いが、夜は夜盲なので杖を持つてゐると、とても調法である。一番有難いと思ふのは梯子段の昇り降りである。はは、ここから階段か、と杖を前に出して歩くと分る。一二間も手前からびく〳〵して歩かなくてもいゝ。

これは吉田晴風先生からお聞きした話だが、先生が或る日、新宿驛のプラットホームで省線を待つてをられると、一人の盲人が電車の停車する場所から餘程離れた所に立つて居たさうだ。電車が突進して來た時、先生が盲人の方を振り返つて御覽になられると、盲人は電車の音を聽きつけて、一散に駈けて來たさうだ。よくまああんなに駈けて來られるものだと思つて見てゐると、何んと、盲人だけにうまいことを考へたもので、杖をプラットホームの縁りにあてゝ走つて來たのださうだ。さういへば溝の縁に杖をあてゝ歩いてゐる盲人があるが、これは梯子段の手すりにつかまつて歩くのと同じことだ。

盲人でゐて杖をついて歩くのを嫌がる人がある。私の室に勘のいゝ盲生徒が居て、よく杖無しで外出してゐた。尤も最初の一回は杖をついて行くのだらうが或る日、その盲生徒が目白の知人の家へ杖なしで訪ねて行つたさうだ。學習院の前を通つて、このあたりで右に入る道があつた筈だが、と顏に風のあたる工合で勘を働らかせ、ここらだらうと思つて道を曲がつて行つたら、しーんとした所に入つたさうだ。靜かだなあ、と思ひながらどん〳〵歩いとゆくと、不意に首つ玉に何か引つ

懸つたさうだ。ハテナ、と思つて觸はつて見ると、洗濯物をかけた干竿だつたさうだ。道の眞ん中に干物でもあるまいし、こりや何處だらうと立ち止つて考へてゐると、

「あなた何か御用ですか」

と女の聲がしたさうだ。

「僕はどこそこへ行くんですが、此邊はどこですか」

と盲生徒がきいたら、

「こゝは家ですよ。あなた間違へたんでせう」

といつて女の人は盲生徒を門の外に連れて行つて呉れたさうだ。

「よつぽど廣いお屋敷だつたぜ。だが物干竿に首をひつかけたのは不覺だつた」と言つて笑つてゐた。

私は學校を卒業する時、校長先生から立派な黄金の杖を貰つた。私ばかりでない。私のクラスの者は全部金の杖をいたゞいた。といふのは、卒業證書の周圍が金の杖で圍まれてゐるのだ。八本の杖でぐるりと證書のまわりを取りまいてゐるのである。誰が考へて畫いたのか知らないが、何處まで盲學校式だと思つた。

運動會

運動會が始まるといふので私たちも一生懸命練習をした。全校生徒を紅白に分ける。どつちが勝つかといふことは、俺の方に優秀な半盲生が幾人居るかといふことによつて、略ぼ決定する。盲人ばかりではいくら盲學校でもいゝ運動會が出來ない。先生も生徒も全部盲人だつたらとてもやれないだらう。第一、どつちが勝つたのか分らない。競技が始まると紅白互ひに負けず劣らずワア〳〵應援する。自分の控へ席の前を走つて行く選手は敵だか味方だか分らないから誰彼かまはずしつかり〳〵と聲援する。競技が終つてから、はてどつちが勝つたのかと、盲生徒たちは耳を傾けてきいてゐる。半盲生が「俺の方だ」といふと、わあツと歡聲を擧げる。その間一寸間がある。恰度外國人が面白いことを喋つたのを通譯から聞いて初めてアハハハと笑ふやうなものだ。半盲生でも初等部からずつと上がつて來た者は何とも思はないが、中途で少し年を取つて盲學校に入つた者は運動會に出るのを嫌がる。見物人の前で盲人と一緒に走るのは外聞が惡いといふのだ。それで半盲生の中には假病を作つて出ない者も大分あつた。だから運動會で大いに活躍する半盲生があつたとした

ら、それは初等部上がりか、でなければ悟りを開いた人と見て差支へない。馬鹿々々しいといふ氣持を持つたのでは、とてもやれるものではない。

競技の種目をみると、なるほどみんな盲人にはお誂へ向きだ。二人三脚、擔架競走、綱引、騎馬戰等々、これは半盲と全盲とが組んでやるのだ。擔架競走だと、乘る者は初等部の目方の輕い盲兒、擔ぐ者は前が半盲で後ろが全盲だ。盲生徒も物に捉まつたら強い。へなへなの半盲生は參つてしまふ。「おい、そんなに押すなよ、のめつて轉ぶぜ」と半盲がいふと、「何だ、意氣地がないなあ、もつと早く走れんか」と全盲。騎馬戰では、三人で一頭の馬を作るのであるが、全盲ばかりでは何處に敵が居るのか分らないから半盲を一人位加へて置く。騎士は全盲半盲どちでもよい、強さうなのを選ぶ。全盲の騎士は「敵が來たら敎へてくれ」と半盲の馬にいふ。半盲の騎士は見えるから相手を見てこいつは險呑だと思ふと方向を轉換する。「逃げたなあ、卑怯だぞ、返せ〳〵」とまるで熊谷直實氣取りで盲騎士が怒鳴る。馬は馬同士で小競り合ひをすることがある。この場合、やはり半盲生の方が歩がいゝ。といふのは馬は互ひに手を繫ぎ合つてゐるので手の自由が利かない。働らくのは足だ。半盲生は敵の足を拂ふ。「誰だ、俺を蹴つたのは」と口惜しがる。中には食ひ付く馬も居た。敵の騎士を首尾よく打ち落とすと苦戰してゐる友軍を應援に行く。「どつちだ。上か下か?」

ときいて獅嚙みつく。天晴な武者振りだ。

女生徒の競技にバスケツトボールがある。たとひ眼は見えなくとも澄み渡つた秋の大空を仰いでボールを投げてゐる姿を見ると、いぢらしいといふ感じが起る。殊に中途失明の女生徒が、晴眼者と少しも變らない動作で、恐らく失明前にさうしたであらうやうに、高くボールを投げて、その行方を追ふやうに瞳を凝らしてゐる姿を見ると氣の毒といふ感じがする。ボールが籠の中に入つたか入らないか、球が低いか高いかをきいてゐる者もある。

綱引きはずる〳〵引つ張られる方が負けるのだから盲生徒にも勝敗が分る。塙保巳一は子供の時分、草花を植ゑて、その花が眼開きの人から美しいと褒められるのを何により樂しみにしてゐたといふことである。だから盲生徒が競技を觀ることは出來なくても勝負をきいたゞけで喜ぶのは當然である。私は入學した最初の運動會に拔群の働らきをして賞品を七つ貰つた。手拭、ハンカチ、アンパン、點字紙など。盲學校の運動會も勝つと嬉しいものだ。

私は運動會に出て本當にいゝ體驗をしたと思つた。それは盲人と心を一つにして互ひに助け合ふ

ことが出來たからである。盲生徒も運動會の時、半盲生の親切と協力が如何に心强いものであるかを感じたであらう。社會に於てもその通りである。此の世の中は眼明きの社會である。盲人で若し社會的に立派な地位を得たとしたら、それは盲人自身の才能と力量にもよるであらうが、それ以上に眼明きの人が寄つてたかつて親切にし、引き立てゝくれるからである。田中祐吉先生の「ダーウインを追想して」の中に次のやうな一節がある。

「千里を驅ける駿馬も伯樂に見出されなかつたら、空しく槽櫪の間に老い朽つるであらうやうに、偉人英雄たるの素質ある俊髦の士といへども、之を起用し鞭撻してその騏才を伸ばさしてくれる長上先進が無かつたならば、風雲に乘じ青雲に登るべき機會を掴むことが出來ないで、轗軻不遇の一生を送り陋巷に朽するかも分らない。（中略）一世の文豪碩學に於ても亦た同樣であつて、賴山陽が日本外史を公にしその文才と識見とが江湖に認められて、今なほ彼に對する崇拜者禮讃家の多いのも白河樂翁の知遇を辱ふしたがためであり、又本居宣長が眇たる一醫人の身を以てして國學界の泰斗となり、千古不朽の名著「古事記傳」を世に公にして偉名を竹帛に垂れたのも、偶然の機會から賀茂眞淵の門下に入りその指導誘掖を受けたがためであつた。（中略）

人の知る如くチャーレス、ダーウインは大生物學者であり進化論の大成者である。さりながら彼が生物進化の理法を發見して千古不朽の名著「種の起原」を公にし啻に生物學界のみならず、社會學、倫理學等の方面に至るまでも從來の面目を革新して一代の師表碩學と仰がれ、ダーウインといへば進化論、進化論といへばダーウインと云はれるやうに、兒童走卒の間にさへ、その盛名を知られてゐるのは、要するに彼が青春時代の際、恩師たる植物學者ヘンスロウにその科學的才能を認識せられ、世界探險の壯途に上るビーグル號の船長フィツツ、ロイの同行者に推奬せられ、滿五年間航海をつゞけて、生物界の現象を汎く觀察することが出來た結果である。若しダーウインにしてヘンスロウに認められなかつたならば、彼は平凡な醫師か若くは牧師となつて碌々たる一生を終つたかも分らなかつたであらう。……

狂言

或る日、私が室で燻ぶつてゐると一號室の佐々木さんがひよつこりやつて來た。

「何か用ですかね」

と私がきいたら、

「一つ賴みたいことがあるんだ」

と佐々木さんはにこ〳〵しながら言つた。

佐々木さんの活辯のうまいことは學校中でも評判である。凡そ天才とは佐々木さんのやうな活辯を言ふのぢやないかと思ふ。何しろハムレツトにしろ椿姫にしろ巖窟王にしろ一度讀んで貰つたら小說の筋道は勿論、その中に現はれて來る人物の名前を全部暗記してしまふのだから凄い。外國人の名前は長つたらしくて一度や二度聞いただけでは頭に入らないものであるが、而も佐々木さんは澤山の人物の名を一度讀んで貰つたゞけで覺え込んでしまふのだ。佐々木さんは盲人だから墨字の本(眼明きの人が讀む本)は見えない。だから名前を忘れたら一々眼明き——盲學校の寄宿舍では我々のやうな半盲生——に讀んで貰はなければ分らぬ。ところが佐々木さんは一度きいたら決して忘れないのだから、それだけでも凡才でないことが分る。而も辯士となつて喋る時には內容を生かして悲しいところは悲しいやうに、嬉しいところは嬉しいやうに、滔々として淀みなく演ずるのである。私は佐々木さんの巖窟王を聽いたことがあるが、よくもあんな長い物を筋道一つ間違へないで喋べれるものだと感心した。

一體何處の學校でもさうだが、殊に盲學校では生徒に非常に優劣の差があるやうだ。盲生徒の中には、これは少々足りないなあ、と思ふやうなのが居る。失明原因をきいて見るとなるほどと肯かれる。腦膜炎から失明した人は概して出來が惡い。一寸話をしたゞけでは分らないが、こういふ人たちは「應用」が利かない。これに反し盲人にも非常な秀才が居る。何しろ外界の刺戟が少ないので一つ事に熱中したら一直線だ。音樂の天才などは、さうざらには無いと思ふが、——生意氣なことを言ふやうだが——學問の天才、天才とまではゆかなくても秀才は澤山居る。私が盲學校に入つた時、或る人が私に向つて、

「盲人には人物が居ないから君なんか勉强次第でいくらでも偉くなれるぞ」

と言つた。私を激勵する意味で申されたのかも知れないが私としては納得出來ない。

「社會的に立派な地位のある人がそんなことを言はれるのは聞き捨てになりませんなあ。それは量見ちがひといふものでせう。若しあなたが子供の時から盲目だつたらどうなつてをりませう。やはり落ちつく所は按摩か鍼でせうね。盲人に人物が居ないんぢやないんです。盲人となつたら生きて行く道が限られてゐるのです。社會がもつと盲人に同情と理解を持ち、盲人に高等教育を授ける道を拓いてやつたら優れた人物がきつと出ますよ」

と私が胸中の鬱憤を洩らすと、

「うむ、尤もな話だ。だがな、話は別として、盲人には盲根性といつて意地の悪い、ひねくれた己惚れの強い、人に對して忘恩的な、排他的なところがあるから、君もそんな根性に染まらないやうに氣を付け給へ」

私は此の言葉をきいて、これも私の將來を思つてくれる好意からであると感謝した。だが、これにも辯明の要がある。

「盲人にあるひはさういつた缺點があるかも知れませんが、何もこれは盲人に限つたことではなく普通の人にも言へることです。たゞ盲人は人の助けを受ける立場にあるので、さういふ境遇の人が多少でも缺點を持つてゐると、よけい醜く見えるのではないでせうか。だが盲人に立派な教育を施こせば、品性も高尚になり常識も發達してくると思ひます。何といつても一番大切なことは盲人に普通人と同樣な教育を授けることであります」

と當時は私も未だ十九歳の青年だつたので臆面もなく持論を披瀝したものである。

さて、本筋を外れたが、佐々木さんが私に頼みたいことがあるといふのは斯うだ。佐々木さんは

六號室に居る瀧川といふ盲生徒に金を一圓貸したが、一ケ月經つても二ケ月經つても返してくれない、それについて、と佐々木さんは一寸耳を澄まして、

「誰も室に居ないか」

とたづねた。

「うん、俺一人だ」

と私が答へると、

「ちや言ふがね、一つ芝居をやらうと思ふんだ」

「なに、芝居？」

佐々木さんは聲をひそめて私の耳もとで、ひそ〳〵囁やいた。

「ふむ、さうか」

と私は肯づいた。

「その代り瀧川から一圓取つたら君にナヘロ(なへろ)を奢るよ」

佐々木さんは中々うまいことを云ふ。御馳走で私を釣らうといふのだ。ところでこのナヘロだがこれも眼明きには獨逸語だか支那語だか分らないから私が通譯して置こう。先づ初めに點字の說明

だが、點字は六つの點で一個の文字が出來るのである。文字は片假名だ。六つの點は縱に三つづつ即ち二行になつてゐる。眞田幸村の六文錢の旗印しと思へば間違ひがない。六つの點は他の點とごつちやにならないやうに桝(ス)で圍ひがしてある。此の點字を發明したのは佛蘭西の天才盲人ルイ・ブライユだ。今日世界の盲人が使用してゐる點字はいづれもブライユの發明した點字である。實に不朽の功績を殘したものだ。だが天才は不遇の譬へに洩れず、これほどの大發明をしたブライユも生前に酬ゐらるゝ所少なく、彼が死んで二年經つてから(一八五二年)漸くその業績が世に認められたのである。ブライユの點字で我が國のイロハ假名文字をこしらへられたのは盲教育界の先覺者石川倉次先生である。

佐々木さんのいふナヘロとは蕎麥のことである。どうして蕎麥のことをナヘロといふかといふと、前にも述べたやうに六つの點の運用一つでどんな字でも作れる。六つの點にみんな孔を開けると「メ」といふ字になる。これは文字としても使ふが、他の文字を書いて間違へた時、その文字を潰してしまふために此の「メ」を書く。メメメメとメが數の子の卵のやうに澤山竝んでゐるのは字を間違へたか文章を間違へて潰してしまつたあとだ。ところでソバのソといふ字は六ツ點の中のある四ツの點に孔を開けて作る。孔の開いてゐない殘りの二つの點を拾つて讀むとナとなる。ナヘロとはソバといふ字を書いて孔の開いてゐない點を拾つて出來た文字である。まあ點字の講釋はこの位にして置こう。ナヘロを縮めてナヘともいふ。これはモダンガールをモガといふのと同じだ。吾々がよく出掛けた蕎麥屋は女子大裏の松月である。普通の蕎麥屋には青い暖簾がかゝつてゐるが此處のは赤だ。眼につきやすい。それに寄宿舍からは一本道なので少々勘の惡い盲生徒でも行かれる。寄宿の飯が不味いので夕方になると寄宿生がワンサ〳〵押しかけたものだ。師範部生には官費が支給される。三年生になると月に十六圓貰える。私たちのクラスの中には十六圓をそつくりそのまゝ松月に注ぎ込んで榮養は甲の上々だと太平樂をならべてゐた者もあつた。

又話が外れた。

佐々木さんは、

「さあやらうぢやないか、瀧川はさつき室に居たからやるなら今だ」と云つた。

「ほんとにナヘロを奢つてくれるのか」

と私が念を押すと、

「俺は嘘と坊主の髪を結つたことがねえだよ」

「ぢや演らうかな」

と私は立ち上がつた。

「君は食堂の方から來いよ、俺は玄關の方から行くから」

と佐々木さんが言ふので私はずつと遠廻りをして中舍の廊下に出た。瀧川の居る六號室は中舍の眞ん中にある。向ふから佐々木さんが顎を突き出してやつて來た。勘がいゝので手離しで廊下の眞ん中を歩いてゐる。廊下の廣さは一間位。

六號室の前でばつたり會つた。

「やあ佐々木さんぢやないか」

と私は敎はつた通り大聲をあげて叫んだ。

「おゝ野地さんか」

と佐々木さん、

「君には困るよ」

と私がいふと、

「何が？」

と佐々木さん、

「何がつて君、とぼけちや困るよ、（と更に一段と聲を張り上げて）君に貸した金いつ返してくれるんだ」

佐々木さんはさも恐縮したやうな聲で、

「さう責めないでくれろよ、俺だつて氣にはしてるんだ、實はねえ、野地さん、（と此處で佐々木さんはぐつと調子を高め）俺も友達に一圓貸してあるんだが、中々返してくれないんで弱つてるんだ。その金を貰つたら早速君に返すから勘辨してくれないか」

「どうも困るなあ、（と又語氣を強めて）少しは貸す方の身になつて考へて見ろよ、君はそんな不義理な人とは思はなかつた」

「君に何といはれても仕方が無い、俺が惡いんだから」

と佐々木さんは神妙な顏をしていふ。

「仕樣がないなあ、君はよく學校をサボるが、金錢にも信用のない男とは思はなかつた」

と私は吐き出すやうに言つて佐々木さんとすれ違つて別れた。私が室に歸ると、佐々木さんも廊下をぐるつと一とめぐりして私の所にやつて來た。

「これで第一卷の終りとでさい。野地さん君も中々芝居がうまいなあ。何だか俺が本當に君から借

金したやうで少々氣まりが悪かつたぜ、瀧川にはピンと來たらう。だが、俺が學校をサボることまで喋つたのはよけいなこつたな、あんなこと言へつて俺は言はなかつたらう。舍監室の近くで言はれたんで俺あ臺無しだよ」

「心配するな、舍監は居なかつたよ、俺はちやんと舍監室を覗いて來たんだ」

「さうか、居なかつたか、君も中々拔け目が無いなあ」

といつて、佐々木さんはこりや萬事うまくゆきさうだぞといふやうな顏付をしてゐた。」

月夜の校庭

家人の不在な家は玄關の戸を開けた瞬間に無人だな、と直感するものである。それと同じやうに盲學校の校門を一歩入ると何となく淋しい感じがするものだ。本校舍の前には砂利が敷きつめてある。あの砂利の音をきくと懐しさの中にある淋しさを感ずる。

休暇が終つて歸京すると、その頃は人力車の時代だつたので、上野から俥に乘つて寄宿舍に歸る。雨が降つてゐる時には幌をかけて走る。幌の左右には小さなセルロイドの覗き窓がある。が、それも雨に曇つて道を往く人の姿も枝垂れ柳も朧ろに見える。地理に明るい俥屋さんは靜かな横町に入つたり賑やかな電車道に出たりする。幌をかけた俥の中で雨の音や電車の音をきいてゐると田舍から出て來た氣の弱さを覺える。上野から雜司ヶ谷の寄宿舍までは可なり道程がある。汽車の疲れが出て來たのだらう、股の間に柳行李を挾んだまゝついうつら〳〵となる。俥が何處をどう走つてゐるのかそんなことに氣を止めなくなると睡氣がさして來るものだ。

搖られ〳〵てうと〳〵としてゐる時、突然がら〳〵と砂利の上を軋る音に、ハツと眼を覺ます。「來たな」とほつと安心すると同時に、今朝出て來た鄕里のことを思ひ出して一寸淋しい氣持になる。寄宿舍に歸つた時、一番初めに聞くのが此の砂利の音である。私は卒業後滅多に母校を訪ねたことがないが、あの砂利の音をきくと休暇が終つて田舍から歸つて來た當時のことを想ひ出して懐しくなる。あの頃は私も靑年だつたし、兩親も達者だつた。今一度あの當時に還つて見たいものだと思ふ。

音樂生の福田六郎さんが夏休みに亡くなられた時、家人が石川舍監の所へ訃を傳へに行つたら、丁度夕方で先生は寄宿生が皆歸省してしいんとした運動場に杖を曳いて靜かに凉んでをられたさう

である。先生は福田さんの死を聞かれると、あの砂利の上に佇ずんだ儘、しばし瞑想されたさうだ。白髯をふさ〳〵と胸のあたりまで垂れた七十に近い老先生が、夕暮れの校庭に生徒の死を悼まれてゐる御姿を想像すると哀感を催ほす。その先生も亡くなられて早十餘年になる。

砂利を敷きつめた校舎の前に白いペンキで塗つた腰掛が据えてある。或る晩、私がそのペンチに凭りかゝつてぼんやり考へ込んでゐると向ふから妙利を踏む音がして誰かやつて來た。近寄つて來たのを見ると私の室に居る初等部の盲生徒であつた。

「おゝ誰かと思つたら君か」

と聲をかけると、

「ああ此處に居たんですか」

といつて一間も手前からペンチを捜がすやうに手をさし伸ばしながら近づいて來た。

「こゝだ」

と私が盲生徒を傍らに腰かけさせると、

「ほかに誰も居ないのですか」

と云つて、ペンチを撫でまわした。

「いゝ月だなあ」

と私が言つたら、

「月が出てるんですか、どつちの方ですか」

と訊く、

「あそこだ」

と私が盲生徒の手を取つて月の方向を指ざすと妙に手を硬ばらせて、

「あそこですか」

ときく。

「うん、さうだ」

と答へると、盲生徒は大空を仰いで、

「美しいですか」

ときいた。

「君は何時頃から眼が見えなくなつたんだつけな」

ときいたら、

「僕は生れつきなんです。だから色が分らないんです。月が美くしいといつてもどんな色をしてるか分らないんです。ね、雪が降ると銀世界のやうだつて言ふでせう。だけどその銀世界つてどんな色だか分らないんです。手で雪を觸つて見たゞけでは、たゞ冷たいとしか感じないでせう。これをどうして銀世界つていふのか想像がつかないんです。一度お月様を見たいなあ。どんな色をしてるんだらう」

と云つて、私が敎へて上げた月の方向を仰いでゐた。

月は盲生徒の顏にも肩にも輝やいてゐた。校庭は砂利が一つ一つ數へられるほど明るかつた。

「僕ねえ」

と盲生徒が言つた。

「僕ねえ、鳥に生まれてくればよかつたと思ふの」

「どうして？」

と私がきくと、

「學校の屋根に鳩が巢をくつてゐるでせう」

「うん」

「あの鳩ねえ、僕毎日啼くのをきいてるんだけど、羨ましいと思ふなあ」

「どうして」

「鳩はねえ、空を飛んでも打つかるものが無いでせう。柱にも樹にも打つからないし、地べたのやうに躓づく物も無いし」

「それもさうだな」

「でもやつぱりめくらだつたら詰らないでせうねえ」

と子供らしい惱みを訴へるのであつた。私は盲生徒のこれから先の長い生涯を考へるといぢらしくなつた。

あたりはひつそりとして來た。月は益々冴えて來た。

「僕ねえ」

と盲生徒は再び語を繼いで、

「僕ねえ、お母さんにきいたことがあるの」

「何んて？」

「お母さんにね、弟や妹たちは皆眼が見えるのに、どうして僕ばかり盲に生まれたんでせうつて」

「さうしたら？」

「さうしたらねえ、お母さんが言つたの、これが運命といふものだつて、だけどね、眼が見えなくても、正直で素直だつたら皆に可愛がつて貰へるつて、さうお母さんが言つたの」

「さうだとも」と私は強く頷づいだ。

「でもねえ、僕こんなことをきいて悪かつたと思ふんです」

「どうして」

「だつてお母さんが泣いてゐたから」

私は盲生徒のお母さんをよく知つてゐる。時々寄宿舎にたづねて來ては、盲生徒の夜具蒲團の襟や、枕の覆ひを取り換へたり、綻ろびを縫つたりしてゐた。いつもおいしいお菓子を持つて來られた。盲兒の母は細かいことにも氣のつくものであると思つてゐた。

寄宿生でも東京に家のある者は土曜日から日曜にかけて泊りがけで家に歸るのが常であつた。ところがこの盲生徒は東京に家があるのに一向歸りたがる樣子が無かつた。最初、私も不審に思つてゐたが間もなくその理由が分つた。盲生徒の現在のお父さんといふのは繼父なのださうである。さういへば盲生徒の身のまわりのことを心配して始終たづねて來られるお母さんにもどこか淋しいところがあるやうに思はれた。

淺蜊

昨年の十一月、鄕里から友人の齋藤君が十年振りで出て來て拙宅に十日程泊つて行つた。その時の昔話だが私が盲學校に居る頃、齋藤君は早稻田に在學してゐた。當時齋藤君の下宿は牛込の山吹町あたりではなかつたかと思ふ。或る日、私が盲生徒二人の手を曳いてぶら〳〵歩いてゐるのを齋藤君がふと下宿の二階の窓から眺めて、同居の者に向ひ、

「おい、野地が盲人の手を曳いて歩いてゐるぜ」

と囁やくと、同鄕の學生も、

「うん、たしかに野地だ、盲學校に入つたといふことは聞いてゐたが、あゝしてめくらの手を曳いて歩いてゐるとは思はなかつた。氣の毒だなあ」

と二人は私の後ろ姿をいつまでも凝視めてゐたさうである。

私が盲學校に入つてから齋藤君も盲人に氣が付くやうになつたらしい。これもその時の昔話だが或る年の夏、齋藤君は休暇が終つたので友人と一緒に上京したさうだ。途中でふと何氣なく車内を見廻はすと、向ふの隅に一人の盲學校の生徒が乘つてゐるのに氣が付いたさうだ。帽子の徽章を見ると東京盲學校だ。齋藤君はつか〳〵と盲生徒の所に行つて言葉をかけたさうだ。（こゝが齋藤君の偉いところだと思ふ。衆人環視の中で平氣で盲人に話しかけ得る人は少ないだらうと思ふ）

「失禮ですがあなたは東京盲學校の生徒さんですか」

ときくと、盲生徒は突然に聲をかけられたので吃驚したらしい。

「はあ」

と考へ込むやうに俯向いたまゝ返事をしたさうだ。

「僕の友人に野地といふのが東京盲學校に入つてるのですが、あなたは御存じですか」

と齋藤君が訊くと、盲生徒は急に活き〳〵した顏付きをして叫んださうだ。

「ええ、知つてます。野地さんは私と同級で寄宿舍では同じ部屋です」

「へーえ」

と今度は齋藤君の方で驚ろいたさうだ。

「さうですか、僕は野地とは同鄕で少年時代からの友人です」

さう言つて齋藤君は初めて見る盲生徒に舊知のやうな親しみを感じたさうだ。同じ日に同じ汽車で而も同じ客車に乘り合せたといふのも不思議だ。人のいゝ齋藤君は色々盲生徒に話しかけたさうだ。盲生徒も話し相手が出來たので非常に喜こんださうだ。

汽車が大宮を過ぎた時、齋藤君は盲生徒に向つてきいたさうだ。

「何處で降りますか」

「赤羽で降ります」

「赤羽からどうして歸りますか」

「省線に乘つて目白に行きます」

「誰か迎えに出てるんですか」

「いゝえ」

齋藤君は心配さうに、

「ひとりで大丈夫なのですか」

ときいたら、盲生徒は、

「ええ歸れます」
と答へたさうだ。齋藤君は一寸腕組みをして考へてゐたが、
「では私があなたを送つてつて上げませう」
と云つたさうだ。盲生徒は思ひがけぬ齋藤君の溫かな言葉に、ほつと安心したやうに、
「濟みません」
と丁寧にお辭儀をしたさうだ。
「あの時、僕は上野で降りた方が都合がよかつたのだが、盲人が一人で汽車を降りたり省線に乘つたりすることを考へると、どうも獸つて居れなかつたんだ。それで一緒に來た友人と別れて、赤羽から盲人の手を引いて目白に行き、そこから寄宿舍まで歩いて送つてつてやつた」
と齋藤君は當時を述懷してゐた。親切な男だなぁと思つた。
「さう〳〵」と齋藤君は語を繼いで、
「君から淺蜊(アサリ)を貰つたことがあるな」
と云つた。
「アサリ？」

と私がきゝ返すと、
「うん、遠足の歸りだといつて僕に呉れたつけ」
「ああさうか」
と私はやつと二十年前のことを思ひ出した。

盲學校では春秋に遠足をする。齋藤君のいふのは寒川へ行つた時のことだ。私が在學中に遠足したところを算へて見ると、赤羽の浮間ヶ原、荒川堤、(五色櫻の名所)玉川の梅園、目白の哲學堂、落合、(芋掘り)川越、鎌倉、江ノ島、少し離れた所では水戸、日光、中禪寺湖、京阪地方とざつとこんな所だ。一度天文臺へ見學に行つたら翌日の新聞に「めくらの望遠鏡のぞき」といふ題でデカ〳〵と出た。荒川堤へは毎年のやうに行つたものだ。當時は花見の假裝行列が未だ禁止されてゐない頃だつたので、鉦や太鼓で賑やかに通るのをきいてゐると氣持ちが浮き立つやうで面白かつた。又、川の上をモーターボートが波立てゝ走つて行く音も盲人には樂しかつた。堤の芝生に仰向けになつて寢ころんでゐると、空の上から雲雀の聲がきこえる。「いゝなあ」と盲生徒たちは疲れを忘れて樂しんだものだ。一度荒川に行く時、大好物の柏餅を一圓買つて箱に入れて持つて行つたが、

遠足の時などは喉が渇いて饅頭などあんまりうまいものでないとつく〳〵思つた。みんなに勸めても「甘いのはいやだ、お味噌の柏餅なら食つてもいゝ」といふ譯で半分位殘つてしまつた。

或る年、盲學校で千葉の寒川へ汐干狩に行つたことがある。淺蜊を獲りに行つた譯なのだが一向に見付からなかつた。何時迄經つても手持ち無沙汰だつた。尤も淺蜊の居さうだと思はれる所には繩張りがしてあるので入る譯にはゆかないのだ。

海岸の砂丘に屋臺車を据へてレースで編んだ網の袋に淺蜊を入れて賣つてゐた。一袋二十錢位だつたと思ふ。生徒たちは銘々それを買つてお土産にした。私も買つた。淺蜊を買つたゞけで汐干狩をしたやうな氣がした。盲生徒たちは裸足で砂濱を歩きながら清い空氣を吸つたゞけでもう充分だと云つてゐた。潮が滿ちて來た頃、一行は歸途に就いた。押上から市電に乘つて早稲田の關口町で下車した時は、はや夕方であつた。橋を渡ると胸突き坂といふ坂がある。今ではコンクリートの段々になつてゐるが、その頃は險しい坂であつた。この坂を上ぼり切つて少しゆくと老松町の通りに出る。交通の頻繁な所だ。この通りを横切つて角の金月といふ壽司屋の横丁を入つてゆくと學校は直きである。恰度、私が盲生徒の手を引いてこの通りを横斷しやうとした時、

「おい野地君ぢやないか」

と不意に呼び止められた。振返つて見ると齋藤君が一人の學生と一緒に立ち止まつてゐた。學校の歸りらしい、制服制帽である。意外な所で懷しい友人に遭つたものだと思つた。

「遠足か」

と齋藤君がきいた。

「潮干狩に行つて來たんだ」

と私は手に持つてゐる淺蜊を示して、

「これを上げやう」

と言つたら、齋藤君はぞろ〳〵通つて行く盲生徒の姿を見て心を打たれたらしく、

「折角獲つて來たんだから君持つて歸り給へ」

といつて辭退した。私が强つて押し付けるやうにして上げたら、

「濟まないなあ」

と如何にも氣の毒さうな顏をして受け取つた。

齋藤君はあの當時のことを追懷してゐるのだ、あの頃の齋藤君は元氣で健康そのものであつた。テニスもマラソンも水泳も運動といふ運動は何でもやつてゐた。それが不圖したことから病魔に侵

されてもうかれこれ十年も郷里で病ひを養つてゐるのである。昨年久しぶりに上京したのも良い醫者に診て貰ふためであつた。齋藤君が曾つて汽車の中で會つたといふ盲生徒も一昨年の夏、病氣で亡くなられた。齋藤君はあの盲生徒はどうしてゐるかなあ、と云つてゐたが私は默つてゐた。それは齋藤君を悲しませるからだ。齋藤君は拙宅に滯在中、左のやうな俳句を作つた。

木枯に玻璃戸鳴る夜の旅愁かな
冬薔薇(ふゆさうび)こぼれ果てたる旅愁かな

鴨川の水

盲人が女の美醜を語るからといつて、あながち不思議でもなく、眼開きと別に變つたところがない。それでは何を標準にして容貌の美醜を判斷するのかといふと、申すまでもなく聲である。私は盲學校の寄宿舍に七年間も居たので多少此の話題に觸れたことがある。盲人は透き徹るやうな聲をきくと美人ぢやないかと想像するらしい。聲の太い女は落第だ。俗に言ふめくら聲といふのは先天

性の盲人に多いやうだ。俯向き加減な人に此の聲が多い。私が盲學校に入つた時に先づ感じたのは、盲人が話しをする時の態度である。横を向いて話しをする者もあれば俯向いて話しをする者もあり、顎を突き出して喋言る者もある。これは先天性の盲人に多い。

中途失明者は、たとひ眼が見えなくても相手の顏に視線を向けて話しをする。それで、網膜炎や視神經萎縮などで中途失明した人と話をしてゐると眼の外觀に異狀がない上、視線がぴつたりと合つてゐるので盲人といふ感じがしない。何時であつたか、私は中途失明者の手を曳いて江戸川の易者の所へ運勢を觀てもらひに行つたことがある。易者(うらなひ)は私の連れて來た盲人を凝つと見て、

「ああ、貴方を昔の人で譬へたら大石良雄といつた人品骨柄の人です。悠揚として迫らぬその態度、實に盲人となられて惜しいですなあ。貴方の眼は普通の人より美しい。こうして對座してゐると盲人といふ感じがしません。貴方の眼はぴつたり私に注がれてをります。盲人となられて實に氣の毒ですなあ」

と言つて嘆息してゐた。そこへ行くと先天性の盲人は物など貰ふ時でも、顏を横に向けた儘手を出したりする。これは小さい時から注意してやれば、いくらでも矯正出來ると思ふ。

盲人が聲で美人を見分けるといふのは、どうもあてにならない。盲學校では男女共學だから、女といへば女生徒であるが、此の場合、全盲よりも半盲の女生徒を美人と思ふらしい。實際は全盲の女生徒にも中々美くしいのが居るのであるが。或る盲生徒は私に向つて、

「自分が盲人で斯ういふのも變ですが、めくらといふとどうも汚なく感じますねえ。女でもめくらだと何だか顏がまづいやうに思はれます」

と云つてゐた。これは盲人が自分の身のまわりのことも充分に出來ないのでさう思ふのかも知れない。

私が在學の頃、近所の齒醫者へ齒の治療に通つたことがある。此所へは寄宿舍に居る女生徒も通つてゐるらしい。面白い齒醫者さんで、

「盲學校にも中々美人が居るぢやないか。眼の見えないのが惜しいよ。みんないゝ所のお嬢さんなんだらうな。綺麗な着物を着てゐる。それに名前がいゝ。吉野花枝つて素敵な名前ぢやないか、アハハハ」

と笑つて私に話されたのを覺えてゐる。

一時、私の室に居る者が、しきりに或る女生徒を美人だ〳〵と噂してゐた。その女生徒が友達と話しをしながら室の前の廊下を通るものなら「來た〳〵」といつて耳を澄ましてゐる。あんまり盲生徒間の評判が高いので私も好奇心に驅られて、どれ一つどんな女か確かめてやらうと障子の孔から覗いて見たら、いやもうおどろいたことには、まるで牛蒡のやうに色の黑い頭の毛の拔けた女だつたので、

「なーんだ。これか、君たちが憧れてゐるのは」

といつたら、盲生徒は、

「俺らは絶世の美人だと思つてゐたが、そんなにみつともない女かなあ。歩く足音なんかスー〳〵と素敵ぢやないか。それに國は京都だと言つてたぜ」

と、まだ諦らめきれないといつた口吻だ。

「なあに、あれは香水をつけてゐるから綺麗に見えるんだらう」

と云つたら、

「それもあるかも知れない」

と正直なことをいつて、

「だが京都の女は鴨川の水で顏を洗つてるといふから色が拔けるやうに白いと思つたがなあ」

と、まるで六百年も昔の夢を見てゐるやうなことを云つてゐた。

講習會

數年前の夏であつた。私と同級生であつた宗像さんがひよつこり私の家へ訪ねて來た。

「何時出て來たんだ」

と私は不意の來訪に驚ろいて訊づねた。

「三日程前に來たんだ」

宗像さんの鄕里は福島耶麻郡千星村である。師範部を卒業後、會津若松の盲學校に敎鞭を執つてゐるのである。

「さうか、ちつとも知らなかつた。して今何處に泊つてゐるんだ」

「寄宿だ」

寄宿といふのは東京盲學校の寄宿舍のことである。

「何しに來たんだ」

ときいたら、

「講習會で」

と答へた。文部省主催の盲學校敎師の講習會だ。よくまあ眼の見えないのに獨りで上京したものだと感心した。

「上野驛で困らなかつたか」

と私がいたはるやうにたづねたら、

「何ともなかつた」

と元氣に答へた。私は宗像さんとは同級の上に、寄宿舍では一年間同じ室に居たので他人の樣な氣がしない。曾つて私は寄宿舍に新入生の歡迎會があつた時、次のやうなことを述べたのを覺えてゐる。

「皆さんと私たちは時代を同じうし、境遇を同じうしたればこそ、斯うして一緒になることが出來たのであると思ひます。若し皆さんが百年前に生れ、或ひは百年後に生れたとしたら一緒になること

とは出來なかつたでせう。そして私たちが眼が悪くなかつたら恐らく永久に相識ることが出來なかつたであらうと思ひます。こうして同じ境遇の下に寄宿舍で一緒に暮すといふのも何かの御緣であると思ひます」

宗像さんは初めて上京して寄宿舍に入舍した時、私の室に入られたので同級生の中でも特に私に對して親しみを持つて居たらしい。だから、卒業後も上京のたびに斯うして忙がしい中を雜司ヶ谷から芝の私の家まで杖一本を賴りに訪ねて來るのである。昔から會津の人は義理が固いと云はれてゐるがなるほどさうかも知れない。

一度宗像さんに誘はれて蕎麥屋に行つたことがある。今日は種物を食はふぢやないかといふ。よからうと私が返事をすると宗像さんは鴨なんばんだか親子そばだかを二人前注文した。お代りをして、さて勘定といふ段になつた時、宗像さんは、

「今日は僕に拂はせてくれ」

と云つた。

「冗談ぢやない、君に奢つて貰ふ理由が無い」

と私が言つたら、

「いや、君には色々世話になつてゐる。親に出す手紙を書いて貰つたり、床屋に連れてつて貰つたり、本を讀んで貰つたり、とても世話になつてるんだ。だから蕎麥位は奢らなくちや濟まないと思ふんだ。どうか僕に拂はせてくれ」

と何時になく眞劍な面持ちで、私の蟇口を持つてゐる手をしつかと押さへて離さうとしない。そして大聲で、

「おーい、お蕎麥屋さーん」

と怒鳴つた。

「へぇーい」

と階下から如何にも蕎麥屋らしい返事が聞こえた。

宗像さんは私の手を押さへた儘、

「お蕎麥屋さん、此の人から勘定を貰つたら僕は承知しないぞ」

と云つて、ポケツトから財布を出して蕎麥屋に勘定を拂つた。

どうしてこんな事を今でも覺えてゐるかといふと、私は盲生徒の面倒を見てやることがあつても彼等からついぞ奢つて貰つた經驗が無いからである。どうも盲生徒に自腹を切らせるのが氣の毒で

ならないからだ。

宗像さんは何時頃失明されたか知らないが、小學校にも少し學んだことがあるらしい。小林榮先生の薫陶を受けたと云つてゐた。小林先生は野口英世博士の恩師である。博士が生前先生を「お父さん」と呼んで尊敬してゐたことは人の知るところである。私が宗像さんに小林先生の書を書いていたゞけないものか、お賴みして見てくれないかと云つたら、宗像さんは快諾して、歸省した時、先生に揮毫して貰つて來てくれた。それは半紙大のものであつた。先生は宗像さんが盲目となられたのを不憫がつてをられたさうである。宗像さんは正直な質朴な人であつた、これは會津人の特徴かも知れない。宗像さんの鄕里では縣知事が視察に來ると、村民は道端に土下座して迎えるさうである。宗像さんが學校を卒業して會津盲學校に赴任した當時のことであるが、或る日、一盲生徒のお母さんといふのが、學校へ宗像さんを訪づねて來たさうだ。その時宗像さんがひどく心を打たれたのは、そのお母さんが廊下の床板に手をついて慇懃にわが子の禮を述べる態度だつたさうだ。これには學校出たての宗像さんも恐縮したさうだ。私が學校を卒業した年に、會津盲學校に宗像さんを訪問したことがある。その時同校の古い先生は一面識もない私を、宗像さんの友人であるといふそれだけで、私と宗像さんを自宅へ晩餐に招かれ、非常な御歡待をして下さつた。若松の家屋は一

般に間口が狹くて奥行きが深いといはれてゐるが、宗像さんと蕎麥屋に入つた時、なるほど奥行きが深いなあと思つた。これは土地の人の性質を現はしてゐるやうだ。若松に行つた時、私は宗像さんと朝早く東山溫泉へ散歩に行つた。まだ太陽の上がらない靜かな郊外を卒業後の感想を語り合ひながら、散歩したことは今も尙忘れることが出來ない。溫泉に着いた時、浴客一人居ない浴場でチヨロ〳〵と流れる湯の音をきゝながら二人で肩までふか〳〵と浸つたことを思ひ出す。

宗像さんは在學時代、よく私の肩を揉んでくれ、遠足から歸つた夜などは私が辭退するのも聽かず足を揉んでくれた。一體、吾々は身體を揉むのが本職だから何でもないやうに思ふかも知れないが、その實、お互ひに揉んでくれとは中々言ひ出せないものだ。何故といふに、揉むのは決して樂なものではないといふことを知つてゐるからである。人に骨を折らせて自分が樂をするなど、考へたゞけでも揉んでくれなどとは氣輕に言へるものではない。それを宗像さんが自分から進んで肩や足を揉まふといふのだから非常な好意なのである。何んの商賣に限らず、その人の職業を通じての親切ほど有難いと思ふものはあるまい。

何んといつても宗像さんの突然の來訪は嬉しかつた。

私が西瓜を出したら、宗像さんは、

「これは初物だ」

と云つて喜こんで食つた。

「田舍にもあるだらう」

ときいたら、

「まだ出ないんだ。出てもこんなに旨いのは食へない」

と愛想がいゝ。アイスクリームを出したら、

「こいつも初物だ」

と言つた。

「何だ。君はさつき汽車の中でアイスクリームを飲んだと言つたぢやないか」

「いや、汽車のアイスクリームとこのクリームとは第一味がまるつきり違ふ。こういふ旨いアイスクリームは初物だといふ譯なんだ」

とまた愛想よく笑つた。

「講習會は面白いか」

ときいたら、

「講習會そのものは面白くないが、皆と會へるのが愉快なんだ」

「皆來てるか」

「うん、みんな眼が見えないのによくまあ東京までやつて來ると感心したよ。やつぱり講習會よりは吾々と會ふのが樂しみで集まつて來るんだらう」

「懷かしいだらうなあ」

と私がきいたら、

「不意に友達の聲を聞いた時なんか何んともいへないねえ」

と言つた。

「不意とは何んだ」

「吾々は眼が見えないだらう。だから講習會に出ても誰が何處に居るか分らないんだ。講演なんかうはの空だ。あいつは來たかな、手紙には上京するつてあつたがどうかな、といろ〳〵友人のことばかり考へてゐるんだ。所が休憩時間の時に、僕のすぐそばで囁やき合つてゐる聲をきくと、何ん

とKぢやないか。やあKか、といふと、おゝ君かといふ譯なんだ。つい目と鼻の所に居ても分らないんだからなあ。僕のKを呼ぶ聲をきいて、やあ宗像君か、よう宗さんか、なんてあちらからもこちらからもクラスの連中の聲が一時に飛び出して來るんだ。その時の嬉しさつたらないなあ」

「さうだらうなあ」

「若し默つてゐたら一緒に長椅子に腰かけてゐてもお互ひに知らないで、又西と東に別れてしまふんだ。考へて見ると盲人は哀れだよ。自分の隣りに腰かけてゐるのが懐かしいクラスの者でも默つてをればそのまゝ別れてしまふんだからなあ」

さう言つて電氣の方を凝つと見詰めてゐた。電氣の明りはどうやらぼんやり分るらしい。その宗像さんも一昨年の夏三十五歳の若さで遂に亡くなられたのである。あれ程元氣だつたのにと人の壽命の定め難いのを沁々歎いた。

衣ずれの音

私は、在舍七年の中、四年は室長をしてゐた。室員は一室に八名である。私のやうな詰らぬ者でも室員の親たちは、我が兒が世話になつてゐると思ふのであらう、隨分社會的に立派な地位のある人でも丁寧に挨拶をされるので恐縮したものである。私の室に埼玉縣から來た初等部一年の盲生徒が居た。入舍した當初は家を戀しがつて毎日泣いてばかりゐた。とう〳〵困り拔いて同室の半盲生に賴んで實家へ歸させた。半盲生が歸つてからの話に、盲生徒の家は相當裕福らしく立派な門構へであつたと云つてゐた。盲生徒は家に一週間位居てお父さんに連れられて寄宿舍に戻つて來た。お父さんは眼光の鋭どい、口髭を生やした嚴格さうな顏をしてゐた。きちんと折り目のついた羽織袴に威儀を正してゐた。立派なお父さんだなあと思つた。

「色々御心配をかけて濟みませんでした」

といつてお父さんは疊の上に兩手をついてお辭儀をされた。私もぎごちなく挨拶をした。

「私からよく言つて聽かせました。これまで家にばかり居たものですから家が戀しくなつたんでせう」

と云つて、盲生徒の方を顧りみ、

「おい、もう歸りたいなんて言ふんぢやないぞ、分つたか」

と語氣を强めて訓されると、盲生徒は、

「はい」
と神妙に答へた。何處の父親も怖いもんだなあと思つた。
「これからいくら泣いても放つて置いて下さい。癖になりますから」
と、お父さんは言葉を和らげて私に言つた。
「はあ」
と私は長こまつて返事をした。
「實は此の子の母は一昨年死んだのですが、死ぬまで此の子を氣にしてましてね」
とお父さんは沈んだ調子で語られた。
「まあ考へて見るとこの子も可哀相なのですが——」
といつて、
「然し家に置いたのでは何時迄經つても何も分りませんので思ひ切つて學校に入れたのです。どうぞお氣付きの點は御遠慮なく仰言て下さい」
と云つて、凝つと我が子の顏に眼を注いでゐた。
親の威嚴といふものは恐ろしいもので、それから後は盲生徒も家に歸りたいなどとおくびにも口

に出さなくなつた。盲生徒は總領息子である。一體、盲學校の生徒は女子よりも男子の方が多い。そして長男が多數を占めてゐる。別に長男に盲人が多いといふ譯でもあるまいが、親も長男の敎育には特別の注意を拂つてゐるからであらう。
私が盲生徒に向つて、
「死んだお母さんを覺えてゐるかね」
ときいたら、
「うん、知つてる」
と答へた。
「君は何時眼が見えなくなつたの」
ときくと、
「生れつきだ」
と云つた、田舍辯丸出しである。
「ぢや、お母さんの顏は知らないんだね」
「うん、知らない」

「お母さんが死んで淋しいだらう」
「……」
と盲生徒は一寸無言で居たが、
「お母さんが死ぬ時、僕の手を握つて死んだ」
と云つた。
「お母さんも君のことをどんなに心配してたらうなあ」
と私が慰さめるやうに言ふと、
「うん、お母さんは僕を枕もとに呼んで泣いてゐた」
と云つた。
「お母さんの夢を見ることがあるかね」
ときくと、
「ある」
と一本調子で答へた。
「さうか、見ることがあるか」

「うん、寄宿舎に來ても見た」
「どんな夢？」
「お母さんが障子を開けて入つて來るところだ」
「でもお母さんの姿は見えないんだらう」
「うん、お母さんの着物の裾が疊に摺れる音だ」
「衣ずれの音か」
「うん、衣ずれの音でお母さんといふことが分るんだ」
「さうかなあ」
「うん、僕はお母さんの衣ずれの音をきいて嬉しかつた」
さう云つて盲生徒は又默つてしまつた。
「どうだ、もう家へ歸りたくないか」
ときいたら、
「うん、歸らなくてもいゝ」
とはつきり答へた。

「お父さんは怖くないかね」
と私が笑ひながらきいたら、
「うん、叱られると怖い、でもお母さんが死んでから僕を叱らなくなつた」
と云つた。そのお父さんもそれから一年程經つてから亡くなられたさうである。丁度盲生徒が夏休みで家に歸つてゐる時ださうだ。夏休みが終つて盲生徒は作男のやうな人に連れられて寄宿舍に歸つて來たが何だか浮かないやうな顏をしてゐた。そしてあれ程戀しがつた家にも本當に歸りたがらなくなつてしまつた。

一本氣

私が盲學校を卒業した年かその翌年に、宮下さんといふ、とてもよく出來る人が音樂科に入つたといふ噂をきいた。或る日、寄宿舍の音樂練習室に行つて見たら、大きな聲で唄を歌ひながら、琴を彈いてゐる生徒が居たので、誰だらうと思つて他の音樂生にきいて見たら、あれが宮下哲郎さんだと敎へてくれた。其後ふとしたことから、大層宮下さんと懇意になつて、一身上のことまで私に

御相談なさるやうになり、私も宮下さんのやうな稀に見る秀才を友人に持つたことを非常に嬉しく思つた。宮下さんのお父さんが上京されて學校の近くの雲大館といふ旅館に泊られた時も、私は宮下さんと一緒に旅館をお訪ねして親しく御尊父樣にお目にかゝつたことがある。こういふ譯で私は卒業生であり、宮下さんは在校生であつたが、お互ひに意氣投合したといふか、暇を見ては時々寄宿舍へ宮下さんを訪ねて行つたものである。

これは宮下さんから直接お聞きしたやうでもあり、他から傳へ聞きしたやうでもあり、その邊のことは忘れたが、何でも宮下さんは中學を卒業後、進んで高等學校に入らうと勉强されたが、眼の方が段々いけなくなつて、とても上級の學校に入ることが出來なくなつたので、ひどく前途を悲觀され、或る夜家人の隙を窺ひ、自殺を圖られたところ、豫ねてこのことを警戒してをられた御兩親に發見され、懇々と涙ながらに諭されて、遂に自殺を斷念し、更生の道を音樂に求めて盲學校に入られたのだといふことを聞いてゐる。一度は死まで決意された位であるから、盲學校に入學してからは文字通り獅子奮迅の勢ひで稽古を勵まれ、三年生の時にはあらましの曲を終へられたさうである。で、確かその頃だつたと思ふが、宮下さんは私に向つて、實力をつけるために人に敎へて見た

いと思ふ、人に教へれば自分でも覺える、一つ弟子を取つてみつちり勉强したいものだ、と話された。私は宮下さんの藝道熱心に感心して、それはいゝ考へだ、是非やつて見たらいゝだらう、それにしてもいゝ家を見付けなけりやならん、どうです澁谷あたりは、あの邊はこれから益々發展するさうだ、あそこらだと私の勸めてゐる病院の看護婦さん達も習ひに行くかも知れませんよ、大いに宣傳しませうと油を注いだら、僕も澁谷あたりはいゝと思つてたんだ、では一つ借家を搜しに行つて見よう、と二人で相談が一決して、或る日澁谷の近邊に出掛けて見た。先づ櫻ケ丘だの鶯谷だの道玄坂だの、方々搜し廻つたが、宮下さんが一人で住むやうな家は中々見付からない。しまひには草臥れて搜すのがいやになつた。二人でぶら〳〵歩いてゐると基督敎會の建物が眼に付いたので、

「ねえ宮下さん、一つ敎會に行つてこの邊に貸家があるかきいて見ようぢやありませんか」と私がいふと、宮下さんも「それがいゝでせう」と賛成したので敎會の玄關に入つて面會を求めた。すると中から會の人が出て來られた。

「何か御用ですか」

「この邊に貸家は無いでせうか、いくら搜しても見付からないんです。小さな家でもいゝんですが——」

「さあ」といつて敎會の人は一寸首をかしげ、「さうですねえ、この邊といつても急には心當りがありませんが、この敎會の信者で白羊社の社長をしてをられる方が借家を持つてをられるといふことを聞いてをりますから、その人の所に行つてお尋ねになつて見たら如何がですか」と、とても丁寧な返事である。宮下さんも私も非常に喜こんで、もうこれで借家も決まつたやうな氣がして、社長さんの所番地をきくと、早速社長さんの家に行くことにした。途中で宮下さんが腹が空ついたとふし、私も朝から駈けずり廻つて草臥れてゐるので、蒲燒と書いた大きな看板が眼に付いたのを幸ひ、その店の二階に上がつて鰻丼を注文した。其處で少し休憩して又二人で歩き出したが社長さんの家までは中々遠い。大分奥まつた閑靜な所に來たので、道の角々で訊きながら、やつと社長さんの家に辿り着いたが、立派な門構へなので驚ろいた。

門を入ると奥の正面の建物にも玄關があり、右側の建物にも玄關があるのでどつちに入つていゝか分らない。私は初め正面の玄關に入つたら、女中さんが出て來て「奥様はあちらのお部屋にいらつしやいます」と右側の建物を指さしたので、其處へ行つて面會を求めると「どうぞお上がりなさい」といつて應接間に通された。まだ新築して間がないらしく室内は新らしく明るい感じがした。日が一杯絨氈の上に當つてゐた。廊下の硝子戸越しに廣々とした庭が見える。奥でピアノの音がき

こえる。紅茶と菓子が運ばれた。見ず識らずの者にこんな鄭重なもてなしをする、此の家の御主人といふのは一體どんな人物なのだらうと不審に思つた。やがて奥様がお見えになられた。非常に丁寧な方である。私達は早速來意を告げた。奥様は一軒空いてゐるのがあるが、それでよろしかつたらと仰言つた。少しも警戒してゐる御様子が無い。場所が琴を教へるのに不便なので駄目だと思つたが、私たちは奥様の親切な待遇が嬉しかつたので、借家のことはそつちのけにして種々お話をして辭去した。門を出てから「いゝ奥様だなあ」と私が言つたら、「お嬢さんは上野の音樂學校に入つてゐると云つてたが、やつぱりあのピアノはお嬢さんが彈いてゐたんだ、巧いもんだなあ」と宮下さんは音樂家だけにピアノの音に感心してゐた。

「洗濯屋さんも一流になると大したもんだなあ」と、白羊社の大規模な話を聞いて私は感心した。

結局、白羊社の方は地理的關係から駄目であつたが、これで澁谷方面には見切りをつけて、瀧野川に鉾を向けて、田端、瀧野川一帶を幾度も足を棒にして搜した。或る時など、

「この邊に空家はありませんか」と女の人にきいたら、

「あれ、あなたはこの前も妾に聞いたぢやありませんかホホホホホ」

と笑はれて苦笑したことがある。

やつと見付かつたのが中里のお家である。そこには、王子に移轉されるまで、長らく住んでゐられた。道を距てゝ隣りは女子聖學院だ。宮下さんが此處に腰を据えて看板を出したら忽ち十幾人かのお弟子が集まつた。私も嬉しくなつて、時々牛肉を買つて宮下さんの家を訪づね、牛鍋や、南ばん煮をこしらへて一緒に飯を食つたものである。その頃のことであるが、鄕里から弟さんが上京されて一緒に暮してをられた。賢治君といつて十四歳の快活な少年である。或る晩、宮下さんは賢治君を連れて近所の錢湯に行つた。宮下さんは色素性網膜炎で夜は見えない。弟さんが手を曳いて連れて行くのである。宮下さんは着物を脱いで風呂場に入り、浴槽の所に行こうとした時、タタキの上に轉がつてゐる湯桶にうつかり足を乘せたさうだ。その拍子に桶がころ〳〵轉がつたので、足を辷らして、すつてんと尻餅をつき、大の字なりに仰向けに引つくり返つたさうである。宮下さんは恥かしいやら氣まりが悪いやらで眞赤になつたさうだ。こうなると憎いのは湯桶ではなくて、賢治の野郎だ、俺の足許にある桶を除けてくれないからこんな目に遭つたんだと、一本氣な宮下さんは烈火の如く怒り、「賢治ッ」と弟さんを呼ばれた。聲は低いが千斤の重みがある。賢治君が宮下さんのそばに行くと、「こつちへ來い」と一緒に浴槽に入り肩までふか〳〵と湯に浸つた。宮下さんは他の浴客に氣付かれないやうに、そうつと手を伸ばして賢治君の尻つぺたをぐいと抓つた。賢治

君はびつくりしてひよいと尻を持ち上げた。すると又宮下さんは尻を抓つた。賢治君はひよいと尻を持ち上げる。湯の中なので身體が輕い。抓られる度にひよい〳〵と尻を上げる。賢治君も、こいつは堪らないと思つて、そつと宮下さんのそばを離れて隅の方に退却した。それとは知らない宮下さんは、よつぽど腹の蟲が收まらないと見えて又ぐいと抓つた。途端に「あ痛ツ」と大きな聲を出して跳び上がつたのは他の浴客だつたので、驚ろいたのは宮下さん、

「あツ、どうも濟みませんでした。どうも濟みませんでした」と平身低頭で詫びたさうな。浴客も折角いゝ氣持で湯に浸つてゐるところを、いきなり尻つぺたを抓られたので魂消たらしい。多勢の浴客は何事が起つたかと一齊に宮下さんの顏をじろ〳〵見たさうな。賢治君は隅の方で兄貴がペコ〳〵謝まつてゐるのを見て思はず「アハハハ」と笑つてゐたとか……。

三　感覺

寄宿に鼻がいゝのを自慢にしてゐる半盲生が居た。

「おい、今晩のおかづは何だらう、君、匂ひがしないか」

といふと半盲生は、

「どれ、廊下に行つて匂ひを嗅いで來よう」

といつて、食堂の外の廊下に立つて、鼻をふくらませて深呼吸をし、

「俺の睨んだ鼻には狂ひが無い。今晩のおかづはコロツケだぞーい」

といつて、又鼻をピク〳〵させてゐた。或る時、盲生徒が五十錢銀貨を一枚机の下に落とした。いくら搜しても見付からないので鼻自慢の半盲生に向つて、

「おい、五十錢玉を落としたんだが、どこにあるか匂ひがしないか」

ときいたら、

「どれ〳〵俺が一つ嗅いで見付けてやらう」

といつて、まるで警察の犬見たいに鼻をクン〳〵いはせて疊の上を嗅ぎ初めた。

「どうだ有つたか」

と盲生徒がきいたら、

「有つた〳〵ほれこの通り」

と、五十錢玉を拾つて盲生徒に渡し、

「どうだ、恐れ入つたらう、俺の鼻には」
と云つて、大して高くもない鼻をピョコつかせてゐた。が、實は疊の上に鼻を摺りつけて匂ひを嗅ぎながら、こつそり手でさぐり廻して見付けたのである。

こんどは耳の話、
私のクラスの或る盲生徒が、室の中で寢そべつてゐると、同じ室の者が這入つて來て、机の上に何やら置いて又室を出て行つたさうだ。盲生徒は、「はてな、今、影山さん(當時師範部生)が、机の上に何かガサ〳〵紙の袋のやうな音をさせて行つたが、こいつはお菓子ぢやないかな」
とむつくと起き上がつて影山さんの机の上を手で撫で廻して見たら、有つた〳〵菓子袋が載つかつてゐた。
「やつぱり俺の耳には狂ひが無い。何だらう」
と袋を開けてさはつて見ると、大好物のモナカだつたので、
「シメタ〳〵」
と袋の中のモナカをみんな平げてしまつたさうだ。

あとで影山さんが再び室に歸つて來て、どれモナカを食はふと机の上を撫で廻したが袋が無い。はーてな、と幾度も机の上をさぐり廻し、今度は机の下をガサ〳〵さぐつて見たが、やつぱり見當らない。
「變だなあ」
と獨り言を言つてゐるのを室の隅できいてゐた盲生徒は、聲を立てないやうにしてニヤリ〳〵と笑つてゐたさうだ。

さて今度は、
或る盲生徒が私の机をさぐつて、
「こいつは安物だらう」
といつた。
「どうして分る」
ときいたら、
「机の裏がザラ〳〵だ」

と云つた。さはつて見ると、なるほど裏は鉋をかけてないのでザラ〳〵だつた。

「上等の机は裏もすべつこいんだ」

と盲生徒は私に說明してくれた。

日光へ遠足に行つた時、私は伊東さんといふ盲生徒の手を引いて歩いた。「下僕」で話したあの柔道狂ひの伊東さんである。陽明門の所に來た時、伊東さんは、

「どれ、さぐらせてくれ」

と云つた。が、相憎く修繕中で、陽明門のまはりに柵がしてあつて、傍らに「これに觸れるべからず」と書いた標札が建てゝあつた。私が「駄目だ」と理由を話したら、

「こゝまで來てさぐれないとは殘念だなあ、日光も結構もあるか」

といつて悄氣返つてゐた。

或る年、陸軍士官學校に運動會があつた時、私は盲生徒の手を曳いて觀に行つた。私の父が昔、此の學校の教官をしてゐた時、等々力森藏といふ教官が居られたさうである。當時、氏は中尉だつたさうだが非常な精神家で生徒から怖がられてゐたさうだ。妙義山の有名な等々力岩は此の人の名を冠したのださうである。軍神橘中佐の薫陶を受けた一人ださうで、父は生前よく此の人の逸話を語つてゐた。

私は校庭に一臺の戰車が陳列してあるのを見付けた。私が戰車を見たのはこれが初めてだ。盲生徒も無論初めてだ。恐らく私の學校の盲生徒で戰車を初めてさぐつて見たのはこの盲生徒だらう。まだ大正の時代だつたから。又遊就館に行つた時、私は塙團右衛門の馬印しや豐臣秀吉の千成り瓢簞をさぐらせてやつた。盲生徒は非常に喜こんで居た。私も盲生徒の喜こぶ顏を見て嬉しかつた。

修學旅行

蟲干や亡友の書に讀み耽る　吾山

私にもこれに似た感懷がある。これは日記であるが、古い日記を讀んでゐる中に、故人となつた友人の名が出てくると、當時を偲んで何ともいへぬ懷かしい氣持になるものである。盲學校の生徒は體質が弱いのか、それとも運動が不足なのか、罹病率や死亡率が比較的多いやうである。私達の同級生でも、在學中又は卒業後に死亡した者がクラスの約四割を占めてゐる。故人となつた級友とは生前いづれも親しく交際してゐたが中でも印象の深いのは小椋賢三さんである。

今私の机の上に關西旅行の時、京都の清水寺の境内で撮つた記念寫眞が置いてある。私の左側に立つてゐる、背のすらりとしたおとなしさうな生徒が卽ちわが友小椋賢三さんなのである。どうしてあそこで寫眞を撮るやうになつたのか不思議に思ふ位である。なぜといふに、盲人は概して寫眞に對して興味を持つてゐないからだ。中途失明者はそこへゆくと多少の理解を持つてゐるが、先天性の盲人は寫眞といつても手でさすつて見ただけではスベ〳〵した紙に過ぎないので詰らなく思ふらしい。若し寫眞を撮るのを喜ぶ盲人があるとしたら、それは藝術肌の人か、親兄弟思ひの人であらう。關西旅行の時でも出發前、否、京都に來るまでは寫眞を撮らうなどといふ相談は全然無かつたのである。それが圖らずも清水寺で寫眞を撮るやうになつたのである。私の想像では、一行の中に普通師範部の生徒(晴眼者で盲學校の初等部の先生となる人)が加つてゐたので、恐らくこれらの人たちが言ひ出したのではないかと思ふのである。何にしても今は思ひ出深い寫眞である。

關西旅行は、來年卒業する上級生徒の最後を飾る修學旅行で、私達の時には師範部と中等部の生徒が合併して行つた。今では小學校でさへ關西旅行をする位で一向に珍らしくないのであるが、東京盲學校では私達より二級上の師範部生が試みたのが最初で、それ以前には一度も關西旅行をしたことが無かつたのである。それで最初に關西旅行をした一行は、各地の盲學校に立寄ると遠來の珍客とあつて學校を擧げての大歡迎を受け、御馳走を饂腹食つて來たさうだ。吾々は三回目であつた。

私達が關西旅行をしたのは新綠爽やかな五月の初旬であつた。東京驛を夜中に立つた。私は此の旅行中、終始小椋さんの手を曳いて歩いた。隊列は身長順でなく、互ひに親しい友と組めばよかつたのである。遠足の時、盲生徒にとつて先決問題となるのは、誰か手を曳いてくれるかといふことである。若し手を曳いてくれる相手が好ましくない人であると、どんなに樂しい遠足も出發前に興味が殺がれてしまふのである。

夜の汽車に大勢で乘り合ふのは初めてなので、最初の中はわあ〳〵いつて眠るどころの騒ぎではなかつた。然しその中に段々夜が深くなつてあたりが靜かになり、汽軍の走る音が闇に鋭くなつてくるにつれて一行もさすがに話し疲れ騒ぎ草臥れたと見えて默りこくなつて來た。

汽車の窓が仄々と明けそめた頃、私と向ひ合つて腰かけてゐた小椋さんは窓に凭りかゝつて、着驛毎に凝つと外の氣配に耳を傾けてゐたが、「ああ蛙が鳴いてゐますよ」と嬉しさうに私に言つた。私も蛙の鳴き聲をきいた。「僕の田舍を思ひ出しますよ」さういつて小椋さんは汽車が立つまで蛙の聲にきゝとれてゐた。東京できかれなかつた蛙の聲を靜かな田舍の驛できいた時、小椋さんは故

郷の廣々とした田園を思ひ出したのであらう。小椋さんの國は四國の愛媛である。

宇治山田に着いて、伊勢神宮を參拜した後、其の夜は二見ヶ浦の吸霞園といふ旅館に泊ることになつた。私は小椋さんと二見ヶ浦の海岸に行つて見た。夕日に赤く血を流したやうな海面は波が高かつた。小椋さんは濤の音と松風をきいて二見ヶ浦に來たといふ感じが充分にするといつて喜んでゐた。海岸から歸りに名物のさざゑの壺燒を食つた。廣いがらんとした店であつた。大へんお美味かつたのでお代りをしたやうに覺えてゐる。夜店で貝細工などを買つて宿屋に歸つた時には座敷に夜具蒲團が敷いてあつた。

翌日奈良に行つた時、小椋さんは鹿に煎餅を買つて與へて與じてゐた。春日神社の石燈籠を、手でさぐつて數が澤山あるのに驚ろいてゐた。境内には藤の花が美しく咲いてゐた。小椋さんは兩手でそうつと藤の花に觸れて見て「大きい房ですねえ、綺麗でせうなあ」といつて花に頬ずりをしてゐた。私は今も尙小椋さんが藤の花をさぐつてゐる姿を忘れることが出來ない。猿澤の池の畔りも歩いた。三笠の山にも登つて見た。小椋さんは歴史に明るいので奈良朝時代のことを考へて昔が懐しいと云つた。盲人でも歴史を知つてゐると斯ういふ時には幸福である。

近江の琵琶湖も舟で渡つた。小椋さんは舟縁から身體を少し乗りだして湖水の中に手を浸して、これが琵琶湖の水かといつて幾度も掬つてゐた。三井寺の石段を昇る時も元氣であつた。京都では瓢簞屋といふ面白い名前の宿屋に泊つた。夕食後、一行は思ひ〳〵に散歩に出かけた。私は小椋さんと一緒に散歩した。同級生の一人が何條の橋とかいふ大きな橋の欄干に頭を打つつけて、おでこに大きな瘤をこしらへて宿屋に歸つて來た。誰かが「やあ瓢簞を作つて來たな」と洒落をいつて笑つてゐた。

この旅行の歸りには神戸から汽船に乗つて横濱に行つた。船中で旅行の感想談が始まつた。小椋さんは、手曳きは晴眼者より半盲の方がいゝと云つた。これは半盲生が盲人を連れて歩くのに馴れてゐるからであらう。以心傳心といふ言葉は盲人を手曳きする時の氣持をいふのではあるまいか。盲生徒の手を曳いて歩く時、そら石段だ、そら水溜りだと言つて一々注意したのでは却つて盲人に怖ぢ氣を起させるやうなものだ。馴れてくると默つてゐても曳いてゐる手の動かし工合で、盲生徒は階段の前に來るとひとりで足を擧げ、又溝をまたぐもので、少しも不自然な動作をしない。何でもないやうであるがこゝまで熟達するのには相當の經驗を要するのである。

私達が尺八の會を組織する時一番力を盡してくれたのは小椋さんであつた。點字で尺八の樂譜を

作る際にも種々助言を與へてくれた。小椋さんは盲學校に尺八の會を最初に組織したのはわれ〳〵であるといつて非常に喜こんでゐた。小椋さんは尺八のほかにピアノも勉强してゐた。

小椋さんは立派な家庭に育つたせいか、人を憎んだり嫉んだりする氣持は少しも持つてゐなかつた。どちらかといへば少し氣の弱い方であつた。歸省の途次、汽車の中で五十錢銀貨を一枚だか二枚落したことがあるさうだが、小椋さんは傍らに腰かけてゐる乘客に拾つてくれといふことがどうしても云へなくて、そのまゝ拾はずに下車したといふことをきいたことがある。見知らぬ人に對しては、それ程内氣で遠慮深かつたのである。

小椋さんは學校を卒業してから大阪府立盲學校の先生になつて赴任した。私達は東京驛まで見送りに行つた。小椋さんは買物か何かの都合でお父さんと一足先きに驛に行つて、待合室で私達と會ふことになつてゐた。私は待合室に行つてしきりに小椋さんを搜したが見付からなかつた。或ひは私達の方が早く着いたのかも知れないと思つて、驛の入口に立つて待つてゐたが、何時迄經つても來ない。その中に發車時間が刻々に迫つて來たので止むなく入場券を買つてホームに入つた。そして汽車のそばにいそいで駈けつけた。が、私達の來るのがおそかつた。けたゝましい鈴が止んだと思ふと、汽車は靜かに動き出した。ゴツトン〳〵と辷るやうに次第に速力を增して走つて行つた。汽車の窓から洩れる燈火(ともしび)は、ちら〳〵といくつも〳〵眼の前を掠めて行つた。この汽車に小椋さんは乘つてゐないのかしら、何かの都合で出立がおくれたのかしら、と不安に似た氣持で眼の前を走つてゆく汽車を眺めてゐる時、私と一緒に見送りに來てゐた村上さんが、「アツ小椋さんだツ」といつて駈け出した。然し私には小椋さんがどこに乘つてゐるのか分らなかつた。汽車が闇の中に吸ひ込まれてしまつた時村上さんが歸つて來た。村上さんの話によると小椋さんは汽車の窓に凭りかゝつて凝つとホームの方に氣を配つてゐたさうである。村上さんが小椋さんの名を呼んで駈けつけると、小椋さんは嬉しさうに窓から手を差し伸べたさうである。村上さんは汽車と共に走りながら、小椋さんの手を一寸握つて別れたさうだが、小椋さんは、いつまでも窓から首を出してゐたさうである。私はこれを聞いて、ふと關西旅行の時、汽車の窓から蛙の聲がきこえるといつて懷しんだ小椋さんを思ひ出して淋しい氣持ちに成つた。折角東京驛まで來て會へなかつたのが殘念であつた。待合室や入口に何時迄も立つて待つてゐた自分が忌々しかつた。これが小椋さんと永遠の別れになるとは神ならぬ身の知る由もなかつた。小椋さんは大阪に赴任してから病氣に罹り、遂に永眠されたのである。大阪から寄こした手紙の中に高山樗牛の「清見寺の鐘聲」を點字に飜譯して送つてくれと書いてあつた。私は早速點譯して送つて上げた。その中に、

「……秋深うして萬山きばみ落つ、枕をそばだつれば野に悲しき聲す。あはれ鐘の音、わづらひの胸にもの思へとや。この世ならぬひゞきを、われいかにきくべき。怪しきかな、物おもふとしもあらなくに、いつしかわが頰に涙ながれぬ。……第二の鐘聲起りぬ。夜はいよ〳〵しめやかにして、ひゞきはいよいよ冴えたり。山をかすめ海をわたり、一たびは高く、一たびはひくく、絶えむとしてまたつゞき、沈まむとしてはまたうかぶ。天地の律呂か、自然の呼吸か、隱としていたためるところあるが如し。思へばわづらひはわが上のみにはあらざりけるよ。あやしきかな、わが胸は鐘のひゞきと共にあへぐが如く波うちぬ……」

といふ一節がある。小椋さんは點字が磨滅するまで幾度も繰返して讀んだことであらう。

ザボンの砂糖漬

或る日、私の室へ同級の半盲生が遊びに來た。見ると顏が綺麗に剃つてある。

「床屋さんへ行つて來たのか」

ときいたら、

「いや、澤田さんに剃つて貰つたんだ」

といふ。

「なに澤田さんに？」

「うん、さつき澤田さんの室へ行つたら、丁度剃刀の手入れをしてゐる所でね、僕が這入つてゆくと、顏を剃つて上げませうかつて言つて、これこの通りつる〳〵に剃つてくれたんだ」

と言つて顎のあたりを撫でまわして見せた。

「さうか、感心だなあ」

といふと、

「全く僕も敬服したよ。誰でも自分の剃刀を人に貸すのは嫌がるものだが、それを僕みたいなニキビだらけの顏をちつとも汚たないと思はず、丁寧に剃つてくれるんだもの」

と言つて感激してゐた。半盲生は色の赤黑い、ブルドックのやうな顏をした醜男（おとこ）である。昔、太閤秀吉が部將を集めて茶の湯を催した時、大谷刑部吉隆もその中に列なつてゐたさうである。ところが大谷は癩病なので、他の部將たちは大谷の口づけした茶碗を受けるのを躊躇したさうだ。それを秀吉が見て、自若として大谷から茶碗を受け取り、ぐつと飲み干したので、大谷は秀吉の恩義に

感じて思はず落涙し、胸中固く忠誠を誓つたといふことである。澤田さんに顔を剃つて貰つた半盲生も、丁度大谷刑部と同じやうな感激に打たれたのであらう。

一度斯ういふことがあつた。

或る日、私は澤田さんと一緒に外出したことがある。丁度雨上がりのあとで、道路が非常に惡かつた。それに下水工事をしてゐたので道の片側に土が盛つてあつて、たゞでさへ狹い通りが一層狹くなつて、荷車などが通ると、泥水を跳ねられても、身の除け場所もない有樣であつた。私は盲生徒の手を引いて歩いてゐた。澤田さんは私の後からついて來られた。ところが、運惡く向ふから一臺の荷馬車がやつて來た。私は盲生徒と一處なので身輕な動きが出來ない、はて何處へ退いたらいゝものかと苦慮した。が、突嗟にはいゝ思ひ付きも浮んで來なかつた。私が間誤々々してゐる中に馬車が遠慮會釋もなくぐん〳〵近づいて來た。仕方がないので道端に盛り上がつてゐる泥土の上に避難した。土は柔らかいので靴がめり込んでしまつた。すると馬方がいきなり、

「こらッ、何んだつてそんな所にでくの棒見たいに立つてるんだッ」

と怒鳴つた。馬方も道路が惡いので氣がくしや〳〵してゐたのであらう。が、私は他に身の置き所が無いので默つてゐると、澤田さんが後ろから、

「眼が惡いのだから仕方がないッ」

と凛とした聲で仰有つた。馬方は一寸壓倒されたやうな格好であつた。で忌々しさうに舌打ちをして、

「危いからこゝに立つてろ」

と言つて、馬方は盲生徒をぐつと端に押しやり(今少しで溝に落ちる所だつた)そのまゝ手綱を引いて行つてしまつた。私は澤田さんが、馬方の荒々しい罵聲に對し言下に答へられた迫力のある言葉をきいて心中窃かに敬意を表した。平常は溫厚で人と爭つたことなど曾つてなく、どちらかといへば弱々しい感じのする澤田さんではあるが、一旦事に當ると、此の樣に往來の中でも毅然とした態度に出でられる、外柔內剛とは澤田さんのやうな人物をいふのであらうと思つた。

澤田さんが寄宿舍に入られた當時のことを私は今でも覺えてゐる。絣の着物を着て、左の肩に學生鞄を下げて寄宿の廊下を靜かに歩いて行かれた。室は北舍の二號室である。始業式の日に、澤田さんは學校の講堂の前の廊下に腕組をして佇ずんでをられた。そして盲生徒たちが往つたり來たりする姿を凝つと見つめてをられた。あの頃は夜盲で視野が狹いといつても明るい所では大して御不自由でもなかつたやうだ。たゞ讀書などはあまり根が續かなかつたやうである。

寄宿舍では毎年四月に、新らしく入舍した人達のために歡迎會を開くことになつてゐる。澤田さんが入舍された時の歡迎會の席上で舍監は次のやうなことを述べられた。

「寄宿舍には小さい人も居れば、徵兵檢査を過ぎた人も居て、年齢に非常な相違がある。又學力も小學校一年生位の者もあるかと思へば高等學校にまで行かれた方もある」云々

と、此の高等學校に行かれた方といふのが即ち澤田さんのことなのである。恐らく東京盲學校が創立されて以來、高校の學生で入學されたのは澤田さん位のものであらう。それだけ澤田さんの存在が光つてゐた。澤田さんの御鄕里は名古屋である。高等學校も八高である。八高といへば不思議なもので、昨年の春、八高の校長になられた伊藤仁吉氏は私の親戚にあたる。

澤田さんの眼病は色素性網膜炎ださうであるが、夜盲には高校時代から惱まされたらしい。これは澤田さんから直接おきゝしたのであるが、或る日、學校で製圖を書いてゐる中に（多分放課後も書き續けてをられたのであらう）夕方になつたので、暗くならない中にと思つて急いで歸宅の途に就かれたが、途中でとつぷり日が暮れてしまつたさうである。澤田さんは困惑して足許を氣遣ひながらおど〳〵して歩いてゐると、前方で何かパッと明りが射したので、ああ、とやゝ安堵の思ひをされてその方向に進んで行かれたさうである。が、その時不意にぐわんと衝突されたさうだ。其處

に人が立つてゐるのが見えなかつたのださうである。その人は立ち止まつて煙草に火を付けてゐたのださうである。澤田さんは失禮を詫びて辛うじて歸宅されたさうであるが折角丹精して書いた製圖も途中でくちや〳〵になつてしまつたさうである。眞に壽命の縮まる思ひであつたらう。斯うして高校も二年の終りまでゆかれて、遂に退學されたのださうである。

澤田さんが盲學校に在學の頃、お妹さんもお茶の水高等師範の英文科に在學してをられた。御兄弟揃つて頭がいゝと見える。お妹さんは時々寄宿舍へ澤田さんをお訪ねになられた。澤田さんのいい所は、私達友人と對談中に、御親戚の方が來られやうが、立派な知人が見えられやうが、少しも態度を變へられないことである。これは正直で表裏が無いからである。

澤田さんは學校を卒業されると、九州の大分縣立盲學校に奉職された。丁度大分に居られる頃のことであるが、或る日私の所へ澤田さんから書留郵便が來た。開封すると中から二十圓だつたかの爲替が出た。何だらうと思つて御手紙を讀んで見ると、生徒の教科書を送つてくれといふのである。多勢の生徒のを纏めて注文されたのである。本は「生理學粹」であつた。そこで私は印刷所に行つて本を印刷して貰ひ、それを大きな木の箱に詰めて運送屋に賴んで送つたら、間もなく澤田さんから御手紙が來た。それは禮狀であるが、文面の終りの方に、今後送本する時には、一冊々々別

別に郵便で送つて欲しい、運送屋に賴むと運送代が大變高くつく。郵便だと一冊二錢（だつたと思ふが）で來る。生徒に負擔をかけたくないから、といふ意味のことが書いてあつた。私はこれを讀んで非常に感心した。澤田さんは生徒の本の送料にまで責任を感じられる眞面目な人であると思つた。そして私に御禮だといつて土地名産のザボンの砂糖漬を送つて下さつた。恐らく大分盲學校の生徒も澤田さんが、これほど心を勞されてゐるのを夢にも知らなかつたであらう。私はザボンを頂いた時に考へたのであるが、澤田さんは盲學校に在學の頃、英語の好きな盲生徒たちに本當の英語をきかせるために時々西洋人を學校へ連れて來られたことがあるが、私にザボンの砂糖漬を贈られたやうに、外人に對しても、義理の固い澤田さんは一々自腹を切つて御禮をされてゐたのではないかと思つた。それを少しも生徒に語らぬ所に心の床しさがある。表面に現はれることの嫌ひな澤田さんらしい振舞ひであると思つた。

また、在學中、根氣よく英語を勉强してをられた。それも點字の本で學ばれたのである。西洋人の家へもよく行かれたやうである。私も一度澤田さんに連れられて或る西洋婦人の家へ行つたことがある。その時私は大福餅にフオークを添へて出されたことを覺えてゐる。大福をフオークで突つついて食つたのは初めてであるが、やはり大福は手で摘まんで食つた方が旨いと思つた。

今から四年前に澤田さんは多年の宿望が叶つて渡米された。東京盲學校の卒業生で文部省から海外出張を命ぜられたのは蓋し澤田さんをもつて嚆矢とする。澤田さんは米國に滯在中、度々私に御手紙や寫眞を送つて下さつた。手紙は全部點字である。外國の點字用紙は紙質が良いせいかも知れないが、點字が少しも磨滅してゐない。指でさすつてもはつきり讀める。それに驚いたことには郵稅がたつた二錢である。可なり長文の手紙を書いても二錢だ。安いもんだなあと思つた。尤も內地の點字郵便は五厘である。盲人が社會から一番惠まれてゐるものは何かといつたら先づ點字の郵稅であらう。それにしても澤田さんは忙がしい中を、よくまあ御手紙を書いて寄こされるものだと今更義理の固いのに感心してしまつた。

澤田さんは世界一の盲學校といはれるパーキンス盲學校に滯在して親しく彼の地の盲人教育を視察研究し、翌年無事に歸朝された。昨年の夏、御自分の飜譯になる「米國失明軍人の現狀」と題する小冊子を一般知己に贈られたが、それに就き、私に向ひ、

「あの冊子を贈つたら、半分位禮狀を貰ひました。それがねえ、皆偉い人から來たんです。偉い人はやはり何處か普通の人と違ひますねえ。義理の固いもんですなあ」

といつて感心してをられた。私は義理といふ言葉をきいて微笑ましく思つた。

賄賂

或る日、男子の寄宿生ばかりで茶話會をやらうといふことになつて委員に私が擧げられた。會費は一人金五錢だ。私は全權を委ねられて、學校の近所の幸盛堂菓子店へ煎餅を注文した。どうせ五錢位では碌な物が買へつこない。まあ煎餅なら腹が膨れてよからうといふので、これに決めたのである。當時は今より寄宿生が少なく、男子だけで五十二、三人位だつた。さて愈々明日といふ時になつてどうした風の吹き廻しか、會を止めやうといふことになつた。未だ會費は徵收してないが、菓子屋には既に注文してあるので當事者の私は當惑した。

「弱つたなあ、僕にこんな苦勞をかけて置いて、今になつて急に中止するなんて……煎餅はどうするんだ」

と言つたら、

「斷はつちまへ」

といふ。そこで、私は幸盛堂に行つて話をしたら、

「困りましたねえ、もうちやんと袋に入れてあるんです」

といふ。

「袋に入れてあるんだとよ」

と寄宿に歸つて報告すると、

「袋から出したらいゝぢやないか」

といふので又幸盛堂に行つて掛け合つたら、

「會を開かなくてもお菓子だけは買つて下さい」

といつて、最中を三つ四つ袋に入れて私に渡した。私が要らないと斷はつても、

「まあそんなことを言はないで、どうぞ」

と云つて强つて呉れるので、それを懷ろに入れて持つて歸つた。室に歸つて最中を出して食つてみると、舌ざわりがいゝのでペロリとみんな平らげてしまつた。食つてしまふとなんだか幸盛堂に肩を持ちたくなつた。

校庭に藤棚があつて、その下にベンチが据えてある。丁度其處に寄宿の主もだつた人が集まつて何か話し合つてゐたので、私もその中に入つて煎餅の一件を持ち出した。

「折角注文したんだから買つてやれよ」
と私が言つたら、
「煎餅ならいつまでも置けるんだから買はなくても向ふぢや損をしないんだ。餡物なら腐るといふこともあるが」
「でも一ぺん袋に入れた奴を又出すと袋が皺くちやになるだらう」
「何に言つてるんだ。袋のことなんか心配するな。向ふに金を渡してしまつたなら返せとも無下に言はれないが、佛つてないんだからかまはないよ」
といふ。
「ところが菓子屋の方では、會をやらなくても煎餅を買つてくれと言つてるんだぞ」
「會を開かなければ煎餅には用が無いんだ」
「まあそんなことを言はないで買つてやれよ」
「いゝよ、君が斷はりにくかつたら俺が斷はつて來てやらう」
「まあ待て、會費はたつた五錢だらう。會をやつたことにして買つたらどうだ」
「また同じことを言ふ、君は馬鹿に幸盛堂に肩を持つなあ」

「肩を持つ譯ぢやないが、双方を圓滿に纏めやうと思つて言つてるんだ」
「臭いぞ、君は幸盛堂から何か貰ひ物をしたんだらう」
と不意に痛い所を突かれた。こうなつたら仕方がない。
「うん、貰つた」
「何にを貰つた？」
「モナカだ」
「いくつ？」
「四つ」
すると皆があはははと笑つて、
「道理でさつきから煎餅を押しつけると思つた。してモナカをどうした」
「食つちまつた」
又皆が笑ひ出した。
「モナカを食つちまつたら斷はれなくなつてしまつたんだ。高が一人が五錢ぢやないか。買へ〳〵ケチ〳〵するな」

と言つたら又皆が笑ひ出した。

夢

私は十歳頃までは近眼でなかつたやうである。丈が高いので學校の教室でも席順は後ろの方であつた。先生が黑板に書かれる字はよく見えた。その頃ベースボールが流行り初めてゐた。小學校でも休み時間に盛んに行はれた。私は母に鞠を作つて貰つたことを覺えてゐる。鞠の表面には美しいレースで花の縫ひとりがしてあつた。母が折角作つてくれた鞠も大抵溝や水溜りの中に落として一ぺんに泥だらけにしてしまつた。それでも母は私がせがむ儘に、花の縫ひとりをした鞠をいくつも作つてくれた。私は級の中でも下手な方ではなかつた。放課後、小學校の運動場で中學生達が本物の野球をやることがあつた。その時傍らで觀てゐる私に向つて中學生は投げた球を拾つて來いと命じた。私は遠くの方に素つ飛んで廣々とした芝生——芝生といつても一尺も伸びた青草である——の中に落ちた球が何處にあるかを見分けることが出來た。中學生は「投げて寄こせ」と遠くの方から叫んだ。私は嬉しくなつて拾つた球を力一杯中學生目がけて投げた。「うまいッ」と中學生は私

の投げ方を褒めてぱつと球を受けとめた。

十一、二歳の時である。私たちは運動場で野球をやつてゐた。私は第一壘に立つてゐたが、不意に私の顏にぐわんと球が當つた。眼からパッと火花が散つた。その刹那私は無意識に球を兩手に掴んだ。地上に球を落とさなかつたのが不思議である。私は球の飛んで來るのが分らなかつたので、自分でも眼が悪いなあと思つた。尤も私は子供の時分から眼病で、雪の日には黑い眼鏡をかけてゐたし、學校から歸つてくると常に罨法をしてゐたし、又父から服藥を命ぜられてゐたので普通の眼でないことは確かだ。然し未だ近眼ではなかつた。それがベースボールをしてゐる時に飛んでくる球が分らなくなつたので、よつぽど眼が悪いのだらうと思ふ樣になつた。だが子供の時は遊びたい一心で、眼が見えなくても野球の仲間に入れて貰つた。球を取り損なつて何處かに素つ飛ばすと、「こゝを眞つ直ぐ行け」と友達が指さして教へてくれる。私が走つて行くと「もつと左の方だ。もつと前の方だ」などと後から教へてくれる。こんな不自由な思ひをしても、やつぱり皆のすることは自分も一緒になつてやりたいのであつた。恰度、跛の子供が跛々といはれながら近所の子供と一緒になつて遊びたがるのと同じである。その中に黑板の字が見えなくなつて來た。又生徒が畫いた圖畫で上手なのが教室の後ろの壁に貼つてあつても、それが高い所にあるので私には色だけぼんや

り見えて形が分らなかつた。教室の入口の柱に掛けてある時間割——黒い板に赤い字で書いてあつた——が柱の下に立つて足を爪立てゝ見なければ分らなくなつた。

不思議なもので私は最近夢を見ても形が浮んで來ないのである。若し浮んで來るとしても、まるで雲を掴むやうで、眼が覺めてから思ひ出せない。人の顏など、はつきり分らう筈がない。恐ろしい夢を見てうなされることがある。然し私を襲つて來るものゝ形が皆目分らないのである。猛獸などに追ひかけられて段々追ひつめられ、あはや、がぶりと嚙みつかれさうになり、もうこれまでと觀念してゐる所で眼が覺めることがある。その時も猛獸がはつきり見えないのである。ところで今でもたまに見るのであるが、私が子供の頃のことを夢でも見る時にはそれが實にはつきりと見えるのである。私が子供の時には母も若かつたので夢で見るのは常に若々しい母の面影である。而もそれが當時撮した母の寫眞よりも夢の方がもつとはつきりしてゐるのである。一度、こういふ夢を見た。

——私が小學校の一年生の時、學校の歸り途で、向ふの方から一臺の人力車が橋の上を渡つて來るのに出會つた。ふと車上の人を見ると母だつたので、私は肩にかけてゐる鞄をがちや〳〵させな

がら母の許に驅けて行つた。すると母は俥を停めてニコ〳〵しながら私に向つて申された。

「母さんはね、これから買物に行つて來ますからお家に歸つておとなしく待つてなさいね。簞笥の上に繁ちやんのお菓子が紙に包んでありますから歸つたらお上がんなさい」

私は素直にうなづいて母の許を離れた。車屋さんは梶棒を上げて再び歩き出した。少し離れてから私が振返つた時、母も俥の上から振返つて私を見てゐた。私には母の顏がはつきり見えた。——私は眼が覺めてから、あの時は私も眼が良かつたし、母も若かつた、と亡き母を思ひ出して一入感懷に耽るのであつた。

夢に現はれた母の面影は懷しいものである。それは長年不自由な生活をしてゐると、眼から來た印象が段々薄くなつて、何を思ひ出してもはつきりと腦裡に浮〳〵で來ないからである。時々母を思ひ出しても——私が子供の頃の——やはり母の映像はぼんやりしてゐるのである。それが少年時代の夢となると實にはつきりと見えるので、覺醒後、夢の中で、生きてゐる母に再會したやうな感じがするのである。

前項、「盲人畫家」の所で一寸述べて置いたが、鴫原さんは夢が覺めてから泣くことがあると云つてゐた。鴫原さんは元學校の先生をしたことがあるので、それが印象に強く殘つてゐるのであらう。――懷かしい學校に久しぶりで來て見た、黑板の字がよく見える。遠く離れて見たがやつぱりはつきり見える。はてな、と思つて右の眼を掌で塞いで、左の眼だけで見たがよく見える。今度は左の眼を塞いで右の眼で見たが、これもまたよく見える。不思議だなあ、俺の眼は治つたのかなあ、夢ぢやないのか知ら、だがこうして右の眼も左の眼も試して、よく見えるところを見るとこれは夢ぢやなくて本當かも知れない、といつて喜んでゐる中に眼が覺めて絕望に陷るのだと云つてゐた。また、鴫原さんは畫家だつたので繪を畫いてゐる夢は始終見ると云つてゐた。――家人が寢鎭まつたあとで、畫室で靜かに畫を描いてゐる中に、はてな、と首をかしげる。俺が最後に畫いた繪はこの美人畫だつた。その時頭髮の一本々々の細いすぢがよく見えないので不審に思つて眼醫者の所へ診て貰ひに行つたのだが、今晩は實にはつきり見える、俺は盲人になつた筈だがどうしてこうもはつきり見えるのだらう、眼が治つたのかしら、盲だつたらこんなに見える筈がない、さうだ、とうとう治つたんだ、すつかり元通りに治つたんだ、あゝ嬉しいなあ、さあ此の繪の仕上げをやるぞ、こゝにはこの色を塗らうか、これは少し濃いかな、おゝ繪の具は俺が失明する前の儘そつくりしてある、誰もいぢらなかつたのだな、有難い、と畫筆を振るつてゐる中に眼が醒めて、あゝ今のは夢だつたのか、此處は盲學校の寄宿舍か、それにしてもあの美人畫や繪の具がこうもはつきり夢に現はれるとは何といふ悲しいことであらう、俺は過去のことを忘れやう〳〵としてゐるのにどうして夢に現はれて來るのだらう、と今は便所へ行くにも、食堂へ行くにも障子や壁をさすつて行かぬばならぬ身の上を思ふと、ひとりでに泣けてくると云つてゐた。

電燈問題

私は眼の病氣に就ては何の知識を無いが、眼病で暗い所がよく見えない人は視力が早く減退してくるのではないかと思ふ。醫學上でいふ夜盲症とはどんなものか知らないが、一寸した光線の工合でもよく見えない人は、眼のたちがあまり良くないやうである。新聞や雜誌の活字など讀めない人でも、夜盲でない人は視力が强いやうだ。私などは子供の時分から夜はあまり見えなかつた。少年の頃、田圃へ螢取りに行つたことがある。螢が田の上を飛んでゐるのも、小川の緣の草の隙間から洩れる螢の光りが小波を立てゝ流れる水の上に美しくぼうつと映つてゐるのもよく見えた。螢が小

川に落ちて、波のまに〳〵びか〳〵光りながら流れてゆく光景を眺めることも出來た。然し、私は螢が其處に居るといふことは分つてゐても、それを捕ることがどうしても出來なかつた。いつも連れの友達に捕つて貰つてゐた。して見ると、その頃から既に夜はよく見えなかつたらしい。

私は夜盲な上に強い近視眼なので、夜はよほど明るい電氣をつけないと讀書が出來ない。私が盲學校の寄宿舍に入つた當時は、室の電氣が暗くて閉口した。十六疊の室に十燭の電氣が一つ點つてゐるだけである。それに天井から下がつてゐる電氣の線が短かゝつたので本を讀むにも疊の上に立て膝をしなければ、暗くて字が見えなかつた。夜盲でなくてもああ電氣の線が短かくては讀みにくいであらうと思ふ。いくら盲學校の寄宿舍だからといつて、私達のやうに視力のある生徒も居るのであるから、視力保存といふ意味からいつても、照明の設備が今少し整つてゐてもいゝと思つた。盲學校に入つた以上は、萬事點字でやれ、墨字の本は讀むな、といふのは、理窟はどうでも實際は中々困難なことである。多くの中途失明者にきいて見ても、失明するまで視覺に賴つてゐたと云ふてゐる。そこで私は入舍早々電氣が暗くて困るから明るい球に取り換へてくれと話したら、長年これで通して來てゐるのであるから急に改める譯にもゆかないであらう、若し一室だけがさういふことをしたら、他の室でも眞似をするから室長會議にかけた上でなければ駄目だといはれた。それでは室長會議に提出して貰ひたい、尙序でに電氣の線が短かいから長いのに取り換へて貰ふやうに話して見てくれないか、と賴んでおいた。室長會議は大概一ケ月に一回位開くことになつてゐる。尤も用件のない時には會議を開かない。一番忙かしいのは三月と四月で、三月は卒業生の送別會、四月は新入舍生の歡迎會があるので、室長の中から委員を詮衡して會の準備をする。室長に盲人が多い時、又は手不足な時には、室員の中から半盲生を選んで委員にする。以前は室長會議は玄關脇の舍監の事務室で行はれてたが、後に寄宿舍の一部が改築されてから應接室で開かれるやうになつた。さて私の提出した電氣改革案は早速室長會議にかけられたが、あつさり否決されてしまつた。私は非常に失望した。其後、度々此の問題が室長會議に持ち出され、餘程後になつてから、電氣の球だけはやつと十六燭だか二十四燭だかに改められた。盲生徒が電球に觸つて見て「溫かさが違ふなあ」といつてゐた。電氣のコードは中々取換えて貰へなかつた。古いことだからはつきり覺えてゐないが、私が入舍してから四、五年位經つて、やつと長い線に取換えられたやうである。或ひは寄宿舍の一部が改築された時、その改築された室だけが、長い線に改められたのかも知れない。

寄宿舍では朝と夜と二回自習時間があつた。時間の長さは忘れてしまつたが、朝は一時間足らず、夜は一時間半位ではなかつたかと思ふ。ところで平日は、この位でも勉強時間が長過ぎるのであるが、試驗が近づいてくるとどうしても足りない。困つたことには、午後九時に點檢が終るとあとは就寢時間だとあつて消燈しなければならない。盲人はそこへゆくと重寶なもので、寢床の中で本が讀めるのである。仰向けに寢て腹の上に點字の本をひろげて指でさすつて讀むのだ。冬になると掛け蒲團が重くて腹の上に載せてある本の頁がめくりにくいので、蒲團の中に机を入れて掛蒲團を支へ、胴體を机の下に突つ込んで仰向けになつて寢る。さうすると腹と机の間に隙間が出來るので本の頁を樂にめくることが出來るのである。掛蒲團が重いと點字をさすつてゐる手が早く疲れて讀みにくいものである。

私達は川本宇之介先生に盲人心理學を敎はつたが、先生は盲人の勉強振りをよく御存じになつてをられた。「君たちは本と心中してはいけませんよ、アハハハ」と笑はれたことがある。腹の上に本を載せて讀んでゐる中に、睡氣がさして、その儘眠つてしまふからである。私達半盲生には盲生徒の眞似が出來ないので消燈されると閉口した。そこで私が室長になつた時、試驗期には半盲生の

勉強のために點檢後も特に電氣を點けることを許していたゞきたい、それには空室となつてゐる一室に半盲生が集つて其處で勉強するといふことにしたらどうであらうか、點燈の時間も長いことはいはぬ、九時から十一時までの二時間でよいから、と提議した。これは私個人の意見として會議にかけたのである。私自身の必要からでもあつたが、他の半盲生の中には、押入れの中に入つて、蠟燭をつけたり、懐中電燈を用ゐて勉強する者があつたので、たゞでさへ視力の弱い者がこんな不衞生なことをしては、益々眼を害なふばかりだと憂慮したので、室長になつたのを幸ひ早速提議したのである。舍監は默つてきいてをられた。すると一人の盲人の室長が眞向から反對を唱へた。理由といふのは斯うである。電燈料は寄宿生が毎月收める舍費の中から支出するのである。その全寄宿生が收めてゐる舍費を半盲生だけが使用するのは不都合だといふのである。私は一寸考へた。電燈料といつた所で、たつた一個の電球を二時間使用するだけぢやないか、私たち半盲生は平素、夜の自習時間中にも盲生徒に頼まれて親許に出す手紙を始終書いてやつてるぢやないか、盲生徒が口述するのを一々書くのは時間のかゝるものだ。そればかりではない、あの本を讀んでくれ、この本を聞かしてくれと自習時間中でもよく頼むぢやないか。それをたとひ、一時間でも二時間でも半盲生のために電燈料を出すのはいやだなどといふのは、ちと酷いぢやないか、と思つた。二人の間にし

ばらく議論の應酬が行はれたが、その中に他の盲人の室長が私の肩を持つてくれたので、遂に私の意見が通り宿望を達することが出來てうれしかつた。

カルメ燒

雨や雪の日に、片手に傘をさし片手に杖をついて通學する盲生徒の姿を見ると心から同情の念が湧いて來る。私たちのクラスに池袋から通つて來る盲生徒が居たが、或る雪の朝外套をびしよ濡れにして教場に入つて來たことがあつた。いくら雪が降つてゐたとはいへ、隨分濡れたものだと思つて、盲生徒に尋ねたら、垣根や道の並木に打つつかつたんだ、といふ。樹に打つかると枝の上に積つてゐる雲がバラ〳〵落ちて來て頭から被ぶつてしまふんだ、襟の中に雪が入るとぞつとする、と云つてゐた。襟元に觸はつて見るとなる程濡れてゐる。私は氣の毒に思つて、服を脱いで乾かすやうにと言つたら、それよりも足が冷めたいと云つて靴下を脱ぎにかゝつたが、びつしより濡れてゐるので足にくつついて中々脱げない。

「靴の底に穴が開いてゐるのか」

ときいたら、

「いゝや、さうぢやない、雪の溜り場に足を突つ込んだんだ」

といふ。

「辛かつたらうなあ」

と慰さめるやうにいふと、

「朝出掛ける時にはこれでも靴下を溫ためて穿いて、威勢よく出たんだが、途中で斯う難儀をすると頭が疲れて、學校に着くとがつかりしてしまふよ。これぢや授業時間に先生の仰言ることも頭に入らないだらう」

と云つて本當に疲れ切つたやうな顏をしてゐた。私は彼が學校に入學した當初は、未だ視力があつて、杖無しで歩行もしてゐたし、盲人の手を引いて面倒を見てゐたことも知つてゐるので、盲目になつてから、こうして惡戰苦鬪をしてゐるのを見ると氣の毒でならなかつた。通學のために頭を勞して教室に臨むのは、丁度、强行軍をして疲れた兵隊が休む暇もなく直ちに戰鬪に參加するのと同じである。盲生徒の通學の苦勞を思へば、晴眼の學生の通學などは物の數ではあるまい。

そこへゆくと寄宿生は仕合せである。冬になると各室に一つ宛火鉢が出る。四角い大きな火鉢だ。

火鉢には盲生徒たちが火傷をしたり、着物を焦がしたりしないやうに網が附いてゐる。この網を火鉢に被ぶせてあたるのであるが、鐵兜のやうな形をしてゐる網の上からだと、手を載せてもあたゝかくないので、外づして直かにあたる。金網は紙屑籠の下に置いておく。屑籠は室の柱に掛けてある。尤も、横着な生徒は、火鉢に網をかけてその上に跨がつて股あぶりをやつてゐる。だから何處の室の金網もべちやんこにならない迄も少し潰ぶれてゐる。

火鉢に炭をつぐのは大概半盲生である。盲生徒で上手に炭のつげる人は少ないやうだ。

「火がおこつたから見てくれ」

などと自慢して呼ぶので行つて見ると、なる程火はおこつてゐるが、火鉢の横つちよに炭がついである。火箸ではどうもうまくつげないらしい。中には手掴みで炭をつぐ者もある。寄宿舎と學校とは廊下傳ひになつてゐて直きなので、實地の時間などは授業の鐘が鳴つてから室を飛び出しても遲くはない。

寄宿生活の中で一番樂しいのは此の火鉢が出た時である。皆一と所に集まつて來るからだ。それに寄宿生は全國から來てゐるので變つた土地の話が聞かれて面白い。

北海道から來てゐる盲生徒は、俺ん所では冬になると熊が出るぞ、裏の山をのこ〳〵歩いてるんだ、とまるで熊の兄貴にでもなつたやうな顏をして、お國自慢をする。又別な盲生徒は、僕の田舍では雉子が獵れるぜ、君たちは雉子のお吸ひ物を食つたことがあるか、と自慢をする。食ひ物の話となると、そいつは俺の繩張りだとばかり得意になる者もある。中には、飯に牛乳をかけて食つたことがあるか、と突つ拍子もないことを言ふ者があると、

「俺は御飯にサイダーをかけて食ふぞ」

と横槍を入れた者があつたが、飯にサイダーをかけて食ふといふのは私も初耳である。或る日、皆で火鉢を圍んで例の興太を飛ばしてゐたが、その中に誰かゞ、

「カルメ燒を作つて食ふとうまいんだがなあ」

と云ひ出した。

「どうして作るんだ」

と私がきくと、

「なあにザラメを水に熔かして火鉢の上に載つけて棒で搔きまわせば出來るんだ。譯は無いさ」

といふので、ぢや、こうして火鉢にたゞあたつてゐるのも能が無いから一つ作つて見ようかな、といふことになり、早速道具を買つて來てやつて見たが、いくら膨れ上がつても火鉢から鍋を下ろ

すと、すうーと凹んでしまふので、はーてなと首を捻つてゐると、其處へ洗濯屋の小僧さんが御用聞きにやつて來た。

「やあ御馳走ですな」

といつてニコ〳〵して眺めてゐる。

「洗濯屋さん、こんなにうまく膨れるんだが、直きにべちやんこになるのはどういふ加減だらうな」

ときくと、

「ザラメだけぢや駄目ですよ。ふうーと膨れ上がつたところで、棒の先に少し重曹を附けて搔きまはすんです。そしてこうやつて(と云つて棒で搔きまぜる眞似をして見せて)搔き廻はす輪を段々小さくして眞ん中からすうつと棒を引つこ拔くんです。さうすると凹こまないで膨れたまんま固まつてしまひます」

と親切に敎へてくれた。小僧さんも店に歸るとカルメ燒をやつてゐると見えて中々よく覺えてゐる。

「さうか、どうも有がとう」

と御禮に汚れ物を洗濯に出し、早速重曹を買つて來て作つて見たら、なるほどうまく出來た。

「おう、出來たなあ」

と盲生徒たちは手のひらでそうつとカルメ燒を撫でて感心してゐた。

「さあ皆にこしらへてやるぞ」

と私は作り初めたが、作る片つ端から皆が食つてしまふので、

「おい、もつとゆつくり食つてくれ、忙がしくて堪まらん」

といふと、

「こいつは、溫つたかい中に食はないと旨くないんだ」

と云つて笑つてゐた。

一體、寄宿舍に入ると食ひ方が早くなるやうだ。これは食堂で飯を食ふ關係からかも知れない。それに盲人は箸で物を摘まんで食ふよりも、茶碗や皿の緣に口を當てゝ箸で搔つ込んで食ふので、よけい早くなるらしい。或る寄宿生が田舍に歸つたら、食ひ方が早くなつたと云つて家族の者が驚ろいてゐたと言つてゐたが、實際寄宿に入ると食ひ方が早くなるのである。

カルメ燒を作り初めてから火鉢にあたりさへすれば、カルメ燒を作つてくれとせがまれたものである。いくらこしらへてやつても、もう澤山だとは言はない。カルメ燒では中々腹が膨れないらし

い。私が獨りでこつそり作つて食はふと思つても、盲生徒は鼻がいゝから直きに感付かれてしまふ。カルメ燒も試驗が濟んだあとでこしらへると實にのんびりして氣持のいゝものである。

食ひ物の話で思ひ出したが、或る日、半盲生が二人の盲生徒を連れて某先生の御宅へ遊びに行つたさうだ。先生も盲人である。その時羊羹を出されたさうである。先生が、

「どうぞお上がんなさい」

と仰言られたので、盲生徒は何だらうと思つて手を出して觸はつて見たら、皿の上に羊羹が切つて並べてあつたので、盲生徒は喜こんで食つたさうだ。そしてたつた一片（ひときれ）となつた時、二人の盲生徒は別に申し合せた譯ではないが食ふのを止めたさうだ。先生が皿の上をさぐつて御覽になると羊羹が一と切れだけ殘つてゐるので、

「お上がんなさい」

と申されたさうだ。一人の盲生徒がそうつと皿をさぐつて見ると、やつぱり一と切れなので手を引つ込めたさうだ。すると今一人の盲生徒も皿を撫でまはすと一切れしか無いので、これ又手を引つ込めたさうだ。二人の盲生徒はとう〳〵羊羹一片を殘して歸つて來たさうだが、あとで一人が、

「あの一切れに未練があつたが、あいつを食つてしまつては皿が空つぽになるので遠慮して殘して

來た」

と云つたら、今一人が、

「僕も實は喰べたかつたんだが、どうも一と切れとなると手が出ないもんだなあ」といつて笑つてゐたさうである。

無鐵砲

私が入舍して第一に深く感じたのは、寄宿生が殆んど全國から集つて來てゐることであつた。私の室の者も、熊本、福岡、青森、北海道といふ風に、いづれも地方から來てゐるのである。私の國は奥州の二本松である。東北訛りは中々拔けないもので上京當時一度江戸川町で買物をした時、東京辯を眞似て喋つたら、「あんたは朝鮮人だらう」といはれたことがある。だが、これでも戸籍には私の出生地は赤坂區青山北町となつてゐるのだ。私が生れた家の隣りに菱刈（ヒシカリ）大將が當時大尉で住まはれてゐたさうである。それで三年前に父が死んだ時、同大將から御懇篤な弔電をいたゞいた。

盲目の兒を東京の學校に出すといふのは、よく〳〵のことであると思ふ。私の田舍には子供の時

分、未だ中學校が無かつたので、小學校を卒業しても、數里離れた都會の中學に入る者は、ほんの數へる位しか無かつた。東京へ行くといへば大學生位のものだつた。然るに盲學校の寄宿舍には初等部の生徒も居れば、中等部の生徒も居る。眼が不自由だから、こうして東京へ勉强に出すのである。若し健康な子供だつたら、いくら家庭が豐かでも、遠い東京の小學校へ、而も寄宿舍に迄事好んで入れる親もあるまい。

親は有難いもので、私が盲學校から休暇で歸る時には、母は私が歸るのを指折り算へて樂しみ、私の夜具蒲團を一週間も二週間も前から天日に干して待ち佗びてゐたさうである。盲學校に入學して最初に歸省した時、私が母に點字盤を出して見せ、紙にポツリ〳〵穴を開けて點字を書いて見せたら、母はいたく胸を打たれたらしく、「お母さんも點字を覺えませう。教へて下さい」といはれた。私が歸つて來ると食膳に供する魚なども、なるべく骨のないのを選ばれたやうである。何時であつたか、私が歸省して久しぶりで一家揃つて夕餉の卓を圍んだ時、私にだけ別に一皿おかづがついてゐたので不審に思つて母に尋ねたら、

「これは道子ちやん(私の妹、當時小學校の生徒)の昨晩のおかづですよ。道ちやんは、明日は繁ちやん(私のこと)が歸つて來るので、これを喰べないで、繁ちやんに上げるんだといつて殘して置いたんですよ」と言つて敎へてくれた。八歳か九歳の頑是ない妹が、明日は東京から兄が歸つて來るといふので大好きなおかづも喰べないで私に殘して置いてくれた氣持を私は有難く思つた。ああ、私は盲學校に入つてゐるけれど、家に歸れば幸福であると思つた。

私の入つた室は休養室と言つて、湯呑み場の隣りにあつた。他の室には窓に格子がしてあつて拔け出られないやうになつてゐた。ところが休養室の窓には格子が無いので夜の點檢後、そうつと窓から飛び出すことが出來る。而も窓の下には非常用の梯子が横たはつてあるので、それがいゝ足場になる。夕飯が四時半か五時なので、九時の點檢の時刻になると腹が空いてくる。何か買つて食はふといふ相談が出る。私は新米だし、それに下級生で眼が見えるのでいゝ使ひ役だ。皆から十錢づつ集めて、大きな風呂敷を持つて舍監に見付からないやうにそつと窓から飛び出す。當時の舍監は石川重幸先生といつて、恐ろしい嚴格な人で、それにもう七十といふのに耳がとても敏いので油斷が出來ない。行く所は大抵三軒目である。私も初めは三軒目つて何のことだか分らなかつたが、盲人は盲人らしい言ひ方をするものだと思つた。大學分院の横丁を曲がつて、角から三軒目に菓子屋があるので、それでその菓子屋を三軒目といふのだ。寄宿の窓を飛び出しても、寄宿は學校の構内にあるので、運動場を横切つて、校門を乘り越さなければ外に出られない。門の傍らには小使さん

の家があつて見張りをしてゐる。然し、そこは抜け目のないもので、小使さんの奥さんが肩が凝るので時々行つては按摩をして上げる。それで、小使さんも平素の恩義？　に感じて大目に見てくれる。大將を打たんとすれば先づ馬を射よ、とは昔の人もうまいことを言つたものだ。一度私の一の者が點檢後蕎麥屋に行つての歸り、さて校門を乘り越へやうと、門に足をかけてガタ〳〵やつてる所へお巡りさんが來て「コラ〳〵」と足を捉まへたさうだ。盲生徒なので、つい目と鼻の所にお巡りさんが立つてゐたのが分らなかつたのだらう。

「お前は誰だ」と訊問されて、盲生徒は降りるにも降りられず門の上に跨がつたまゝ「ハイ、盲學校の生徒であります」と答へたさうだ。

「名前は？」ときかれて、

「何の某」と答へたら「よし」といつて釋放されたさうだ。室に歸つて來て、

「なあに、出鱈目の名前を言つて來た」といつて、しやあ〳〵してゐた。

私は初めの中は自分の上草履を履いて飛び出したが、或る晩、溝の中に嵌つて草履をズブ濡れにしたので、これに懲りてその次からは室の者の草履を默つて履いて行くことにした。翌る朝になつて、「おやつ、俺の買つたばかりの草履が泥だらけだぞ」といつてゐるのをきいたことがある。三軒目は寄宿舍から近いからいゝとして、大塚警察署と護國寺の丁度中間にある餅菓子屋へ度々大福や豆餅を買ひにやられたのには閉口した。こんなに遠くまで行かなくても、他に餅菓子屋はあるのだが其處の大福は少し大きいといふのでわざ〳〵買ひにゆくのである。或る寒い晩だつた。ぶるぶる慄えながら餅菓子屋に行き、大福を注文して、さて勘定といふ段になつて私は五十錢玉を途中で落として來たのに氣が付いて青くなつた。念のために懷ろと袂へ幾度も手を突つ込んで搜して見たが無い。店の者に譯を話したら、「それぢや上げられない」といつて、折角包んだ包みを解いて、又元の陳列棚に大福を並べてしまつた。私は眼の前に大福を眺めながらおめ〳〵歸るのが口惜しくつて、今通つて來た道を腰を跼めながら五十錢玉を搜して歩いたが、見付からなかつた。それで又今來た道を逆戻りして搜したがやつぱり見付からなかつた。寒い晩に寄宿舍と遠い餅菓子屋の間を往つたり來たりして遂に五十錢銀貨を搜し當てず、大福を食ひそこなひ、これが本當の骨折り損のくたびれ儲けだらうと思つた。

輕はずみ（一）

寄宿舍では外出する時、一々舍監に斷つて行くことになつてゐる。舍監の室は玄關の脇にある。

「先生、買ひ物に行つて參ります」

と恐る〳〵伺ひを立てると、

「ああ、よし」

とお許しが出る。蕎麥を食ひに行く時も汁粉屋に行く時も、買ひ物に行つて參りますである。

或る日、私は盲生徒と出掛けることになつた。用事といつて別にないのだがその盲生徒が煙草が喫みたいといふので外に連れてつてやるのだ。寄宿では當時禁煙されてゐたからだ。

「先生」

と盲生徒は舍監室の前に蹲んで聲をかけた。

「ああ」

と中から先生の聲がした。盲生徒は部屋の中央の障子を開けた。そして丁寧にお辭儀をしやうと

敷居際に頭を下げた時、ガタンとエライ音を立てた。今一枚障子があつたのだ。障子が二枚重さなつてゐるのを盲生徒は一枚開けてもう前には何にも無いと思つたらしい。

「ああ」

と今度は驚ろいたやうな聲が中からきこえた。

「買ひ物に行つて參ります」

と盲生徒は顰めつ面をしてお辭儀をした。よつぽど強く打つたらしい。

「よし」

と云はれて盲生徒はこそ〳〵戻つて來た。外に出て一服吸ひながら彼は言つた。

「君は僕が障子に打つ衝かつた時笑つたらう」

「うん、思はず笑つた」

「……」

盲生徒は何にか言はふとして又口を噤ぐんだ。敎養がそれを止めだのであらう。私は惡いことをしたと思つた。

（二）

寄宿舍では男女生がお互ひに室に出入りするのを禁じられてゐる。どちらか用事がある時には、小使さんに聘んで來て貰ふのだ。會ふ場所は玄關の廊下で柱時計のある所だ。或る日、半盲の男生徒が全盲の女生徒と柱時計の下で話をしてゐた。その中、男生徒の方はもう用が濟んだのだらう、淡白な男と見えて默つて歸つてしまつた。女生徒は、それとは知らずしきりに話しをしてゐた。時時ニツコリ笑つたりしてゐる。だが一向返事が無いので女生徒も不審に思つたらしい。

「どうしたの」

と訊づねて見たがこれまた梨の礫だ。其處へ他の女生徒が通りかゝつて、

「あら貴女、何んだつてそんな所に立つて獨り言を云つてんの」

と尋づねたので、さては男生徒は私の知らない間に歸つてしまつたのかと氣が付き、それにしても口惜しいわ、居るとばかり思つて一生懸命お話しをして……人を馬鹿にしてゐるわ、と忌々しさうに膨れつ面をして歸つて行つた

このやうにちよつとしたかるはずみから盲人の平和な氣持を害なふことがあるから氣を付けなければならない。

お呪禁

犬を立派な闘犬に仕立てるには息子を大學に出すより、もつと金がかゝるといふことを聞いてゐるが、盲兒に一藝を仕込むにも中々金のかゝるものだと思つた。私が師範部三年生の時、宮城道雄氏の夫人に賴まれて、初等部の長野武君を寄宿舍の私の室に入れることにした。その時夫人から武ちやんの婆やを搜がして呉れないかといふ相談を受けた。婆やといふのは武ちやんを琴の稽古に連れて行く手引きである。夫人のお話では、これまでの婆やさんに月に十圓とか十五圓とかその邊のことは忘れてしまつたが、小遣を拂つてゐたが、それでは少し高いし、それに住所も變つたので、他に適當な婆やが居たら世話をして欲しいといふのである。そこで私は色々心當りをたづねた末、學校の近所に通學の盲生徒を下宿させてゐるお婆さんの居るのに氣が付いて、お婆さん（と云つても五十位）に武ちやんの手引きになつてくれないかと賴んで見たところ、では出來るか出來ないか一つやつて見ませうといふことになり、御禮も僅かだが月七圓でどうでせうと相談したら、よござんすといふ譯で話がすら〳〵と纏まつた。それで宮城氏夫人に委細をお話ししたら大へん喜こんで

をられた。今迄の婆やより今度の婆やは小遣が安いが、併しその他に電車賃が要る。これも毎日二人分となると馬鹿に出來ない。なるほど盲人は眼の見えぬ所に金のかゝるものだと思つた。それに武ちやんの國は朝鮮の京城なので、休暇には親兄弟が遙る〳〵迎へに來なければならない。歸る時には送つて來る。考へただけでも中々容易なことではない。

これ程親にも人にも心配をかけてゐるのだから、武ちやんも精を出して琴を稽古すればいゝのに、子供といふものは仕様のないもので、寄宿舍では碌々稽古もせず、先生の所では何時も叱られてばかり居る。

「武ちやん、稽古をしなけりや駄目だぞ」

と言つても、

「僕は琴が嫌ひなんです」

と云つて平氣の平左だ。

「そんなことを言つたつて仕様がないぢやないか。稽古をしろ」

「だつて嫌ひだから嫌ひつて言つたんです」

といふ譯で中々私のいふ事をきかない。或る日、武ちやんは琴の稽古から歸つて來たが、

「先生がもう琴を敎へてやらないと言つたから、稽古をしなくてもいゝんだ」

と云つて、部屋の者とわい〳〵騒いで遊んでゐた。はて、おかしなことを言ふわいと思つてゐると、宮城先生から私に電話がかゝつて來た。何だらうと思つて電話口に出ると、先生の聲がして、今日武ちやんが稽古に來たが、ちつともさらつて來ないので叱つたら、わざと亂暴な彈き方をするので、もう明日から來なくてもいゝと言つてやつた。就いては、この儘にしても置けないから二、三日經つて、あなたが私に詫びを入れるといふことにして、武ちやんを連れて來てくれませんか、といふのである。仕様のない奴だと思つて部屋に歸つて來ると、武ちやんが、

「先生から何んてかゝつて來たの」

ときいた。

「先生は非常に怒つて、もう敎へてやらないと言つてたぞ」

といふと、

「まだ怒つてるのか」

と一寸弱つたやうな顏をしてゐる。

「學校も廢めさせると言つてたぞ」

と嚇かすと、急に顏色が變つて、
「學校を廢めるのは嫌だ」
と云ふ。さうだらう、武ちやんは學問好きで成績も一番なのだから。
「ぢや稽古をしろ、君は子供のくせに飯を二人前食つてごろ〳〵してゐるんだから豚と同じだ」
「でも先生の所へは行けないなあ、怖くて」
「大丈夫だ、俺が謝まつてやる。俺のことなら先生は何んでも聽いてくれるんだ」
「さうかなあ、ぢや先生の所へ一緒に行つてくれるんですか」
「うん、今度だけはね、その代り一生懸命稽古をしないと承知しないぞ、寄宿をおん出してしまふから」
武ちやんも腹背に敵を受けた格好で、いや〳〵ながら稽古を初めた。
さて、二三日經つて武ちやんを先生の所へ連れて行つた。私は豫じめ先生と打合せしてある通り
「武ちやんも後悔してこれから一生懸命稽古をすると申してをりますから、どうかこれまでのことはお許し下さい。私からお願ひ申し上げます」
と執成をすると、先生は、

「武ちやん」
と武ちやんを呼ばはれた。武ちやんは小さくなつてゐる。
「野地さんが君のことを心配してわざ〳〵連れて來て下さつた御親切を有難いと思はなければいけないよ。これから眞面目に稽古をするかい」
武ちやんは蚊の鳴くやうな聲で、
「ハイ」
と答へた。
「ぢや、さらつて上げる」
と、いふ譯で其の場はこれで無事に收まりがついたが、それから少し經つとまたぐらつき出して先生から始終叱られて歸つて來る。ところが或る日、
「もう叱られないぞ」
といつてニヤ〳〵笑つてゐるので、
「どうしたんだ」
ときいたら、

「僕も先生にさうがみ〳〵叱られてゐたんでは堪らないからお呪禁をしたんです」
といふ。
「なんだと、お呪禁？」
ときくと、武ちゃんは、
「先生に言つちゃいけないよ」
とダメを押す、
「うん、言はない」
「ぢや教へて上げやう」
と澄ました顔をして、
「先生にさらつて貰ふ前にね、便所に入るんです」
「便所？」
「さうです。便所に入つて小便をしたら、手を合せて拜がむんです。どうか先生が怒らないやうに怒らないやうにつて」
と、武ちゃんは手を合せて拜む眞似をして見せた。

「へえ」
「とても效くんです。便所に入つて拜むやうになつてから怒られなくなりました」
「でも汚ないなあ、小便をして手を洗はないで拜むなんて」
「手を洗はないで拜むから效くんです」
と眞面目な顔をして言ふ。
「その汚ない手で琴を彈くんだから堪らないなあ、大へんなおまじなひだなあ」
と云つたら、
「先生に言はないで下さい、效き目が無くなりますから」
と又ダメを押した。

× ×

武ちゃんとも暫らく御無沙汰してゐたが、今年の春であつたかひよつこり武ちゃんから活版刷の手紙が舞込んで來た。はてな、と思つて讀んで見ると何んとお嫁さんを貰つたといふ挨拶狀である。あの武ちゃんが花婿に……と思ふと私まで嬉しくなつて世の中が明るくなつたやうな氣がした。好漢武ちゃんの多幸を祈る。

母の慈悲

私とは室は違ふが、音樂生で福田六郎さんといふ半盲生が居た。大人しい人だつた。一體、音樂科は大部分が女生徒なので、その中に混つてゐるせいか、自然と大人しくなつて來るやうだ。尤も、中には宮下哲郎さんのやうな豪傑も居るが。福田さんは餘技として大正琴が上手だつた。本物の琴で鍛へてゐるのだから第一、音色からしてちがふ。六段など彈いてゐる時には他室の者も聽きに來たものだ。

震災の翌年だつたと思ふが、夏休暇中に福田さんは脚氣衝心で急逝された。

丁度私は用事があつてまだ歸鄉せず、本鄉の保證人の家に居たので、訃音をきいて驚愕し、早速築地の福田さんのお家へお悔みに行くことにした。それにしても香奠をいくら位上げたらいゝか、保證人に相談をしたら、

「さうだなあ、君はまだ親の脛嚙ぢりなのだから二圓も差上げたらよからう」

と仰言つた。墓口には五圓札が一枚入つてゐたので、それをくずして二圓紙に包んで持つて行つ

た。私が福田さんの家へ伺つたのはこれが初めてゞ、御家族の方にお會ひするのも最初であつた。

福田さんのお母さんは大層喜ばれて、私を遺骸の安置してある二階の座敷へ案内された。靈前には琴を彈奏してゐる福田さんの寫眞が飾つてあつた。この寫眞を燒增ししてあなたに上げますと仰言つた。福田さんのお母さんは、福田さんが眼が不自由なのでお子樣の中でも一番不憫がつてをられたやうである。私が福田さんと同じ盲學校の生徒なので、よけい悲しく思はれたのであらう、ハンカチを顏にあてゝしんみりと臨終の模樣を語られた。私も何だかつまされて悄然として辭去したが、電車に乘つて歸る時、宮城のお壕の水や石垣の松の樹が夕燒けで眞赤に染まつてゐるのを眺めて、ああ美しいなあと思ふと同時に、この景色を福田さんはもう二度と見ることが出來ないのかなあと淋しく思つた。

福田さんの家へお悔みに行つた晩、私は涼みがてら白山上の賑かな通りを散歩した。そして、南天堂書店に入つて本を物色してゐると、ふと「ポンペイ最後の日」が眼についたので開いて見たら面白さうなので、買はふと思つて定價を見ると三圓と書いてあつた。震災直後なのでこういふ本が讀んで見たくてならない。そこで買はふと決心して懷ろに手を入れた時、私は墓口を何處かで落としたことに氣がついた。仕舞つた、と思つたがもう遲い。念のため今來た道を捜して見たが見付か

らなかつた。私がかつかりして歸つて來て保證人に話したら、「俺は大晦日の晩に電車の中で二百圓落としたことがある。電車の回數券を出してから財布を二重廻しの裏のポケツトに入れやうと思つて、うつかりして二重廻しと羽織の間をポケツトと間違へて財布を置いたんだ。これぢやすつぽり落ちてしまふさ。家に歸つて氣がついたがもう後の祭だ。君の三圓とはケタが違ふぜ」と仰言つた。

「大晦日の晩ぢや口惜しかつたでせうなあ」

「俺は諦めたが家内にくどかれて弱つたよ」

といつて笑つてをられた。私はどうせ落としてしまふなら福田さんに五圓そつくり香奠に上げればよかつたと思つた。

夏休暇が終つて歸京してから、私は二人の盲生徒の手を曳いて下谷稻荷町のお寺(名を忘れた)へ福田さんの墓參りに行つた。今はその寺も區劃整理で何處かへ移轉してしまつたが、その頃福田さんのお寺の近くに幡隨院長兵衞や唐犬權兵衞の墓があつた。

私が福田さんの墓に香花を手向け、二人の盲生徒に墓をさぐらせて、さて歸らうとした時遠くの方でしきりに私の名を呼ぶ者がある。振り返つて見るとそれは福田さんのお母さんであつた。福田さんはお母さんがお年を取つてからのお子さんらしく、私には餘程の御年輩のやうに思はれた。福田さんのお母さんは私達を無理に近くの壽司屋に連れて行き二階に案内された。

「六郎の墓へお詣りして下さいまして嬉しうございます」

と言つてしきりに泣いてをられた。盲學校の生徒を見ると我が兒が思ひ出されて悲しみが胸にこみ上がつてくるのであらう。

「六郎には盲學校のお友達よりほかにお友達が無いので、なんぼう墓參りをしていたゞいて喜んだことでございませう」

とさう言つて又ハンカチで顏を覆はれた。食卓には握りの壽司を澤山並べた大きな皿が運ばれた。

「さあ〳〵詰らないものですが、どうぞ召し上がつて下さいまし」

と言つてお母さんは盲生徒に割箸を割つて手に持たせ、醬油皿を前に置き、大皿から壽司を取つて下さつた。歸る時には私たち三人に壽司の折箱を一つ宛渡され、電車の停留場まで送つて下さつた。私が電車の窓から御挨拶をしたら、福田さんのお母さんはしよんぼり立つて泣いてをられた。

天佑

私が尺八を習ひ始めたのは盲學校を卒業する二年程前からである。動機といつて別にないが、私は長らく音樂科の盲學徒を二人、毎日琴の稽古に連れて行つたので、或はそれが機緣となつたのかも知れない。音樂科のことはよくは知らないが、學校で習つてゐたゞけでは曲が進まないので、授業時間以外に、街で開業してゐる先生の所へ習ひに行くのが一般の慣習になつてゐた。街の先生といつても殆んど全部が母校の卒業生である。場所も學校からあまり遠く離れてゐない。稽古の時間は、その先生の都合によつてまち〳〵なので、朝、學校の授業が始まる前に行くこともあれば、午後放課後に行く場合もある。盲人が獨りで杖をついて琴の稽古に通ふのは途中が危ぶないし、歩行に神經を使ふのは頭のためにもよくないと思つたので、私は同室の音樂生を稽古に連れてゆくことにしたのである。それが約五年間續いた。最初に行つたのは平野先生といふ女の先生で、雜司ケ谷の墓地の近くにお住ゐになつてをられた。私が連れて行つた二人の盲生徒は當時普通科（今の初等部）の生徒であつた。間もなく平野先生が九州だか北海道だかへ御引越しになられたので、梅川

先生の所へ習ひに行つた。平野先生の所へ行くには、馬車が頻繁に通る狹い道を通つて行かなければならなかつたのであるが、梅川先生のお住居は人通りの少ない閑靜な所にあつたので、道の眞ん中を三人で並んで手をつないで歩いても安心であつた。その後、老松町の水野芳枝先生の所へ習ひに行くやうになつたのである。まだお若い言葉使ひのやさしい先生であつた。水野先生が音樂科の師範部も御卒業なされたのは二十歳前だと伺つてゐる。師範部を十八か十九で卒業するといふのは異例に屬する。此邊で連れの一人は千鳥の曲を習つた。水野先生の御兩親は非常に御情深い方で、冬の寒い朝など、稽古の濟むのを待つてゐる私に熱い砂糖湯やコーヒーなどを下さつたことを覺えてゐる。附添ひの者にまで目の屆く人は少ない。私は琴については門外漢であるが、水野先生の琴の爪音が何となく綺麗に感ぜられた。連れの音樂生も先生の爪音は非常に上品だといつてゐた。その中に先生が九州の盲學校の先生になつて行かれたので、水野先生とは師範部の同級生だといふ石田倉吉といふ先生の所へ習ひに行つた。この先生の家までは可なり道のりがあつた。石田先生は座談がお好きで稽古を始める前に一とくさりお話をなさるのが常であつた。此邊で盲生徒の一人が「熊野（ゆや）」といふ曲を習つたのを覺えてゐる。石田先生の所へどの位通つたか忘れてしまつたが、先生も地方の盲學校の先生になつて行かれたので、私たちは又ルンペンになり、今度は目白の女子大

學裏の三輪尙先生の所へ習ひに行くことになつた。算へて見ると私が五年間琴の稽古に連れて行つてる間にお師匠さんが五人代つたのである。音樂生が琴を敎はつてゐる間、私は玄關の上がり口に腰掛けてゐるか、又は部屋の隅の方に座つて稽古の終るのを待つてゐた。

試驗が近づいて來たり、新刊の書籍を買つた場合などには本を持ち込んで行くこともあるが、他人の家で而も琴の稽古をしてゐる直ぐ鼻の先で讀書するのであるから中々頭の中に入らない。で、大概は、稽古が濟むまでぼんやりして待つてゐた。稽古に行つて直ぐ習へると有難いが、先客があると待たされる。音樂生が先生の所に行くと「先生御機嫌よう」といつて挨拶をする。すると先生も「ああ御機嫌よう」と答へられる。何だか子供々々してゐると思つて聞いてゐた。斯うして二人の盲人を毎日琴の稽古に連れて行つてる間に、私も何か音樂をやつて見たいものだと思ふやうになつた。そして選んだのが尺八である。恰度、琴の稽古に連れてゆくやうになつてから四年位後のことである。然し、玆に困つたのは尺八の稽古の時間が午後七時からだといふのである。私は夜はよく見えないので通ふのに一と苦勞をした。其の頃、先生は新宿一丁目の井村齒科醫院の御本宅で出張稽古をしてをられたので通ふのが大變であつた。雜司ヶ谷の寄宿舍から學習院の前を通つて目白に行き、目白驛から省線で新宿に出るのである。目白通りは今は道路も立派になりバスも通つてゐるが、その頃はバスも無く、道路も惡くて、雨や雪の夜などは大きな水溜りが方々に出來て、少し急いで歩くと泥が跳ね上がるといふ有樣であつた。それに夜は非常に暗かつた。寄宿舍から目白驛まで可なり遠い。雨の夜など、あまり暗いので歩いてゐる中に時々目標を失なつて一體自分は道の眞ん中を歩いてゐるのであらうか、それとも溝のそばを歩いてゐるのであらうかと迷ふことがあつた。

さういふ時、背後から警笛を鳴らしながら自動車が疾走して來ると、今迄眞暗だつた道路が照明燈に照らされて、一時に明るくなるので、ああ、自分はこんな所を歩いてゐたのかと初めて分りほつと安心するのであつた。又自轉車が明りを點けて走つて行くと、私はあの自轉車のあとをついてゆけば大丈夫だと眞一文字に勇んで歩いたこともあつた。目白驛には石段がある。私は夜でも階段を昇るのは平氣であるが、降りるのはどこから階段になつてゐるのか分らないので難澁する。そんな時に白足袋を穿いた女の人が私の前を通つて石段を下りると、夜目にも白足袋ははつきり分るから、ああ、今、白足袋が下に消えた所が階段の降り目だな、と氣が付いて胸を撫でおろすのであつた。又、新宿驛を出ると電車道を横切らなければならない。あの雜沓する大通りを横切るのは容易なことではない。然しまあ何とか横斷した。虎穴に入らずんば虎兒を得ずといふが、尺八の稽古の

往復は全く命がけであつた。だが、不思議なもので一度も自動車や電車に衝突したこともなければ溝に落ちたこともなかつた。

震災の翌々年だと記憶するが邦樂座で三曲名流大會が開かれたことがある。同室の音樂生が聽きに行きたいといふので私は連れて行つた。演奏會は夕方始まるので少し早目に明るい中に出掛けた。會が終つて歸る時には、外は眞つ暗であつた。私は二人の盲人を左右の腕に抱えて途方に暮れた。電車の乘り場が何處だか分らないからである。震災後、まだすつかり復舊しないので街は暗い。私は燈火がいくらか多い方向を眺めて、多分、あそこらが停留場だらうと思つて歩き出した。秋も半ばを過ぎた夜の風は身にこたえる。霜でも降りて來さうな寒さだつた。すた〳〵と歩いてゐる中に私はふと何氣なく足を停めた。停留場らしい所に來ないからである。私は、きつとあたりを見渡した。その時、ボー〳〵と異樣な音を立てゝ足の下を通つて行くものがあつた。はてな、と私は思つた。何だか下が明るい。で、ひよいと下を見下ろした時、私は全身が一時に凍つてしまふやうな氣がした。思はず聲を立てる所であつた。下は河である。明るいと思つたのは、幾丈か下の川面に燈火が映つてゐたのである。川岸の燈火が映つてゐるのか、數多の舟の燈火が映つてゐるのかそれは私には分らない。舟が通つてゐる位だから大きな川であることだけは分る。あゝ危ぶなかつた、と思つた。私は川緣からほんの一尺位手前の所に立つてゐたのである。よく見ると川緣には柵がしてない。震災後日が淺いからであらう。私にはどうして危機一髮といふ所で無意識に立ち停まつたのか自分でも分らない。今一歩で三人は諸共に數丈の高さから川の中に轉落する所であつた。私は何か眼に見えぬもの——私は神であると信ずる——が私を護つてゐて下さるのであると思つた。私は無言の儘方向を變へて歩いた。二人の盲生徒は何も知らず樂しかつた演奏會の感想を語り合つてゐた。

お吸ひ物

或る盲人が他家へ晩餐によばれたさうだ。

お吸ひ物の蓋を開けるとぷーんといゝ匂ひがする。旨まさうだなあ、とおつゆを吸はふと思つてお椀のところに口を持つていつたら、鼻の尖きをチクリと刺す者がある。はてな、と思つてお椀をそのまゝ下に置き他のおかづを食つて、再たびお椀を取り上げておつゆを吸はふと口を持つて行つ

たら又鼻の尖きをチクリと刺すので吸ふのを止めた。盲人は誰かいたづらをしてゐるのだな、と思つた。今度ふざけた眞似をしたら承知しないぞ、ともう一ぺんお椀に口を持つて行つたら又チクリと來たので

「誰だツ、惡ふざけをする奴は」と怒鳴つたさうだ。

居合せた人達はびつくりして一齊に盲人の顏を凝視めた。

「どうしたんです」と一人がきくと、

「どうしたつて、おつゆを吸はふとすると誰か私の鼻を突つつくんです。あんまり馬鹿げた眞似をされちや困りますよ」と盲人はひどく氣色ばんでゐる。

はてな、と家人が盲人のお吸物を覗いて見ると、白い魚の中身から一本の細い骨が突き出てゐるのに氣が付いた。

「濟みませんでした。お魚の骨が出てゐたのです」といつて恐縮して詫びたさうだ。

こんな些細な不注意にすら、盲人の氣持ちは、亂だされ勝ちであることに深く留意せねばならない。

尺八會

私が盲學校に入つた當時は未だ初等部の校舍が出來ない時で運動場も廣々としてゐた。隣りの大學分院と塀を距てた所に幾本かの櫻の樹が植えてあつた。春爛漫の候、夕風に吹かれて花びらが運動場に雪のやうに散る風情は何ともいへなかつた。なるほど花吹雪とはよく言つたものだ。盲人ばかり集まつてゐる所でこうも美しく咲いてゐる櫻が何だか痛ましい氣がしてならなかつた。櫻も咲く場所によつては陽氣にも見え、また淋しくも感ずるものであると思つた。

櫻が散つて青葉の頃となると、盲生徒たちは樹蔭に佇ずんでよく草笛を吹いてゐた。盲學校の運動場は何時も靜かなのでよく音がひゞき渡る。

「ああKだ」

と草笛をきいて他の生徒達が集まつて來る。中に一人上手なのが居た。その生徒の吹くのを聽いてゐると、徒然の氣持ちからでなく、身も魂も草笛の中に打ち込んでゐるやうであつた。いつも淋